

太宰治著述一覽稿(X)

——昭和二十二年自七月至十二月——

山内祥史

フォスフォレスセンス・日本小説・六・七月号、第一巻第二号・昭和二十二年七月一日発行・54～57頁

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日発行）に、全文収載された。

『太宰治全集第十三巻ヴィヨンの妻』（八雲書店、昭和二十四年四月三十日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕 十返肇「太宰治編——罪と革命の意識——」（『肉体』第四号、昭和二十三年八月二十五日発行）には、つぎのように記されている。

一九四七年の文壇において、「斜陽」と「ヴィヨンの妻」は共に恐らく最も記憶されるべき作品であつた。然し、それは新しき人間の生き方を描いた作品ではなく、新しき人間を産むための倫理を示し得た作品であつた。／＼そして、氏のその様な倫理を、かの「墮落論」や「肉体主義」と並べて鳥瞰する時、僕らはここに戦後の日本文学が、いちおう伝統と訣別したという事実を確固として目撃するのである。私小説が如何に伝統的強みを持った名作を生もうとも、僕はもはやそれが支配的な力を持ち得るものではないと信ずるし、また形式は私小説で

あらうとも、今日の新しい文学の流れの中に主要な位置を占める作品は、伝統と絶縁した倫理を内容しているのを否定し得ないと思う。太宰氏の「フォス・フォレスセンス」（『日本小説』二十二年創刊号）の如き小篇ながら誰がここに伝統の「私小説」を認めるであらうか。僕らは太宰治の宿命的倫理感の表現が破壊から建設へ向う転換のうちに、まさしく時代の過渡的性格と人間の関係が鮮かに典型化されているのを見たのであつた。

〔付記〕 初出誌では、標題の下に「太宰治／野間仁根画」とある。また、初出誌は、「昭和廿二年六月二十五日印刷納本」「編輯人和田芳恵」「発行人羽田潔」「発行所／東京都中央区日本橋小網町二ノ二大地書房内／日本小説社」であり、同誌には、石坂洋次郎「馬車物語」、高見順「深淵」、森三千代「天才」、武者小路実篤「混沌」、太宰治「フォスフォレスセンス」、中山義秀「靴」、林芙美子「十字星——放浪記第三部——」等の諸作が掲げられている。

斜陽（連載）・新潮・七月号、第四十四巻第七号、「夏季小説号」・昭和二十二年七月一日発行・2～24頁・「夏季小説号」欄

『斜陽』（新潮社、昭和二十二年十二月十五日発行）に、全文収載された。

『斜陽（太宰治代表作集）』（新潮社、昭和二十三年七月十日発行）に、全文収載された。

『太宰治全集第十四巻斜陽』（八雲書店、昭和二十三年十月三十日発行）に、全文収載された。

〔同時代評〕 小原元「文芸時評」（『女性改造』第二巻第八号、昭和二十

二年十月一日発行)には、つぎのように記されている。

長編『斜陽』を二回発表した太宰はスタイルにトウ晦した一貫するモチーフをひと皮めくつてみせた点興味をもたせる。あれこれの批評に対し、不遜のスタイルをかたくなにもまもりつづけてきたこの作家が、その虚無感を挑戦的になげだしている。しかし、その戦目標がどこまでもスタイルの殻をやぶれないでいるところ、この作家の行きづまりをおもわせる。孤独の絶望感そのものがやはりスタイルでしかないことである。／『僕が小説を書けない振りをしたら、人々は僕を、書けないのだと噂した。僕が嘘つきの振りをしたら、人々は僕を、嘘つきだと噂した。』『けれども僕が本当に苦しくて、思はず呻いた時、人々は僕を、苦しい振りを装つてゐると噂した。』――『私は港の息づまるやうな澱んだ突風に堪えきれなくて、港の外は嵐であつても、帆をあげたいのです。憩える帆は例外なく汚い。私を嘲笑する人たちはきつとみな憩へる帆です。』『この問題に就いて、何も、ちつとも苦しんでゐない傍観者が、帆を醜くだらりと休ませながら、この問題を批判するのはナンセンスです。』『私は無思想です。私は思想や哲学なんでもで行動したことはないちどだつてないんです。』／『嘘つきの振りをし』『冷淡を装つて見せ』てる無思想なポーズはすでに彼の半ば本質にくい入っている。『苦しくて思はず呻いた』ことまでが、ポーズによつて半ば侵されているわけだ。苦悩が人間的な生活意思から発するものならなぜ嘘つきの『振りをし』冷淡を『装つて見せ』なければならなかつたか。なぜ『トカントントン』の音におびえる人間の実体についてきりひらこうとしなかつたのか。『ヴィヨンの妻』はたたかわ

なかつたのであるか。／どのような彼の苦悩もすべて観念の空転、架空の設定として止まり、行為の実践に打開をもとめようとしていない。その限りにおいてけつして苦悩は主體的眞実としてスタイルの枠をつきやぶりはしないであろう。『澱んだ空気に耐え切れなくなつて』きりひらくべき対象にえらばれた小説家自体がおなじように澱んだ空気のなかに混迷する存在である以上、この望みは設定された観念のおろかしいからまわりをやめることはできぬ。

須田章「太宰治・斜陽(新潮誌連載中)―れいだあす・せくしよん―」
〔『東北文学』第二巻第十一号、昭和二十二年十一月一日発行〕には、つぎのように記されている。

1、堂上華放の一家がぐずれてゆく過程をとりあげている。典型的な貴族性そのものの母。一度結婚に失敗して母のもとにいる娘。麻薬中毒にかゝつたり、終戦前後は兵隊で外地にいてPW生活の果て、混乱の内地そして転落する家庭にいら立ちながら帰つて来る弟。彼等の一家を後見的にめんどろ見ている伯父。ダダイストの作家。これだけの人物が主として点綴される。／2、小説の展開は主として「娘」の眼をカメラとして織りなされてゆく。つまりこの娘だけは「貴族転落」という歴史的的位置を感覚的にせよ若干つかみ得る近代性(人間性)を持たされている。／3、出戻り娘の饒舌の連続。この手法は太宰治のお家芸であり、その饒舌のデモニッシュな魔力に読者はぐんぐん引つばられてしまう。／4、太宰治の場合、貴族転落という階級的没落の歴史性や、そのモメントで自覚する娘という風には全然とり上げない。従つて決して「桜の園」の日本製でも無い。ただ亡びゆくものの

美しさ——を「桜の園」の作者よりも太宰の方が極度に見つめているようである。つまり形骸としての貴族的属性が現実世界で一切の權威を失つてゆく過程に涙を注ぐので無く、黙つて「美しく」描いている。／5、ところが、その限りではダンディスト太宰の一面であり、

その奥に貴族的属性を失つても遂に喪失しない人間性の不敵な成長をつづけるこの娘の変展にスポットを当てて妖しく浮き彫りしている。

／6、太宰治のニヒリズムがツケヤキバでなく比較的に世界的にニヒリズムの線に近いものを体覚している証左にはなろう。／7、エキセントリックな心理のピチカットは第二次世界大戦直後の時代感覚ではあるが、作品自体の歴史的位置は西欧ルネッサンス直後のローマン主義（つまり自然主義以前の）の位置にも比したい古めかしさである。

これが日本の社会自体の歴史的位置を作者が不識の中に象徴しているのであろうか。／8、とまれ日本現代文学の系列からは異端と見られ勝ちの太宰文学は寧ろ本格の文学を打ち立てていることにはすまいか。

手塚富雄「作品から浮いた思想——概念の苦悶が何の苦悶ぞ——太宰治『斜陽』（新潮）」（『日本読書新聞』第四二〇号、昭和二十二年十二月三日発行）には、つぎのように記されている。

このごろは小説好きの友人たれかれと、「新潮」連載中の太宰治氏「斜陽」の読後感を話しあうのが、一番楽しい話題といつていいくらいだった。さて今度尻上りの力強さで立派な完結ぶりを見せたのには、私自身快哉を叫び独り祝いの杯をあげかねまじき勢であつた。読み終つて心にボツと灯のともるような小説である。近來の快作である

ことは無論である。だが改めて批評を受け持つとなれば、そんな事ですます訳にも行かない。灯はともるけれど長く続く灯ではなさそうだ。その辺の事を考えて見よう。／太宰氏の作品は、顔にどんなに泥を塗つたかのようなことを書いても、その顔そのものは鼻筋の通つた眼のパッチリした顔である。その品のよさが人を惹くのである。

この作品ではその点腕によりをかけている。／何よりその作が魅力を及ぼすのは、この作の艶も美も、日本現在のくづれの中から生れていることである。中条百合子が大正のブルジョア家庭をひた押しに書いている（「二つの庭」等）のとは、趣が違ふのである。／ここに書かれている「秘め事」も、ほのめく恋も、今の心である。頼むべきものの何もない今の日本は、おそらく人が無精に人を恋しがろうとしている時だと思ふ。それが人間復興の第一歩だともいえる。この作にはそれが映つているのである。あのでやかに書かれた母は、焦土に生き残つて減びて行く姿である、その美しさは、今の悲しみである。読者の多くも、何かの意味で、減び行く「貴族的なるもの」を自分の中に持つていよう。そこがこの作を人につなぐのである。／○：／もし太宰の思想性という事をいうなら、その点を指すのでなければならぬ。作者の思念と情感が、作品の血肉となつてゐる場合でなければならぬ。／それに対して、この作者が概念的な言葉で思想のようなものをいう時、多くはそれは浮いてゐる。作品の骨のように見えて骨ではない。／この作では、草のように弱くアヘンにふけてやがて自殺する青年直治が、「人間はみな同じものだ」という賤民的し

つ視感に対して痛烈な抗議をする、見事である、確かにお小手を取つて、その上相手の手をしびれさせて太刀を落させるくらいの鋭さを持つている。しかしそれは評論の鋭さである。直治の死ななければならぬ必然性との程度につながっているか。こういうと作者の不満のような顔と抗議の気配が目に見えるような気がする、つながってはいないのだ、それはこの作者には、本当は草のように弱い悲しみはないからだ。／うそだと思ふなら、牧野信一末期の小説の敷衍を以て、直治の遺書に置き換えて見るがいい、それは百人の直治の自殺に値するものだ。自分の骨をガリガリとかじる文学がそこにある。それがなくて概念の苦もんが何の苦もんど。ただ作者の持味で運ぶ愛嬌の苦もんどである。／この作者が読者に、生きるための非常な度胸をつけてくれながら、その度胸が何となく腹に応えのあるものとならないのは、そのためである。私がわざわざ牧野信一の名を持ち出したのは、牧野とこの作者にはうらに密接な系譜のつながりがあると見るからである。それはここでは詳論の限りでないが、／こうして見てくると、現在の太宰の文学は、私が前に品がいいといったことを含めて、なおかつ、まだ俗である。ハツタリ苦悩と耽溺を天りんの美質がオブラートとして包んでいる。／〇……／この天りんをもつて一流の小説人となり得るかどうか。苦しい問題である。私は今のところ二つの道の可能性を見る。一つはこの人の持つであろう悲しみをそのままケレンなしに深め、その悲しみを、一切の思想ごつこを切り捨てて、そのユニークな明るい美しいおかしい世界に転化すること、そしてよき美しきフィクションに専念すること、これは度胸を超えた大勇である。ほぼ井伏の

道であるが、フィクションの面に独自の領域が開けよう。また氏のもつ特殊の思想性は必ず美しく生きよう。／もし、この道を潔しとしないうなら、持味、才分、愛きよう等の武器の意識を一切捨てて、思想的道へ突入してみることだ。／素ばくたる道、器用貧乏との格闘結局孤独への真の才能の有無が氏において一切を決定するだろう。

平田次三郎「時評の困却―文芸時評―」（『三田文学』第二十二巻第一号、昭和二十三年一月一日発行）には、つぎのように記されている。

たとえば、敗戦ごほどなく、なにものかに憑かれたかのような勢で制作をつづけてきた坂口安吾とか石川淳とか織田作之助とか、これらの作家たちの休息時がきてゐるようだ。（略）ただひとり、太宰治が『斜陽』（新潮七月号より連載）をもつて、疲労をしらぬ制作をつづけている。第三回（九月号）にいたつて、新風をまきおこすかにみえてゐたこの作品も、意外に旧套を脱しえず、かつての日の太宰調が色こくあらはれてきたの感がある。それにしても、かれの制作源泉は渴れていず、みずみずしいとはいへぬまでも、まだまだ豊かでみなぎっている。

郡山千冬「ウキ世離れず―小説時評―」（『ろまねすく』第一巻第一号、昭和二十三年一月一日発行）には、つぎのように記されている。太陽は傾きますけど、斜陽などといふことはありません。あゝいふことは小説家だけが云ふのです。貴族の没落が「斜陽」なのでせうか。そんなことはありますまい。そんな詰らないユヒを云ふ人ではないでせう、太宰治は。ただどさうかも知れない。あゝ斜陽、斜陽。陽

は傾きます、傾きます。傾かせたくないけれど、あんまり綺麗なんですものねエ、あんまり上手なんですものねエ。どうも弱ります。どこかもう少しマツイところがあると、私たち批評家は何んとか理屈がつけられるのですが、あんまりうますぎるので、たゞ嘆息してゐます。太宰治は、ほんとにうまい作家ですね。弱つた、まつたく弱つた。／＼よし、何んとか、この傑作にケチをつけてやらう。ケチはないか、ケチはないか。ございます。おカネのことを書かないのがいいかもしれません——と云ひはじめたら、実は「新潮」八月号の二回目には書いてありました。けれども、それは僕たちに縁の深い、コマかい家計簿でないから、やつぱり怒ります。もうすこし、ヤイ、現実的になれ。——でもいいかな、あそこまで——ともかくうまい作品の前では、とまどいしますよ、ね、私も批評家は。キレイな女の子を眼の前におくと、日頃の、練習に練習をつんだ口説き文句が、なかなか出て来ないのと同じさ。／＼一体、太宰治つて、この世の中に何か望みがあるのかな？ 失礼、失礼。あるんでせう。あるんでせうが、それは、そもそもどのやうな望みですか？ あんまりハツキリしない望みがあるかも知れない。どうも、判然としない人物だ。酒飲みだ、といふことだけは分つてゐます。色んな雑誌の編輯者が確言するからな。そして雑誌編輯者——ジャーナリストなどと云ふからいけない、雑誌だつて、新聞だつて、種類は多し、まさに種々雑多さ、ヴァリエティーさ、一概はいけません、だけどこの位ヴァリエティーのそろつてゐるといふ世界はないね——の云ふことは全く、十分に真実だから、だから太宰治は酒飲みだ。呑んだくれだ。この評価には間違ひない。間違ひない

して、サテ、そこから一つ太宰治論を展開しよう。／＼展開です。展開です。ギロンは展開せざるを得ない。何をギロンとし、如何なるギロンが展開するか、それは問題ではない。とにかく展開させる必要がある。／＼「斜陽」のなかの貴婦人——もつとも貴婦人らしい貴婦人として描かれてゐる人——、はなるほどその通り、文句ありません。良いな憧れるな。だけど駄目です。駄目ですよ、あれは小説の中でだけさうと思はせる力で書いてゐるので、実はそこが太宰治がトルストイにかなはないところで、小説の登場人物でないかの如くにして、実は登場人物といふのでなくてはなりません。あれは、如何にもありさうな貴族の婦人だ、だからイケない。ありさうな形を見せて、よく考へてみると作者のカイライだといふ人間を見せない。嘘がイイのです。嘘をつく、美しい嘘をつく、それを知つてゐる憎らしい奴、太宰治！ ほんとの嘘なんだらう。それを止めて、嘘のほんとにしなさいよ（キザな云ひ方だが、併し、嫌な時世に生まれ合はせた批評家はこんな云ひ方もしなければなりません）

小田切秀雄「中堅作家の職業意識——反省と建設（中）——」（「新大阪」昭和二十三年一月十三日発行）には、つぎのように記されている。

これらの作家に対して太宰治が「ヴィヨンの妻」「斜陽」等をはじめとして衰えない制作力を示しているのは興味深い。たとえば「斜陽」についてみても、こんにちの時代の激動にゆすぶられ経済的に社会的に没落しはじめてゐる小市民の感傷を、たくみなおしやべりでしかも適度に、直接小市民の没落を描くのでなく、没落する貴族をとりあげるといふやうなひとひねりひねった触れ方でくすぐるこの作家が、若

知的な読者たちの人氣の中心となつてゐるのは当然だろうが、この作家の傷つき易い感受性と純粹さとはもはや往年の「晩年」（太宰の最初の創作集）の時代と違つて、それによつて作者が傷ついたりよめいたりせざるを得ないようなものでなく、かえつてそれを意識的に創作上のものでして才能を肥え太らせるようなものとなつてゐる。制作力が盛んなのはこのためだが、傷つき易い感受性や純粹さがこのような仕方では微妙に職業意識化されている事實は、才能のはなやかな回転だけによつてはやがて若い読者をもつなぎとめることのできぬ事態に立ち至るだろう。「ヴィヨンの妻」が日常性の秩序をはみ出てしまつた日本の小ヴィヨンをとり上げながら、結局その周りの「妻」だけを達者に描き出すことに終つてゐたことにもそれはうかがわれる。

小原元「斜陽の挽歌——解体に瀕する太宰治」（『新日本文学』第一号、昭和二十三年一月十五日発行）には、つぎのように記されている。

宿命は不可視であり、不可視のなかに自意識が顕在する。二つながら、あるがままにみとめざるをえぬ近代知識人の不幸がある。不調和の両極をむすぶ統一的調和への希願がそこに胚胎する。太宰治の近作に貫流するペシミスティックなトーンの基調をなすものも、そうした可能な希願に他ならぬ。しかしながら、かれの自意識を形成する歴史的なるものの本質は、統一への希求自体に内在する矛盾を冷酷につきしめず。絶望と虚無の暗然たるただ中に坐を占めようとするものの危機はいよいよ色こくなる。調和しがたい矛盾のなかに同調を欲することは、やがて絶望、頽廢、虚無に沈湎する、生活への健常なる努力の拋棄にすたざるをえないであらう。／宿命の不可知と、意志的自

我とのきびしい対立を、対立のままに統一を欲することが、主体の分裂をはらんだ危機的様相であることはあきらかだ。どれほど熱烈に調和を求希しようとも、しかる矛盾的希いの一方をすてていづれかに投入せぬかぎり不安の彷徨はやまず、彷徨をやめぬかぎり分裂、解体は決定的であらう。そこに太宰治の直面する危機の裂け目がのぞかれ、徹底した虚無に没入できぬ不安と狂躁の風景がある。太宰の希いが、いまふたたび芥川の悲劇にちかづきつつある危険をはらんでゐるようになつたにみえる。いづれ過渡的現実に生きる小ブルジョアインテリゲンチヤの苦悶の象徴の一つともいえよう。／近作「斜陽」は、解体の危機に面した太宰治の悲鳴に似た告白であらう。／「死んで行くひとは美しい。生きる」といふ事。生き残るといふ事。それは、たいへん醜くて、血の匂ひのする、きたならしい事のやうな氣もする。——けれども、私には、あきらめきれないものがあるのだ。あさましくてもよい、私は生き残つて、思ふ事をしとげるために世間と争つて行かう。——生きるということとは不潔なことだ、しかし生きて世間とたたかうと欲する心がある。相反する二つの想念の間を動揺しながら、たたかいの目標を「恋と革命のために生れて来た」がゆえの利根的陶醉にもとめる。そこに恋の全内容を見、恋の達成のためだけの生活否定が「革命」であるといふやうな抵抗は、宿命と意志の中間に彷徨する人間の自己破壊の頽廢にすぎぬ。「何だかわからぬ愛のために、恋のために、その悲しさのために、身と靈魂たましいとをゲヘナはろなにて滅し得る者、ああ、私は自分こそ、それだと言ひ張りたいのだ。」／宿命を宰領とするがゆえの不透明の現実と意志的人間の確執に近代の悲運を見、すでに人間で

あることに宿命を見て、確執をそのものとして統一しようとする者の生にいどむ決闘は肉体を賭してなりゆきに没入することであつた。抗争は、生活人としての自己否定を代償とすることで得られる瞬間の火花であり、勝利は自己の虚無的な破壊と同義語であつた。しかも破壊のなかにちかえた勝利が、斜陽の挽歌でしかないことをたしかにみとめながら、なおそこまでひきずられねばすまぬ頹廢と、頹廢の瞬間に、「もうおそいなあ、黄昏だ。」と、敗北の勝利に陶醉できぬ矛盾と分裂に彷徨する自意識がみずからのぞんだ深淵にくらい表情をうかべるのである。それは、主体喪失の懷疑と不安の表情である。／「駄目です。何を書いても、ばかばかしくつて、さうして、ただもう、悲しくつて仕様が無いんだ。いのちの黄昏。芸術の黄昏。人類の黄昏。それもキザだね。」——「しくじつた。惚れちやつた。」……「行くところまで行くか。」「キザですわ。」——「死ぬ気で飲んでゐるんだ。生きてゐるのが、悲しくつて仕様が無いんだよ。わびしさだの、淋しさだの、そんなゆとりのあるものでなくて、悲しいんだ。陰気くさい、嘆きの溜息が四方の壁から聞えてゐる時、自分たちだけの幸福なんてある筈は無いぢやないか。自分の幸福も光榮も、生きてゐるうちには決して無いとわかつた時、ひとは、どんな気持ちになるものかね。努力。そんなものは、ただ、飢餓の野獣の餌食になるだけだ。みじめな人が多すぎるよ。キザかね。」——「絶望と寂寥、虚無と懷疑に『キザだね』『キザですわ』『キザかね』と、はじらいなしに表白できぬふつきれなさ、希みねがうものへの確信ない不安を示すものであり、絶望や虚無を現実への抵抗としてうけとめかねている太宰の彷徨の素顔で

あらう。このためらいが、特に敗戦後のかれの作品に貫流するくらい色調を、スタイルとして韜晦し、虚無的スタイルがスタイルを破壊するまでの虚無のはげしさに達しえずして「斜陽」の告白にたどりつけることになつてゐる。自己破壊、徹底的虚無が、やはりなんのすくいの道をあたえぬであらう予感のゆえのためらいであり、頹廢をもとめて虚無に徹底できず「嘆きの溜息が四方の壁から聞えてゐる時、自分たちだけの幸福なんてある筈は無い」という自覚は、太宰にのこされたわずかな健康性の存在をかたつてゐる。それは「男女同権」にも、ことによつては「トカトントン」にさえうかがわれるであらう。／しかしながら、現実のくらさの根源を社会構成にみとめた芥川が、にもかかわらず自己の宿命に破れきつた敗北の悲歌を、スタイルをこえた地点にかかげたに対し、スタイルをやぶりにえぬ健康性の僅少な残存のためにかえつて現代の危機にせまりつつあるのが太宰であるようにかんがえられる。／「斜陽」の告白が、スタイルからぬけ出ていないこと、不安や動揺がスタイル化している仕儀は、独白、会話による觀念の表白、表白の絶望が形象の感覺的トーンとしてかならずしも定着していず、絶望や頹廢のうつたえをむしろすすめている箇所がすくなくないことにそれはしめされている。感覺的表現が主要な芸術的特質にちがひなく、又、心理の形象的表現にこの作家らしい巧緻さはみせているが、「息づまるやうな澱んだ」現実に発する呻きと、象徴的、神秘的トーンの構成とが、内容の二つの面に分立しているのである。／不吉な予感としての蛇の出現に相当に重要な意味をもたせるやうな象徴的手法が、生活否定による自己確立という否定的モチーフの背景と

しての陰さんな印象をささえるものではないながら、その神秘性が現実と直結する苦悩や絶望の印象を稀薄化することになっている。必然を飛躍した観念性のなかに象徴的表現をもとめようとした意図と、告白のなまなましさが対立するかたちとなり、スタイルとそれに抵抗するものとの分裂を呈しているのだ。そこにわたくしのいう健康性の僅少な残存を示し、そのための困惑した表情をむざんに露呈したわけである。／矛盾をその主体化せんとする太宰の分裂はその分身たる四人の主要人物にもあきらかである。「日本で最後の貴婦人だった美しいお母さま」もかれの一分身であつた。その一方「僕は貴族は、きらひなんだ。どうしても、どこかに、鼻持ちならない傲慢なところがある」と吐き出す人物も太宰治自身であろう。貴族的反俗精神に牽引をいだくかたわら、反撥する市民的個人主義観に支配される、この国の近代的観念形態の一つとして、そのいずれもの歴史的解体期に面する小ブルジョアインテリゲンチヤの表情にあらわれた個人的近代の終焉を告げるものであらう。／あらゆるものへの不信、そこから虚無に生のありかをさぐろうとするむなしき努力がこころみられ、努力のむなしさをみとめたとき、「途がふさがつて、何をどうすればいいのか、いまだに何もわかつてゐないのだらう。ただ、毎日、死ぬ気でお酒を飲んでゐるのだらう」と姉のかんがえる弟は、「デカダン？　しかし、かうでもしなけりや生きてをれないんだよ。そんな事を言つて、僕を非難する人よりは、死ね！」と言つてくれる人のはうがありがたい」と自嘲し、姉が「かなしい恋」を成就し、「くしやみが出るくらゐ幸福だわ」と敗北の勝利をにがく味っている朝自殺した。／郷愁、寂寥、

絶望、虚無に、それなりの生をさぐろうとした四人の太宰治の分身のうち二人が解体した。のこされた二人の男女の解体も遠からぬことであらう。死という形をとるとらぬは別問題として。

福田清人「畸型時代の文学」(「文芸時代」第一巻第二号、昭和二十三年二月一日発行)には、つぎのように記されている。

混乱期は正統的なものは喜ばれない。破壊、破格、畸型、逆説、刺激、利那的なものを要求する。かういうものを無視して正統的なものや、理想や完全性を云々することは、ひどく甘いものにされる至極当然である。／(略)／次に考えられるものは、登場人物の無系異性である。彼等は、世界で最も重圧的であるという日本の家族制度などからとびでてゐる。私をこめて作者の多くは、地方から東京にでてきて、学校生活を送り、新市域に家を構え一つの植民生活を送つてゐるせゐであらう。登場人物たちの家族的系累といへば、細君ぐらゐなものである。こゝには「桜の園」も「父と子」も生れない。たいてい横に若い男女の問題が好んで取材される。「文学会議」の創刊号で「家の座談会を取上げてゐたが、作品活動ではまだこれといふものはとりあげられず、太宰治の「斜陽」なぞその一面にふれたものだらう。／それから又、右のこととつながるが、宙を歩いてゐる人物が多くなしい、小市民層であることである。作者そのものの、あまりに直接な投影である。

豊島与志雄、高見順、中島健蔵「創作合評会(第十一回)」(「群像」第三巻第二号、昭和二十三年二月一日発行)には、つぎのように記されている。

編集者 今回は、太宰さんの長篇「斜陽」と、梅崎さんの「日の果

て」その他の近作を中心に、集散的に論じていただくことになっております。よろしく願います。／太宰治論／中島 まず太宰君の

「斜陽」(新潮連載) という問題の小説が完結したので、これを取上げようというわけですね。僕は「斜陽」を読んで、非常に古いものと新しいものとが、ごたごたあるような気がしたんだがね。たしかに問題になる小説だと思うが、いつたいこの小説は豊島さん、成功しているのか失敗しているのか、それをひとつ……。／豊島 僕は楽しく読んだ。古い新しいということよりも、つまり太宰君のもっている一つのリズムを、ほんとに出したものだと思う。太宰君はいつも羞かむが、これにはある程度ほんとうのものが羞かまないで出ている。／中島 ずいぶん、たくみにたくんだ小説だね。人工的に構成されている小説だと思うけれど、その中に何か自分の言いたいことを一本注射して、チョビツと出しているリズムだね。／豊島 言いたいこともあるんだろう。弟の直治のところに、その片鱗が出ている。あれは太宰君としては、自分の方にうんと引きつけた人物だと思われる。／高見 直治というのは、結局昔の太宰君だと思う。だから豊島さんの言うのもよくわかるんだが、太宰君としては、これは前進的な仕事ではなく、今まで彼がよく耕やしたところで花を咲かせた、恐らく量から言っても初めていい花を咲かせたという感じですね。／豊島 これではまだ前進が足りないということ、それはよくわかる。／高見 そうです。僕は太宰君が終戦後に書いた芝居「春の落葉」と「冬の花火」には感心した。つまり、人

間のもっている心の深淵というものを覗いた。元来太宰君は、いい意味でも悪い意味でも、骨のないくらげのような作品を書いていた。

だが戯曲というものは骨がなければ成立せぬ。それがあの作品で初めて骨をもち、そのせいかどうか人間の深淵を覗いている。僕は太宰君は怖い作家になつたと思つたが、その後それが出ていない。やはり古い花を咲かしたという感じだ。／豊島 何かほのぼのとしたあたたかみを与えるようなものを書きたいし、自分自身に対しても書きたいのじゃないかな。あの直治の感想、何といったつけ……。／高見 いろいろなことを、ノートみたいにして書いていたな。ちよつと厭な感じだ。あれはそつくり、昔の太宰だな。／豊島 何といったかな。／中島 「人間はみな同じものだ」／豊島 それだ。美しいものを書くこうとする気持が根にあり、それから自然に出てくるところの、思想的な観念的なものに対する一つの反駁だと思われる。太宰君が羞かむ境地がらぬけ出して、思想問題にまで踏み込んでいくことになれば、僕は太宰君のために非常に祝福するけれど……。／中島 不健康を肯定していすぎると思う。これが太宰君の存在理由でもあるけれども、これではどうにもならぬ。／高見 彼の長所が同時に弱点だ。この作品は大変美しい花で、これはやはり独自な、ほかのやつには書けない立派なものだ。しかし、感覚的に処置していく感じ、そういう感じから太宰君はたしかに一遍踏み出したにもかかわらず、もう一遍戻っているということ、は、どうか。／中島 この「斜陽」の作中人物でも、ずつと読んでいて気がつくことは、お母さんと娘さんが、ちよつとモデルを想像しようと思つても考えられないほど、透明にでき上つ

たものだ。直治と上原二郎という小説家が出てくるが、ここに一つの謎があると思う。人物の構成からいつて、ここにはひどくなまなましいものが出てくる。／高見 つまり太宰君は、上原二郎を許さないような顔で許している。／中島 それがなくなれば、変つてくるね。／豊島 僕は、逆にこういうことを考える。この「斜陽」というのは、何かあつたんじゃないかと思うんだ。それで太宰君がそれと取つ組もうとしたんだが、取つ組むまで太宰君自身が大きくなり得なかつた。悪口を言えばそうなんだ。／中島 今の太宰君をプラスもマイナスもなく、そのまま出している小説らしい。／高見 今までの彼には、出しきつた小説はなかつた。そういう意味で彼にとつて大切な作品だと思う。ところで大切な作品というのは、作家にとつて同時に危機を意味する。／豊島 「斜陽」から、太宰君が踏み切れるかどうかということが問題なんだね。／高見 僕は、その現われを戯曲の中にみて、非常に一時感服したことがある。こういう危機を早く乗り越えて、いい仕事をしてもらいたいと思うだけに、ちよつと物足りないものを感じるね。／豊島 おそらく太宰君は、この「斜陽」から踏み切つたら、しばらくは、おもしろくないつまらぬ小説を書くだろうけれど、それをあえて太宰君にやつてほしい気もする。／高見 僕は太宰君の實際をよく知らんのだが、最近よく中央線のヤミ市で飲みみしている人達の姿を書く。そして、それを嘲笑つていような顔をしていながら、実はそれを認めて、その何かかほそい悲痛さみたいなものを、むしろ認めてやつてくれよと言つていような態度が感ぜられる。あれは、太宰君のためにとらない。／豊島 また聞きただけれど、このごろ

太宰君は、滓とりの味は人生のたそがれの味だと言つて飲んでいという。それは一種のリリズムでよいけれど、ほんとうの文学者としては、少しどやしつけてやりたいような気もする。／中島 非常によくわかる。それにはいろいろ解説を要するが、この小説からいえば、貴族は没落しなければ救われなし、また逆に没落した者はみな貴族の末みたいな、おかしな彼自身の構図がある。／高見 だから、滓とりに意味をつけるなよ。――それは、小説評にもなると思う。／豊島 僕は、こんなことも考える。太宰君は「斜陽」と取つ組んで、どうしてもこれ以上は進めなかつたという一種の限界にぶつつかつた、そんなふうにも考えられる。／中島 それは、どこだろう。／豊島 太宰君は、つまり名門の出だろう。それを自分で羞かんで、庶民意識になり下ろうとしている。そういう日常の態度が、おのずから創作実践に一定の限界を持ち来した。そしてあの世界を抱擁しきれなかつた。それ故、途中でいきなり自分の方に引きつけて、あの女の飲む小料理屋の情景とか、殊に直治の遺書などを書いた。／中島 しかし、この手法で自分の方に引きつけなかつたら、ずいぶんすぎとおりすぎた変な小説になつてしまうね。／高見 太宰君は、貴族は知らぬようだ。／豊島 それは別問題だな。／高見 ここに出てくる貴族というものは、貴族とはさもありなんといった実に通俗的な貴族だ。追いつめられていても、貴族はなお傲慢ですよ。こんなふうに貴族の女がたちまち寝てしまうというような血は日本の貴族にはない。まだまだ、傲慢無礼なる血が日本の貴族には流れている。貴族の女にそういう破格の女が、現実にはいるかもしれないが、いるということと貴族と

いうものとは違う。／中島 上原二郎というのは、庶民中の庶民で、しかも実に厭なやつだが、こういうやつとこういうふうに交際する貴族はないね。／高見 絶対ないよ。／中島 あの貴族ははなはだ怪しげなるもので、なにも貴族までもち上げないで、地方の名門でいいじゃないか。この中で、いちばん書けているようで書けていないのはお母さんだ。こんな架空なものはない。とにかく彼が、萍とりは臭いとかなんとか言つた方がいいんだ。／豊島 どうも、僕が悪いことを言つちやつた。それはそれとして、そういうところで綺麗な花を咲かせるというのはどうなんだい。／高見 妄想の美しくさ……。／豊島 妄想といつちや悪いよ。一種の反抗と言えないかね。／中島 では、つくられた抒情でいいよ。その抒情をやるのなら、上原なり直治をもつと何とかしようがある。つまりこの小説の構造でいうと、もう少し突っ込んで書いてもらいたかつた。／豊島 困つたことには蛇なんかもち出して、あれで糊塗しようとしたところが太宰君のミソなんだが……。／中島 母なんか、どうしても妙に透明すぎるね。／豊島 これは太宰君の詩として読んだらどうだろう。ポエトリーとして……。／中島 悪口は言うものの、太宰君の今までのものでは第一の作品だ。非常に才能のある人で、スタイルでも何でも新しいものをもっている。戦争にぶつかつて、永い間書けなかつた時代の蓄積みたいなものが骨組になつて出てきて、ぐつと伸びそうになつた。けれども「斜陽」をみると、まだわれわれが考えていたほど、いわゆる骨組はもつていなかったということだ。／豊島 作家が小説を書くときは、一つの世界の中で書く。円い球体みたいなものの中で人間像を書

く。その人間像が球体の中にそっくり納まる。それで、大きい球体だとわりに大きい人間像になる。太宰君は初めからある程度の大きな人間像をもっているのだけれども、羞かむので球体が縮まつてくる。そして、その中であぐらをかく。あぐらをかいて、大きい球体の中に出てゆくことが嫌になつちやつた……。／中島 それは、弁護になつていないよ。／豊島 なつていなくてもいい。／中島 そういうことになれば、太宰的作家のあり方の問題になるが、太宰君はおよそ骨組というものを初めから捨ててしまつた作家だと思う。／高見 そうですよ。／中島 その意味で「斜陽」は、ゆくところまで行つたと思う。ところが、簡単に言えば、人間像を組み立てるためには、いくら球体の中の像でも何でも、骨組がなければできない。ところが太宰君には骨組がない。しかしそれには限界があると思う。戯曲の場合には、戯曲そのものが骨組を要求するのみならず、戯曲そのものには実体をもつた人間が出てこなければならぬ。戯曲はほんとうに骨組のある顔をもつた人間をもつてこなければ成り立たない。それがこの小説では、骨組をもっているものと、もつていないものがある。／豊島 よくわかつた。ところが骨組とは何だい。／中島 骨格、人間のもつた自然的条件だよ。／豊島 もつと、はつきり説明してくれよ。／高見 僕の言つた意味は、戯曲で初めて骨組をもつたというのは前にも言つたが、骨組をもつことによつて、ある点、初めて太宰君らしい観方で人間の心の深淵を覗き得たとも言えると思うんだ。たしかにそう言える。それまでも人間の深淵を覗こうとはしているけれども、豊島さんの言葉でいえば差かんでいる。それをはつきり覗いて摘発するのではなく、何か

抒情的な視き方、僕の感じでいえば感覚的な反応のしかた、あるいは反映のしかたでこれをやつていた。ところが太宰君は芝居の方ではそうでなくて、はつきり覗いた。それは一種の骨格の上に成立させねばならぬところから、はつきり覗かねばならなかったのだとも考えられる。この作品も、その発展だと思つて読んだ。ところがそうではなくて、前の骨格のないやり方の上に成立させる彼らしい小説の集大成だった。ややもすると感覚のようなもので、人間性を処置しようとする。それは太宰君の長所だという意味でもあるんだが。／中島 どうも限りがある長所みたいと思う。／高見 太宰君は今度ここを踏み越えないと、一種のマンネリズムになる。／豊島 つまり抒情詩、あるいは絵画になつても、彫刻にならないことだろう。／高見 小説と言つてもいいと思うが。／中島 展覧会へ行つて、石膏あり、大理石あり、ブロンズがあるように、人物はみな同質でないというところに問題がある。ところが彼の作品では、人間はみな同質でなければむりなのだ。しかも、もう少し押しつめて、それをああでもない、こうでもないと言つたら成り立たない小説だ。この手は、あまり使わぬ方がいい。／豊島 作家には、ある程度ぎりぎりのところまで使わした方がいいよ。／高見 大体、ぎりぎりのところまで……。／豊島 もう一つあると思う。／高見 「おさん」(改造十月)というのは「斜陽」のあとか、さきか、いつ書いたのかしらぬが、太宰君にはこういう傾向の作品が前からある。前の作品のときに太宰君の危なさを時評で言つたことがあるが、つまり反俗というものの……だが反俗と通俗というのは紙一重で、反俗のマンネリズムは通俗なんです。だから「斜

陽」で出しきつたということにしてみたいな。戯曲の方が、ずっと怖いよ。／中島 彼は芝居の方では、怖がらせようと思つたわけでもなく、この小説の方で怖がらせようと思つたかもしれない。これ以上高見のいわゆる反俗の通俗というところへ行かせたくない。／豊島 僕はこう言う。この人には、もつとこんなものより深いものがある、「斜陽」なんというものはもう少し前のものであつて、ぎりぎりのところへ伸ばしたら、もう少ししたいへんなものになると思う。そのたいへんなものというのは、いま文学とは虚構の世界における一つの構成だと言われているだろう、太宰君はそういうことを文字通り実行している作家なんだ。それを、もう少しぎりぎりのところまで伸ばさしたい。それには肉体を張らなければならぬと思うが、肉体を張つて、その塔から飛び降りたら、どういふものができるかというと、多分非常にまずいものができるだろうけれど、そのまずいものを書く意地をもたなければならぬ。／中島 飛び降りるのには、また何年か時が要るね。／豊島 すぐだ。／高見 ただ、こういうことは言えるんじゃないか。作家には、才能のある人と才能のないのと二種類あると思うが、太宰君は非常に才能のある作家です。危機というのは、才能をやはり殺さねばならぬ瞬間があるときに、それをやらない、そのときにある。前の戯曲で怖いところを見せてもらつた読者としての僕は、もうこの辺で今までの才能は殺して、怖い方へ行くべきだということを思う。／豊島 つまり、ぎりぎりの踏切板、ターニング・ポイントというものとあると思うが、「斜陽」はまだもう一つ手前のものだと思う。／高見 伸びるときですね。／豊島

ところがおもしろいことに、アンドレ・ジイドは思想的に非常にあつちこつち行つたろう、けれども彼の作品それ自体に対する感性の問題はあまり問題になつておらないで、ただ思想的な面がおもに問題になつていただけです。しかるに日本の小説の場合においては、そういう感性の問題だけが、どうしてそう重大問題になるのかね。／中島 ジイドの場合と逆だね。／豊島 日本の文学のあり方だが……。／中島 これは重大問題だ。／豊島 おかしな状態だと思う。／高見 結局、常識的な言い方をすれば、その違いは、今までの日本の作家は、しょつちゅう感性的なところで進んできたからでしょう。／中島 戦後の作家は、そこにぶつかつてゐる。つまり感性的にだけいくのではなくにもならぬということ。／豊島 文学の動向になるけれど、われわれの座談会において、単に太宰君の「斜陽」に対してだけでなく、ほかの作家の作品に対しても、そんなふうに重要問題になるということが変なんだ。／中島 つまり、ジイドで問題にするような問題を、はつきり身につけた作家がなかつたということだけでなく、何か……。／豊島 日本では、文学評価の基準が世界的水準において、少し違つてゐる……。／中島 やはり、つくられたものをにせものと思う観念、これは江戸時代以来の随筆文学の伝統があるんじゃないか。それが小説と変に結びついたのが自然主義時代の流れであり、ジイドで問題になるような思想的な問題を、むしろ振りすてようとする形、思想をすつかり振りすてて骨抜きになつたあとで仕事をしようというのが戦争前の大部分の文学じゃないかと思う。／豊島 つまり僕は「斜陽」を推賞しているけれど、こういうことを問題にしているのは、造花の美を

云々としているような、そういうまだるっこしさが少しないかね。／高見 しかし今月はいいですよ。くだらない小説ばかりのときはたまらない。梅崎君や太宰君を論ずるのは楽しみですよ。

なお、右の合評会は、昭和二十二年十二月六日に開催されたものと推定される。

伊藤整『斜陽』と『処女懐胎』（人間）第三巻第二号、昭和二十三年二月一日発行）には、つぎのように記されている。

渡川曉氏が少し前に「斜陽」を批評した文章を私は読んだ。それはいかにも渡川氏らしい真直な性格のものであつた。その掲載紙を失つたが、私の記憶してゐるところでは、渡川氏はあの作品では貴族階級の生活や性格が現在の不安な様相で鮮明に描かれてゐることは推称に値するが、主人公の愛人である小説家が現はれる場面から後は平凡である、と言つてゐたやうに思ふ。渡川氏はこの作品の骨組みと外貌とをよく見てゐる。たしかに、もしこの作品を写生的な、あるひは現実主義的な造型方法に成つたものと見れば、そして渡川氏は正確にさういふものとして見てゐるのであつて、そこに氏らしい確かさがあるのだが、さう見れば出来のよい点とさうでない点とを含むところの、一つの風俗小説である。さういふ意味に取つてこの作品を珍重した人が多いらしい。一九四七年、日本の旧皇族の大部分は、皇族籍を失つて単純な一国民となつた。天皇の存在は神性を剥がれた。旧財閥は独占的な大産業の支配権を奪はれ、地主は土地を小作人の手にゆだねた。さういふ世情の急変の一つの場面として、日本では明治末期の通俗小説にしか描かれなかつた貴族の生活を太宰氏が描き出したといふこと

には意味が十分にあり、さういふものとしてこの作品が喜ばれたり批判されたりするのは、一九四七年においては当然のことである。／しかしさういふ客観的な妥当さの描出としてのこの小説は、渋川氏が見てゐるよりも、もつと弱く、もつと隙間だらけなのではあるまいか。

風俗の描写としての正当さは、この作にはまるでないと言つてもいいやうなものだ。女主人公の手記として見れば、さういふ貴族らしい用語、考へかたなどは、細部にはかなり気を配つて使はれてゐる。しかしその骨組み、告白、手紙、日記、思出などから出来てゐる作品構成は反自然的である。／私はこの作品の構成が、そんな風に反自然的であることに、この作家の着想のうまさを見た。いい構成である。

作家その人の見るもの、考へること、批評に対する反駁と自己の思想の明確な主張、弁護、生活の細部についての反省、読書から得たデリケートな印象、さういふ作者が自分にとつて痛切であるものの一切をクリスマストリーの飾りつけのやうに一杯にぶら下げたところの、単純な、素直な効果的な、小説構成である。／もう一つ別にそれを言へば、それは女の言葉、女の考へかたで捕へられる或種の思想、日記体の面白さ、手紙の文の効果、批評的な寸言の味、さういふさまざまなスタイルのアラベスクを生かした現代式の商品である。そして、その構成は作者の思想の力点のみを集めてゐることで反自然風であり、それだけ効果が純粹に高められてゐる。私はそこに明らかにマチスの作風を思ひ出した。あるひはそれは安井曾太郎の絵の行き方にも似てゐるやうである。太宰氏のふだんの作風は、この小説に集中されたやうな各種のポイントを一つあるひは二つ生かし

た短篇である。それ等はそれぞれに面白く、太宰氏らしい力の利いたものであつて、たとへば「ヴィヨンの妻」の如きは破れ目のない痛切な印象を生んだものであつた。しかし、私のこれまでに読んで来た範囲では、さういふ太宰的な要素がある構成の各部にはめ込まれて全体としての集中効果を持つたものには接しなかつた。そして「斜陽」は正にその種の試みである。それは太宰氏風なものの綜合である。さういふものとしては作者にとつても意味がある作品であらうし、現代の日本文学においては、近代風な写実小説から一歩進み出たところの、正に新しい小説たる純粹な思想を生かせる構成を持つてゐる。／しかし、私はこの佳作を得た作者に対してもう一つの疑問と願望を抱いてゐる。この作品と「ヴィヨンの妻」とを較べると、印象が分裂せず澄んだ一体となつてゐることで、「ヴィヨンの妻」に「斜陽」は及ばないやうである。「斜陽」においての各細部は平面的なアラベスクであるが、それが生きた層をなして、印象の有機的な、つまり作品が一個の生命なつて集中するといふその集中性に欠けてゐると思ふ。性急といふことが太宰氏の特徴で、それによつてこの作家は短篇の効果をいつも得て来た。その性急さを、この長篇的な作品でまた氏は使つてゐる。叙述の、つなぎの、無意味に見える小説の部分にこの作者は我慢ならないのである。そしてその我慢のなさが、氏において、日本の新しい現代小説の成立を方法的でなく氣質的に成立させた。しかし同時に「斜陽」は細部の現れかたの緩急の呼吸を乱し、多分持ち得たであらうところのより集中された生命的な力を逃がすやうな結果となつた。／私は矛盾したことを言つてゐるであらうか。現代の芸術がマチ

スや曾太郎に見るやうな純粹化によつて反自然となるのが必然であれば、効果の自然な力のために改めて自然な非集中的な部分を補ふ必要があらうか、といふ疑問にぶつからざるを得ない。これは私も確信をもつて決定しがたいことであるが、そこに、一見不可能に見えて、しかも当代の作家が実践的に解決しなければならぬ場があるやうに私は感じてゐる。(略)

神西清「斜陽の問題」(「新潮」第四十五卷第二号、昭和二十三年二月一日発行)には、つぎのように記されている。

客(洋画家)——いい天気なので、どうかと思つたが、よく家にゐたね。／主人(私大講師)——まったく二月にしちやあ、もつたいないほどの好日だ。君こそ、絵具箱を背負はずに、よくも鎌倉三界までやつてくる氣になつたものだね。……さしづめ、ようこそエルシノアに御入来! とでも挨拶しなくちやならんところかな。／客——そりや、ハムレットのセリフだつたかな? いや、正にその通り。今日は君と文学談をやりに来たんだよ。／主人——へえ、こりや驚いたな。……古典劇でも論じますか?／客——ところが大ちがひ。今日も今日、できたてのはやはやの文学なのさ。／主人——ますます畏れ入つたね。今日と言やあ、てつきりサルトルだらうな? それともAさん? F先生?……いや驚いた。由々しくもラファエロ前派たる君に、そんな道楽つ氣があらうとは思はなかつたよ。／客——あいにくとみんな違ふね。ぼくが君に吹つけようといふのは、ほかならぬ太宰論なのさ。／主人——ダサイロン? ぢや、モーリャックのことでもあるのかい? 墮罪論と言やあ。……／客——血のめぐりの悪い

男だな。太宰治だよ、『斜陽』だよ!／主人——ほう。君が太宰さんの愛読者だとは、今の今まで知らなかつたな。／客——いやなに、愛読者といふほどでもないがね。つい半としほど前、あの人の『女の決闘』といふのを汽車の中で偶然よんでね、久しぶりで何か歯ごたへのあるものにぶつかつた氣がした。それから岡山の古本屋で『新ハムレット』といふのを見つけて、宿屋で読み、ますます只者でない感を深うした。それが病みつきでね、目につくたびに作品集を買ひあつめて、その都度どの作品からも、紛れもないボルドオの香氣がぶうんとするのに驚いてゐる次第だ。合成酒だのカストリだのメチールだのの横行する中で、こりや君めずらしいことだよ。今度でた『斜陽』で、たしか七冊か八冊目の読書になるわけだが、この作に至つて太宰芸術は、まさにシャラント産コニャックの芳香ありといふところだ。／主人——いやに感心したもんだな。／客——そうら、そんな風に一応は冷淡に構へてみせるところが、君たち教師商売のわるい癖だよ。せつかくの美酒を前にして、なぜもつと素直に酔へんものかねえ?……いつも酔つてをれ、酒で、詩で、徳で……と、君たちの師匠、ボードレール先生も言つたぢやないか? まつたく氣の毒みたいなんだよ。／主人——いや、さう言はれると、まったく面目次第もないが。……おれは人生の方針を誤まつたよ。まあ思つてもみたまへ——君は旅先で、のうのうと解放された氣分になつて、一篇また一篇と、アベチイの赴くがままに読み味はへる御身分だ。ところが僕たちと来た日にや、毎月すくなくも三十冊ぐらゐの文学雑誌——いや、雑誌文学を、是が非でも嘆みくださんことにや商売にならんのだからねえ。……い

つそ株屋の番頭にでもなりやよかつたと、近頃つくづく思ふよ。／客——ふん、冷淡のお次は泣言かい？ まあいいや。ところで君は、あの『斜陽』といふ小説は読んだのだらうね。／主人——うん、雑誌に出たとき一とほりはね。本になつてからはまだ読むひまがないが。

……／客——気の毒な男だな。あの作品は君、月割りに小切つて読むのぢやなしに、首尾のととのつた全一な形において、一気に（と云つても必ずしも急がずに）味はふべき作品だよ。少くもさうした味はひ方をされる資格のある、戦後に現はれた小説のうちでは稀にみる立派な形式をそなへた、コクのある作品だよ。僕は昨日は一んちアトリエに引つ籠つて、珍らしく配給になつた粗朶をこつそりストープにくべながら、これで三度あの作品を通読したといふ次第なのさ。そして楽しみしみ、じつに色んなことを考へた。もちろん僕は素人だから、その感想を一貫した形にまとめあげて、君の前でヒレキするなんて芸当はともやれる自信はない。まあそのまとめ役は君に一任するとして、今日は一つ勝手な熱をあげさせて貰ふつもりで、かうしてウイスキイ持参でやつて来たんだが。……いいのかい、その机の上の原稿は？ 今日とりに来るのだが、まだ書きかけとでもいふのぢやないかい？／主人——いや、構はない。相変らずの時評風の雑文で、あと二枚も書けばいいんだ。それに些か種の方も心細くなつて矢先だから、案外きみの素人談義から何かヒントでも失敬できるんぢやないかと、実は少々たのしみなくらゐだよ。／客——はは、それもよからう。ところで僕の論題は、とりあへず『斜陽』の問題——とでもしたいところなんだが、考へやうによつては、このカツコが邪魔になつて

くるかも知れん。カツコを外すと、斜陽の問題といふ頗る象徴的な題目になるわけだが、まあ僕の話はこのカツコを出たりはいつたり、出沒自在をきはめるかも知れんから、その点はあらかじめ覚悟してくれたまへよ。／主人——うん、わかる。その辺のことは僕もうすうす考へないぢやなかつた。面白さうだ。話したまへ。／客——それほどでもないが。……さうさな、ぢやあまづ、構成の問題から行くとするか。それかと云つて何も僕は、我田引水の構図論なんかやるんぢやないから安心したまへ。話はむしろ音楽の畑になるんだが、実をいふと僕はあの『斜陽』を二度三度と読んで、モーツァルトの或る種の楽曲が思ひだされてならなかつた。ひと口に言へばつまり、あのハ長調の絃楽四重奏曲を、カペーの盤できいてゐるやうな感じだよ、あの作品は。さう、聞いてゐる場所は、どこか京橋の裏通りへんに、ぼつりと残つてゐる半焼けビルの四階あたりの、あまり人に知られないバアか何か。時刻は冬の午後三時すぎかな。しかもそれだけぢやない。さうしてあの四重奏にききとれてゐるうちに、どこからともなく——それはひよつとすると、大分ひびの入つてゐる窓ガラスを色がみか何かで張りふさいだその隙間から、冬風とともに忍びこんでくるのかも知れないがね——まるで古い記憶の底から浮びあがつて来でもするやうに、同じモーツァルトの例へばあのト長調のフルード協奏曲か何かの調べが、とぎれがちに、しかもまつはりつくやうに、忍びやかに聞えてくるのでなくてはならん。……だが君、これは断じて回顧趣味でも何でもないんだよ。まさしく今日なんだ。今日の時の東京には、いや日本には、さういふ時がまさに存在するんだよ。まぎれもなくそ

れは、われわれの「自然」の一部なんだよ。しかも或る深さと拡がり
とを具へてゐるところのね。……分るかい？／主人——だいぶ念の入
った環境描写だね。まあ大体わかるやうだ。で、肝腎の『斜陽』はど
うなるんだい？ まさか、その破れガラスに西日が射して……なんて
いふ落ちでもなさうだが。／客——うん、それがだね。僕はどうか
あの作品には、何かかう非常に微妙な音楽的構成があるやうな気がし
てならないんだ。いったい太宰といふ作家は、一般には才気カンパツ
たる抒情性を高く買はれてゐるのぢやないかね。その抒情性によつて
奏でられるものは、いふまでもなく或るめぬめぬたる一脈の哀愁だ。

その哀愁は、もう一步つつ込んで言ふと、ほとんど離愁にすら似てゐ
るやうに僕には思はれる。つまり郷愁よりもずっと生なましくて、そ
れだけまた、回顧的ではなく、却つて現在の・今日的であり、直接的
でさへある哀愁なのだ。僕は素人なので、こんなたどたどしい言ひ廻
ししかできず、じつは歯がゆい極みだが……さうさな、ここらで一
つ、迷惑かも知れないが井伏さんに立会つてもらふことにしようか
な。あの『富嶽百景』といふ作品は、太宰さんのものの中でもまさし
く代表作の一つだらうが、同時にまたあれは、井伏・太宰両作家の血
縁関係の限界をはつきり見せてゐる意味からも、なかなか面白い作品
だと僕は思ふんだ。見方によつては、あの『百景』の世界ほど井伏さ
んの世界に瓜二つなものも珍らしからう。ところが、見方を変へる
と、あれほど別れ別れの生き方をしてゐる世界も少ない——とも言へ
さうだ。あれは結局、情感のたたずまひといふか布置といふか、それ
がたまたま酷似してゐるに過ぎない。つまり靜的に世界を見た上での

話だつたのだ。一たびその両世界に運動をゆるし与へると、とたんに
瓜二つのその情感の世界は、似もつかない別々の位相をあらはしはじ
めるのだよ。哀愁のすがたそのものは似通つてゐても、いはばその向
きがちがふのだ。井伏さんの哀愁が、すでに全く絶縁されて終つてゐ
る或る心の古里への郷愁が現在の面に描きだす物靜かな反映であつ
て、したがつてその作品の湛へてゐるペーソスは、ゆるやかな渦まき
——つまり一つの円運動として表象されうるに反して、太宰さんの哀
愁は、ほんの今しがた、それも何かしら突発的な乃至は暴力的な事情
によつて、むざんに引き離された或る心の古里への断ちがたい執着が
(いや、「断ちがたい」どころではない、まだその古里とのつながりは
完全には絶たれてをらず、両者をつなぐキヅナは伸びきつたまま、な
ほ脈々と生温い血を通してゐるんだが——)、現在の時へくつきり
と投影した、いはば一つの矢じるし、つまり数学でいふあのヴェクト
ルなんだよ。それは紛れもない一つの直線運動であり、思ひきつて言
つてしまへば、刻々に血を噴く烈しい飛翔なんだよ。つまり離愁なん
だよ。……／主人——なるほど、だんだん分つてくるやうな気がする
な。絵かきにしちや珍らしく、君には運動感覚があるやうだ。よろし
い、どしどし先を続けたまへ。／客——困るね、さうませつ返しちや
あ！ ええと……つまりさういつた哀愁、じつは離愁そのものに、心
をひかれるやうな読者も少なからずあるに相違ないんだが、ところで
太宰という作家のもう一つの著しい特質は、さうした抒情性の流露
が、常にカンパツたる才気をバネとして、いはば進めるがごとくに行
はれるところにある。非常にきららかな、突発的な流露の形をとると

ころにある。したがって彼の作品は、とすると即興的といった風の印象を生じやすい。いわば才にまかせて歌ひ流す——とでもいつた印象をね。これは実のところ、太宰といふ作者のもつ近代性の最も明白な証拠の一つなんだが、勿論そこに惚れこむ人も広い世間にやかなりあるには違ひなからうけれど、その一面そこに却つて反感をそられるやうな読者も、決して少なくはないやうに僕は思ふな。つまり彼らは、他ならぬそのきららかな才氣、そのカンパツたる即興性によつてまづ誘惑されたくせに、忽ちまたその同じ原因によつて反撥するといふ連中なのだ。よくある型だよ。まあこの辺にも、太宰といふ作家のしよつて生まれた一種不幸な宿命——いはば孤独者の宿命の一部が、読みとられないものでもなささうだ。ところで僕は今、太宰文学のこの見せかけの即興性に、すこぶる疑問を抱きはじめてゐる。あのピチピチと撥ね返るやうなハツラツたる才氣の裏に、何かしら容易ならん問題が横たはつてゐるやうな氣がしてゐる。まだはつきりそれと断定できるまでには行つてゐないが、ひよつとするとあの才氣と見えるものの本質は、僕が今しがた言つた離愁——つまりあの直線運動に、直接つながつてゐるやうな氣がしてならない。……／主人——うん、さう言へばあの太宰さんの才氣は、一応はいかにも近代人らしい、乃至いかにも都会人らしい照れかくし——の匂ひが強くするものだが、案外君のいふとほり、その血を噴くやうな烈しい離愁とやらに、本質的に根ざしてゐるものかも知れないね。そしてまた、井伏さんの世界にただよつてゐるやうな哀愁のなかなるユーマーの感じが、太宰さんになると全く消え失せて、何かもつと身もだえするやうな、

やるせない、けいれん的なコミックの感じによつて取つて代られてゐる理由も、君のやうな考へ方をすると、だいぶ分つてくるやうな氣がするな。……いや、いづれにせよ、無愛想な君のなかに、太宰的ダンディズムのよき理解者が住んでゐようとは、今の今まで思つても見なかつたよ。さすがはホイッスラーの末裔だけのことはあるな。／客——お褒めにあづかつて光榮だよ。光榮といでにもう少し喋らせてもらふことにするかな。……まあそんな風に僕は太宰的才氣なるものを解釈して、したがつてあのはべの即興性を強く否定したい氣持なんだが、さらに僕のこの否定に有力な地盤を与へてくれるものは、あの人が時によつてズバリと見せるところの、おそろしく手堅い、すばらしい構力だよ。そのことは、さつきも言つた『女の決闘』や、或ひは『新ハムレット』のやうな作品をゆつくり読んでみれば、思ひ半ばに過ぎるものがあるはずだが、わけても今度の『斜陽』になつて、非常な高さに達したものと云へるだらう。さつき僕は、『斜陽』を読んでゐると、しきりにモーツァルトの或る種の楽曲が思ひ出されてくると言つて、一派の哀愁のかげりはあるながら明るく跳ね躍るやうな嬉遊性に富んだあのト長調のフリユート協奏曲や、たゆたふ狭霧のひまから見えがくれする秋の夕ちかい湖のおもてにも似て、けぶらひがちに澄みとほつてゆく哀愁をたたへたハ長調のクワルテットを持ちだしたりしたが、あれは勿論、太宰文学の世界をささへてゐる二重性——つまりあのカンパツたる才氣と哀切なる抒情との宿命的なからみ合ひ、もつれ合ひを、例へば今いつた二つの曲がもつれから聴覚的印象に置きかへて見たかつたからでもある。しかも、単にそれだけのことで

ないので、実はもう一つ、僕にはちよつと大切に思へることが言ひたかつたのだ。それは言つてみれば、あの『斜陽』といふ作品が、相も変らず見せかけの即興性、ないし軽快な踏みはづしや破格にすこぶる富んでゐながら、その骨格は案外なほどがつしりした音響的構成をなしてゐるといふ事実だ。僕はためしに、あの作品を楽音の流れに翻訳してみて、そのみごとな構成ぶりにちよいと呆氣にとられたね。断わつておくが、僕はそれを作者が意識的にやつたとも、或ひは作者の天才(と言つていいだらうが——)が無意識的にやつてのけたのだとも、言ふつもりはない。そんなことは君たち職業批評家に恰好な題目でこそあれ、僕たち門外漢の知つたことぢやないよ。僕の望みは要するに、あの作品がいかにイハユル即興の概念から懸けはなれたものであるかを、一応説明すれば足りるのだ。／主人——こりやどうも、えらいことになつたもんだな。まあ仕方がないや、後学のため伺つておくとしようか……。とにかく今日は、思ひつきり君に吹きまくられるなあ！／客——なかなか殊勝な覚悟だ。ぢやいいね、以下が僕の試みた恐らく甚だ笑ふべき翻訳のアウトラインだ。……まづ全曲を、ひとまづ従来の約束をおもんじて、四つの楽章に分けることにする。そして一応は例のソナータの約束に適應させうるでもあらうかといふ予想のもとに、物語の進行を楽句の進行に翻訳して行く——といふのが僕の採用した方法なんだが、君はどうやら雑誌で、かなりの時の間隔をおいて読んだきりで、記憶もだいぶ薄れてゐるらしいから、以下おほよその筋の運びを追ひながら説明して行くことにしようね。……まづ第一楽章だが、最初に「ほんものの貴婦人の最後のひとり」である「お

母さま」が紹介される。彼女が、真にまがひものならぬ貴族ならでは企てえぬ上品な「破格さ」をもつて、いかにスーブを口へ運び、いかに骨つきチキンを賞味し、いかに月見の晩にお庭の萩のしげみにひよいと隠れてオシッコをしたか——といふことが物語られる。この部分はまあ物静かな導入部といつてよからう。主題はまだ現はれてゐないが、それへの暗示的效果はまず十分と言つていい……。ところで、僕は敢て話の腰をみづから折つてまで、ここでちよいと註釈を加へておく必要を感じるんだが、『斜陽』全曲を通じて重要ないはば背景的人物として、低音楽器の役割をつとめるこの「お母さま」は、察するところ作者にとつて一ばん扱ひにくい性格であつたに相違ない。それは、やがて第三楽章におけるお母さまの死に至る瞬間まで、この人物を扱ふ作者の手ぶりが終始おそろしく慎重をきわめ、間々あたかも腫れ物にさはりでもするやうな観を呈してゐることからしても、よく分るのである。にも拘はらず、とにかくその瞑目の瞬間まで、この難物の低音楽器を大過なく鳴らしつづけた作者の力量は、まさしく高く買はれて然るべきだらう。ただし時として、作者は苦しきまぎれか非ずか、奇手を用ひて俗眼をあざむくといふ例のラブレエ伝来の秘訣に、いささか頼りすぎた傾きがないでもないやうだ。その甚だしき一例が、この萩のしげみのオシッコの件である。これは實際ケレンも甚しい作者一流の魔術であつて、なんぼ敗戦国だとはいへ苟も貴族の大夫たるものが、所もあらうにさしてトイレットからほど遠からぬ自分の邸の庭さきで、しかもいくら出戻りの身だとはいへ他ならぬ自分の娘の面前で、しかも且つ月夜の晩に、さういふ振舞ひに及ばうなどいふこと

は、絶対にありうべからざることに属する。いや、あり得べからざるばかりではない、それはやがて女人の一命にも関する由々しき一大事にぞくするのだ。嘘だと思ふなら、今昔物語の巻二十九、第三十九話をごらんなさるがいい。同じやうな話は、後崇光院の看聞御記の、応永二十三年だかの夏の記事にも出てゐる。かういふ時世になると、えてして女のたしなみとかエチケットとかいふものを、何か封建的な非民主的なもののやうに考へて快とする傾きを生じがちのものが、どうしてなかなか昔ながらの習俗といふものには、案外ばかにできない科学的な一面が……／主人——おいおい、何を言ひだすんだい？ さう一々微に入り細をうがつてゐちやあ、四楽章のフィナーレまでは、幾んちかかるか分らないぜ。／客——失敬々々、つい僕のわるい癖が出ちまつたんだ。君の前で女性のエチケットを説いたつて、始まらなかつたなあ。……そこで、話は一転して蛇の登場になる。今も言つたあの今昔物語ふうの蛇なんだよ。そして、「自分の胸の奥に、お母さまのお命をちぢめる気味わるい小蛇が一匹はいり込んでゐるやうだ」と、主人公のかず子を感じる条りに及んで、果然この曲の第一主題ははつきりと提示され、高らかに響きわたるのだ。以下、この母と娘が伊豆の山荘に移り、小火さわぎがあり、かず子が戦時中の徴用生活を回想するところまでは、転調楽節の定石をみごとに踏んでゐるものと云へるだらう。そこへ第二主題が提示される。弟の直治の人がらが物語られる条りがそれだ。それから稍あわたしい展開部を経て、やがてふたたび第一主題——つまり、娘かず子の胸のうちなる運命への抗議が高々と奏される。人間が他の動物とまるつきり違つてゐる点は、

言葉をもつことでも智慧のあることでも、思考や社会秩序や信仰を有することですらなくて、ただ一つ、「ひめぐ」と持つといふ点だけだ、とかず子の考へるあたりがそれだ。やがて濃紫のパラの花が一輪、りんとした傲りと強さを見せて咲き、かず子は自分の不満を、「子供が無いからだ」といふ一句をもつて表象し終へる。それで第一楽章は閉ぢられるのだ。(F)。……。まあこんな工合に解きほぐしてみると、僕のいふ第一楽章なるものが、アレグロの速度をもつて演奏される立派なソナータ形式を具へてゐることが、大よそ分るだらうぢやないか。／主人——なるほどね。まあさうも考へられるだらうな。／客——気のない返事だなあ。……ぢや僕もそのつもりで、あとは簡単に進行することにするぜ。——そこへ弟の直治が生きて南方から還つてくる。かず子が弟の昔の日記を盗み読みする。それはモヒ中毒患者の狂はしい告白だ。聯想がかず子を、まだ初婚時代の六年前の或る出来ごとへ連れてゆく。彼女は直治の師匠である頹廢的な小説家、妻子のある上原をおとづれ、一緒に散歩し、キスを奪はれる。やがて離婚、死産。……ふたたび現在。かず子の反逆といふ第一主題はここで上原へ宛てられた彼女の三つの手紙として立てつづけに変奏され、ぐんぐん高潮してゆく。その第一の手紙の結びで、初めてM・Cといふ謎めいた呼びかけが使はれる。それをかず子は、マイ・チェホフとみづから解読してみせる。けれどM・Cは今のところ、或る漠然とした題望をあらはす暗号にすぎないからである。やがて第二の手紙では、この願望に、「おメカケでもいい。私はあなたの赤ちゃんがほしいのだ」といふ、はつきりした言葉が与へられる。ついで第三の

手紙になると、M・Cといふ暗号は俄然 My child と解読されることになる。けだし、もはや上原それ自体は後景へ押しつけられて、受胎と分娩といふぎりぎりの悲願に、彼女の全身全霊は絞りをかけられたのである。(p.131)……以上が第二楽章を成り立たせてゐる楽句のあらましだが、君はそこに、まぎれもなくアレグロ・アッサイの激しいテンポをもつて強奏されてゆく三拍子のスケルツォを、まざまざと聞き取りはしないかね？／主人——ふむ、まんざらコジツケでもないやうだな。で、あとの二楽章は？／客——第三楽章は、ひろびろと緩やかなラールゴのテンポをもつて奏される稍々小唄風の葬送曲だよ。もつとも母の発病から臨終へと引かれる一つの意想の流れと、むう一つ、娘かず子の反逆思想がしだいに一そう烈しい破壊思想へまで昂まつてゆく別の流れと、——さうした二つの主想が交互にあらはれつつ進行してゆくところを見ると、やはりこの楽章の形式は、定法どほりのロンド形式と呼んで差支へないやうに思はれる。そして、母の美しい死顔のうへに、この楽章は流れいるやうにして終結するのだ(rit.)。／主人——なるほどね。それは小説でいふと確か第五章にあたる部分だったと思ふが、あそこではたしかに、古き母の何かしら艶かしい過ぎ逝きと、新しい母の荒々しい誕生と——この二つの母性の入れかはりの経過が、一種かう象徴的な手法でもつて処理されてゐるね。僕もあのへんは妙に印象が深かつたものだが、君があゝの章だけを独立に取りだして、ロンド形式のラールゴの章と名づけたのは流石だよ。／客——やつとこさで褒めてもらへたね。……さて、以下のこる部分が第四楽章で、つまりフィナーレを形づくるわけだが、それは小説でいへ

ば第六章と七章だ。ここでも、第一楽章に現はれたと同じ二つの主題が、こもこも出没しながら、猛烈なアレグロでもつて強奏されてゆく。「戦闘開始！」を宣するトランペットの高らかな響をもつて始まるこの楽章の形式は、しかし最早ソナータ的ではなくて、著るしくフーガ的である。二つの主題——その第一は新しい母性倫理へめざめたかず子が、みずからを美しい犠牲として新道徳の祭壇に捧げるため、まつしぐらに突き進んでゆく勇ましい姿だ。その第二は虚無にむしばまれて、まつさかさまに死の淵へ転落してゆく弟直治の姿だ。この第二主題はさらに、直治の胸に秘めたいみじくも文芸復興期風の片恋に転調され、その一ばう第一主題はまた、上原たち頽廢の文士連中がかもし出す「いのちの黄昏、芸術の黄昏、人類の黄昏」このユトリヨ風の黄ばんだ光線にみたされた風景と、たえず対比されながら進行してゆく。追覆また追覆。……そしてとつぜん奇蹟があらはれ、犠牲が成就する。かず子は敗徳者上原によつて受胎したのだ。見よ、新しい「聖母」のすがたが、満身に斜陽をあびて、この時くつきりと地平線に描きだされる。しかもこの「聖母」の胸には、ある悲願が秘められてゐる。それは、やがて生まるべき子を、肉身の弟直治の哀れな恋の形見と錯覚したいといふ、妖しい夢想である。……美しいカデンツァだ。ねえ君、さうは思はないかい？ まつたくこの結末は、この斜陽のなかに立つ母性のすがたは、その華麗・莊嚴・哀愁をきめた映像は、まぎれもなく聖書的でさへありはしないかい？……僕はこの『斜陽』一曲を、もし許されるなら、聖書の主題によるヴァリエーションとでも呼びたいと思ふよ。絵で言へば君、さしづめあのフラ・ア

ンジェリコだ。あのコルトナ受洗堂の受胎告知図だよ！／主人——ふむ、どうもえらく感激しちまつたものだ。もつとも僕も、だんだん君の高説を伺つてゐるうちに、ちよいちよい思ひ当るふしもあるやうな氣がして来たよ。とにかく君にその本を借してもらつて、もう一度じっくり読みなほすことにしようよ。……ところで君は甚だ御苦労千萬にも僕ごとき耳つんぼのために、『斜陽』をわざわざソナータに仕立て直して聞かせてくれたわけだが、すると何かい、つまり太宰といふ作家は決して只の才氣一本の作家でもない、いはゆる即興家でもない、ましてや一部のゾーイルスが言ふやうに飄々たる一介のピエロでも断じてない——そんなものは彼のほんの属性の一部であつて、その本質はもつと嚴肅な、もつと端正な、もつと……／客——さうだ、太宰文学の本質は、つきつめて言へば君、祈りだよ。僕はさつき「離愁」なんていふ言葉を使つたが、あんなことぢやまだまだ言ひ足りないのだ。一つの強烈な矢じるし、身も世もあらず飛翔する一本のヴェクトル、——つまり祈りなんだよ。その逞ましい幻想の力に鎧はれた信仰、その聖約の古里へのすばらしい幻視の力……まさしく彼は、今日のフラ・アンジェリコだよ。もつとも、いまわれわれの住んでゐるこの今日といふ現実のなかで、その折る人の姿勢がどういふ形をとらなければならぬか？——といふ問題は、またおのづから別問題ぢやあるけれどもね。……さうさう、君は今しがた、一部の口のわるい連中が太宰さんのことをピエロと呼んでゐるとか言つたやうだつたが、その連中はいつたい、あのピエロといふ世にも微妙な存在をどんな風に考へて、それを言つてゐるのかな？ 解釈のしやうによつては、僕

もその定義に、まんざら惹かれないものでもないがな。……／主人——なに、ただちよいと氣の利いた悪口のつもりだらうよ。第一きみ、この国の舞台に、ほんもののピエロの登場する機会なんか、ありやう例しがないぢやないか。とにかく僕は、この年になるまで、ピエロが優にめでたい立役を演じてくれるパントミームなんかには、日本の舞台で只の一度だつてお目にかかつたことはないよ。……つまりその点でも、日本は実に歎賞すべき後進国だ。そのくせアチラの最も美しい觀念だの言ひ廻しだのを、身すぎ世すぎのため只がむしやらに使ひたがるところのね。／客——いや、話が少し理に落ちたやうだ。まあ日本の話はこの辺でやめにしようぢやないか。あまり突つくと、どうも憂鬱でやりきれなくなるよ。／主人——まつたく懐かしいなあ！ ギニョールのピエロ、あのショウヴ・スーリのピエロ！ さうさう、太宰さんの『新ハムレット』のなかに、亡霊に扮したハムレットが、「この世では、輕薄な者ほど、いつまでも皆に愛されて、仕合せだ」とかいふ台詞を述べるところがあつたね。あの文句が妙に耳について、未だに離れないが、つまりあれが君、まぎれもないピエロ精神の真髓だよ。太宰といふ作家は、ちやんとそれを知つてゐるんだね。／客——うん、ハムレットといへば、フランスの象徴詩派の流れを汲む自嘲家ラフォルクにも、『ハムレット』といふすばらしい小説があつたつけない。さうだ君、およそピエロといへば、あのラフォルクほどに完璧な定義を下した詩人は、あとにも先にもまづあるまいよ。一つ歌はうかな。／主人——ああ、やりたまへ。／客（歌ひだす）／……恋しいな、／キザな奴らの居ないところ、／錢やオジキの無いところ、／無駄

な議論のないところ。／また一人、ピエロが／慢性孤独病で死にをつた。／見てくれは可笑しな奴だつたが、／そのくせ垢抜けのした奴だつた。／また、こんなのもあつたな。——／嘘のハキダメミタやうな／歴史も自然も何もかも／わたしはすっかり知つてます。／ちよいと皆さんに申しあげますが／わたしは真面目で言ふのです。……／これこそ本当のピエロだよ。ちよつびりかう可愛らしい、そのくせ何処となくおつかない奴らだなあ。人間ピエロに化けることができるやうになりや、大したものだよ。／主人——全くその通りだ。……おや、いつの間にか薄暗くなつて来たな。いくら春めいたといつても、冬はやつぱり冬だな。あかりをつけようか？ 寒くはないかい？ もつと火のそばへ寄りたまへ。……

堀田重樹「自虐と絶望（主として『斜陽』読後感）」（「新樹」第十号「特輯太宰治論」昭和二十三年三月一日発行）には、つぎのように記されている。

「斜陽」の直治は母の死を前にしてうそぶくのである。／「なんにも、いい事が無えちやねえか、僕たちには、なんにもいい事が無えちやねえか」／こゝにも戦争の犠牲を真向に受けた人々たちの愁歎場が見られる。戦後のどさくさにまぎれて、しこたま新刊を揃集めたあぐどい連中ならいざ知らず、まづとうに生きてゐる人間達にとつては、「いい事」なんて無いのである。「なんにもいい事が無えちやねえか」と言ひながら、滅茶苦茶にこぶしで眼をこする直治の絶望感は、現世に生くる大多数の人間たちの真実の姿なのである。太宰治の、ところきらはずふりまく絶望の叫喚は、絶望の淵に彷徨しているそれらの人

間たちの深衣をえぐらずにはおかないのである。／「もうだめだ。だめなのだと、その蛇を見て、あきらめが、はじめて私の心の底に湧いて出た。お父上のお亡くなりになる時にも、枕もとに黒い小さい蛇がゐたといふし、またあの時に、お庭の木といふ木に蛇がからみついてゐたのを、私は見た」／太宰はまた、執拗に陰惨なものを持つて来るのである。蛇といふ奴はけつして人間に明るい感じをあたえ得る動物ではない、身の毛がよだつ、太宰はこの蛇のやうな執念深さでもつて、自虐と絶望の真中で、酔ひどれながらも己自身の文学を守り通はそうとしているのである。この作家の一貫した執念には、何としてもかぶとをぬがねばならない。多角的な職人根性で荒稼ぎをつゞけている作家や、流行の肉体を追つかけ、自らの探究を怠り御都合主義のきものはもの作家たちの氾濫する世界に、太宰は脇目もふらずに、一つの根性を持ちつゞけてきた作家なのである。「駈込み訴へ」「女の決闘」から「春の枯葉」「冬の火花」「斜陽」に到る間の足どりの中には、一定した作家の執念が恐しいまでも刻み込まれてゐるのである。織田作のヒロポンによる自虐がこれに相通ずるものである。織田作の執念といふものはけつして第二流どころにとどまるものではない。作家の持ち続けてきた執念といふものの恐しいまでの尊さといったものに、私はつく／＼と考へさせられるのである。／坂口安吾が、どぎつい紫色のおんびき蛙なら、太宰は酔ひどれた灰色の蛇なのである。／「斜陽」では、太宰は綺麗事に終はらせようとしたのだが、どうせ、デカダンという黒い沼のほとりに、とぐろを巻いている灰色の蛇は、つひに尻尾を出してしまつて、陰惨なる自虐と絶望にまで作中人物を

引摺り込まねば承知が出来ないのである。／「斜陽」では父も死んでしまひ、今度は母もまた没落の絶望の中で血へどを吐いて、顔や腕が腫れあがり、蛇の夢を見て死んでしまふのである。そして、私といふ女主人公のみが、ただえの呼吸の中で、／「けれども、私は生きて行かねばならないのだ。——私はこれから世間と争つて行かねばならないのだ。——生くるといふ事。生き残るといふ事。それはたいへん醜くて、血の匂のするきたならしい事のやうな気もする。私はみごもつて、穴を掘る蛇の姿を畳の上に思ひ描いてみた。——あさましくてよい、私は生き残つて、思ふ事をしとげるために世間と争つて行かう。」と、悲しくも生くる決意を思ふのであるが、この生くる決意も、赫々と希望に燃える様な明るいものでなく、やけ糞な、悲しくて痛ましい、絶望的な決意なのである。みごもつて穴を掘る蛇の姿には生き抜かねばならぬ必死の決意があるのだが、「私」がもしみごもつて穴を掘らうとすればそれは思案に余り、世間との争ひに痛めつくされた女が、涙にむせびながら自身の墓穴を掘る姿でしかないのである。／「私」の恋人である上原は、毎日、朝から酒ばかり飲んでゐるやうな希望のもてない呑んべえである。その呑んべえが、酒臭い息のなかから、／「駄目です。何を書いても、ばかばかしくつて、さうして、ただもう悲しくつて仕様が無いんだ。いのちの黄昏。芸術の黄昏。人類の黄昏、それもキザだね」／この言葉は作家太宰から、しばしば出る自虐の言葉なのである。／情痴作家が描けば、こう二つとして、肉慾に生くる生甲斐をこめて描くであらう濡れ場を、太宰は、死と紙一重の絶望の淵で、ひとつの寢床の中で二人を語らすのである。／「あな

た、おからだを悪くしてゐらつしやるんじゃない？ 咯血なされたせう。」／「どうしてわかるの？ 実はこなひだ、かなりひどいのをやつただけど、誰にも知らせてゐないんだ。」／「お母さまのお亡くなりになる前と、おんなじ匂ひがするんですもの。」／「死ぬ気で飲んでゐるんだ。生きてゐるのが、悲しくて仕様が無いんだよ、わびしさだの、淋しさだの、そんなゆとりのあるものでなくて、悲しいんだ。——嘆きの溜息が四方の壁から聞えてゐる時自分たちだけの幸福なんてある筈は無いぢやないか……」／愛する男に抱かれながら、いのちの黄昏をうそぶく男の声をきいてゐる女の心根の悲しさが読者の胸をえぐるのだ。何かがある。読み進むにつれて何処かで救ひがあるだらうと引つぱられて来た、読者の胸に太宰の持つ特意の九寸五分である。薄気味の悪い、切られても血の出ないやうな寒々とする切れ味である。／「私、いま幸福よ、四方の壁から嘆きの声が聞えて来て、私のいまの幸福感は、飽和点よ、くしやみが出るくらゐ幸福だわ。」／上原さんは、ふふ、とお笑ひになつて、／「でも、もう、おそいな。黄昏だ。」／「朝ですわ。」／弟の直治は、その朝に自殺してゐた。／これは第三回目の結末である。太宰はつひに弟の直治までも殺してしまふのだ。「私」は幸福だとうそぶくが、そんな幸福なんて、あまりにも恐しい幸福だ。直後に涙も出ない愁歎場をひかへた幸福なのである。／私は斜陽を第三回までしか読んでゐないので、これからどう發展するか知らないのだが、どうせ、太宰のことだから、どこまで行つたつて救はれないのである。死ぬ者は、ひとりよがりの苦悶の中であつてなく死んでしまふし、生き残つた者は、灰色の蛇が無数にう

ごめく死の沼のほとりで、各々の苦悶に身悶へながら生き延びねばならないのである。／これは太宰の生きてゐる真実の世界である。この灰色の世界を見せつけられた、あまたの人間達が、如何に生くべきかの重大なる問題を問題として取上げねばならないのである。こゝに太宰文学の大なる価値が存在するのである。／「春の枯葉」の野中弥一が、メチールアルコールをしたたかあふつて、月の夜の海辺にさまよい出づる場面にも、灰色の絶望が執拗に付きまとつてゐる。／「死ぬんだ。死にやいいんだらう？ どうせ僕は、野中家の面よごしなんだから、死んで申しわけを致しますですよ。（崩れるやうに砂の上にあぐらを掻き）ああ、頭が痛い。切腹だ。切腹をして死んでしまふんだ。」／「あ、あ。世は焰々として民主革命の行はれつつあり、同胞ひとしく祖国再建のため、新しいスタートラインに竝んで立つて勇んでゐるのに、僕ひとり、なんといふ事だ。相も変はらず酔ひどれて、女房に焼きもちを焼いて、破廉恥の口争ひをしたりして、まるで地獄だ。しかしこれもまた僕の現実」／野中弥一のこの死の直前の叫び声が、現代を生き延びてゐる人間達に迫らぬ答はない。誰もが、この絶望と自虐の叫び声を再三再四わめいたに相違ない。これはもう、のつぎきならない現実の場面なのである。／この死の沼のほとりで死んでしまふ者と、ふてぶてしく、闇屋、パンパンガール等になつて生き延びる者とができるのだが、太宰の場合は、どうしても生き抜きがたい人間達ばかりで作品が構成されるのである。／「饗応夫人」の奥様がまたそうである。ずぶとい人間たちに太刀打の出来得ない、小心で善良で病み呆けたこの奥さまにも、やがて、死の運命が迫ってくる

のは必然である。／遅ましく生きよ、といったような教訓は前世紀の遺物なのである。ひからびた胃の腑を持てあましながら、眼ばかりぎよろ／＼光らせ、精神をずた／＼に引きかれた人間たちが、そこにもこゝにもうごめいてゐる。／それらの人間達に太宰の酔眼が、愛情をこめて見守つてゐるのである。「信づる者は、救はれる」といつた、だつちもない人間愛ではなく、破れたたましひに直かに迫ってくる人間的な温みなのである。／何れにせよ、作家太宰治はまたと得がたい執拗なる作家根性を持つた灰色の蛇なのである。

松井恭平「太宰治論」〔新樹〕第十号「特輯太宰治論」昭和二十三年三月一日発行）には、つぎのように記されている。

「斜陽」は、女性の手記の形式といふ、「女生徒」以来の、太宰氏薬籠中の手法をとり、完璧の表現を虜つてゐるが、例へば、あの蛇がちろちろ出てくるあたり、骨法の行きすぎと言ふか、あんまり面白すぎて、どうにもいよいよ手元が見え透いてくるとは、このことである。／登場人物の配置も、貴族でとほした母と、貴族から死に堕ちてゆく直治と、立ちあがる生活者の姉と、三つのはつきりした性格の対照、すべてこれは小説作法の定石を踏んで、さつぱりおもしろくないのだ。定石を配置してゆく傑作感、そんなものがしらじらしい。僕はもつと破けたものに、太宰氏の文学の真骨頂をみる。破けたまゝで完成してもらひたい、それでなければ、いまのまゝの行きかたでは、いつまでたつても未完成に終る、なんだか変だが、そんな気がする。ひよつと思ひ出したが、太宰氏に「右大臣実朝」といふ小説と、「鉄面皮」といふ小説があつて、「鉄面皮」は「実朝」の楽屋話だが、僕に

は楽屋話の方が興味があり、どちらかといへば真の太宰文学は「鉄面皮」にあり、なぜ、あれを、あのまゝ大きく持つてゆかないのか、歯がゆくさへある。／あとは、太宰氏の思想の道であるが、それは、とり立てゝさわぐまでのことではないと僕には思へる。／岩上順一氏が、「アカハタ」で、「斜陽」のなかの「今の若い者の関心は恋と革命だけだ。」といふ直治の言葉をとらへて、太宰氏も岩上氏と同じ戦列につらなつて人民解放運動に参加できる資格があるといふ意味を述べてゐるさうであるが、また聞きで、僕はそれを読んでゐない。しかしまあ大体「アカハタ」の文学論だから、それでたいした誤解もあるまい。そんなことはなんの重大問題でもないばかげた政治論で、太宰氏の思想の道は、行きづまりか、どうどうめぐりか、それは、直治が、何故遺書など書かねばならなかつたか黙つて死ねばよいぢやないかと考へればわかることがらである。／太宰氏を論じて何を探るか。僕はやはり、死んだ佐々三雄君が言つてゐたとほり「太宰氏について最も羨まれ、また位置づけを与へるものは、その才能なのだ。」と思ひ、佐々君の言ふ才能とは、小説の骨法を駆馳する才能のことだけを意味してゐるのか否か、今はもつと詳にすることができないが、まあ、いろんな面を含めた太宰氏の才能が、しらじらしく見え透く方向にあることが残念だけである。／太宰氏の思想の、年代の悲劇といふものは、いかんともしがたい。氏は、二・二六事件のとき、「雌に就いて」女の寝巻に就て話しをしてゐた。／「斜陽」はまだ未完成品である。「僕は貴族です。」「その朝、直治は死んだ。」と一行つゝに、放り投げたてゐる、あのめんどくさがつた破調の個所だけが僕の心に残る。そ

だけが完璧に通じる。太宰氏のたつた一つのポイントだと、僕は考へる。／それは、単なる計算の上に出て来た効果ではあるまいと思ふからである。

舟橋聖一、梅崎春生、椎名麟三、高木卓「現代作家論（座談会）——太宰治論——」（『文芸時代』第一巻第三号、昭和二十三年三月一日発行）には、つぎのように記されている。

記者　こんにちは、最近もつとも活躍している作家についていろいろ検討してみたいとおもいます。まず最初に太宰治についておねがひいたします。椎名さん、どうです太宰の「斜陽」は？／椎名「斜陽」はじつは一、二回しか読んでいない。そして第一回と第二回と、調子がガラリと変つたことが僕の注意に残つてゐる。非常に評判もいゝし、ぜひ読まなければならんとおもつておりますが、三回四回は読んでいません。しかし二回まで太宰さんの、いままでにないすぐれたものがあふれていました。／梅崎　僕は反対に三回と四回しか読んでない。あの人のなんか読んでると、いまでも初期の作品のほうがいゝような気がするんですがね。あの人のほこういう感じだとおもいます。身のこなしで現実を処理しようというがわの作家なんでしょう。そういうのが青春というものとピタツと合致するようなやりかたではなかつたかとおもう。いまはもう、ひじょうに年齢がくわゝつてきて、現実がかわつたりしてくると、それが処しきれなくなるんじゃないかという感じがします。そういう乱れたの美しさとか、りつばさとかいうことが、いま咲いておるような感じがします。／椎名　しかし太宰さんの生きかたというのは、あゝいうふうなポーズはいわど飯

面で、仮面をかぶらずにはいられないところに太宰さんの真実があるんです。「斜陽」では、いままでになく太宰さん自身が、ある意味で直接的に書かれているし、ひじょうに立派な仕事だとおもったんです。／高木 わたしも部分的にしか読んでないんです。「斜陽」は相
当な作品だとおもいましたね。梅崎さんは、初期のものゝほうがいい、といわれたけれど、わたしはちかごろのものゝほうが、やはりずっと振幅がひろがつてるとおもうんです。それから、これは描きかたのことに
なりますが、あゝいう主観的なきかたというものは、ある場合には案外かきいゝんじゃないかという感じもするんです。／舟橋 僕
は「斜陽」はいやな題だとおもう。しかし作品の実力は非常に高く評価
しますがね。題はよくない。それから、やはりなにか問題は含んでる作品
ですね。けれども小説道の難問題を解決はしてない。小説道の、いま現在
日本の小説はどういう形になるかという難問題は解決してないな。つま
りいままでの寸法でしようね。だいたい小説として――。／梅崎 なんの寸法？ あ
の人の寸法ですか。／舟橋 いままでの日本文学の寸法ですね。約束ごと
がちつとも解決されてないんです。／梅崎 スタイルのうえでなくて――。／舟橋
スタイルだけでなく、たとえ、ちよつとまあ話がちがうけれども、横光の「微笑」
でも、梶という人物がでてくる。それは横光利一なんです。それを通して
「微笑」というものは書いてある。この形なんかはまだ解決してないん
です。けつきよく横光は「寝園」において、また「寝園」から「微笑」ま
での間、いくたの作品を書いてるんですが、その間、この問題は解決しな
い点だとおもう。あの中で、あいかわらず表札をとられ

る話を書いておる。これは作者と作品の間柄をどういうふうに書くべきか
という一ばん問題になるところだね。私小説と本格小説の論議は皆その
点にあるので、そこに中心があるんです。本格小説と私小説というものゝ
優劣なんか、いまさら言つてもはじまらない。そんなことはいま言つて
る論議はつまらないですよ。しかし小説を書くときに、横光利一を通じて
書くべきか否かという問題はちつとも解決されてない。だから太宰があ
そこ、とにかく横光とは別な行きかたで作者を出してるんですけれど――。
つまりギロチンギロチンシュッシュュッといつて酒をのんでいる猿の
ような男、これは太宰なんだね。そこで斜陽という題がおかしい。桜の園
とは似て非なるものだ。その問題はあるけれども、そこは解決されてない。
これから先、小説は進まないわけだ。行きづまつてるんだ。多くの小説が――。
／梅崎 しかし太宰さんの初期の作品というものは、一種の抒情でしょう。だから
それを深めていつて、そこへいつておるわけだから、もうおそらくあれか
らひろがらないとおもうんですけれども、結局そこに徹していくより仕
様がなとおもう。／椎名 いっぱんに太宰さんの生きかたは、体験のな
かに人生の真実を求める、という生きかたですね。つまり高木さんのいわ
れた主観性の問題です。現在の一般小説というものは、主観的な色彩が
非常につよいんじゃないですか。というのは、われ／＼は社会的なリアリ
ズムというものを一ばん重要視しなければならぬものだけれども、やは
りそれを自分と対決するものとして、主観的に把握していく。だから小
説としては、主観的な色彩にとんだものが戦後の現象として出てきてお
るということにはある必然性がある。結局わ

れわれが、自分を頼るよりほかに価値の基準をもちえないということろからきておるのでしよう。太宰の流行の現象というものは、ジャーナリズムに関係があるかもしれないけれども、やはり時代の要求だとおもうですね。／舟橋 たゞ、いわゆる私小説というものと、それからイッヒロマンというものとはちがうとおもうんだ。／椎名 それは断然ちがいますよ。／舟橋 イッヒロマンというのは、日本の私小説じゃないですよ。それはこのまえの大戦後ドイツに出てきたイッヒドラマとか、そういうものはやはり何か強烈な強い主観をもった、むしろ主観の告白、表白であるようなそういう文学で、それはそれでいいと思うんですけども、日本の私小説は私そのものが非常にふやけた私ですからね。つまり小説的な人物は、社会的にも階級的にも、まるで去勢されたような、一種宙にういた作家生活というものをやっている。非常に非社会的で、非行動的な人物を主人公にしているでしよう。あるふやけたものが、そういう特有のレンズで、たゞ世の中を見るだけですから、イッヒロマンの作品というものじゃないんだね。だからそのところで、いわゆる横光の「微笑」の中心人物が横光であったということ、その横光がやはり表札をとられたりするということを書いている、その程度のものであること、それで小説道は進みつこないという弱点をもつておる。「斜陽」はそこに別な一つのものを何か出しているけれども、やはり太宰文学というものの限界点にはつきりしちやつたというものです。ものたらないという点があればそこにあるんです。／椎名 たゞさつきいわれたように、じつさい表札がぬすまれるということは、読者にとつてどうでもいふことですからね。

／舟橋 意味ないことです。

無署名「新刊文学書の展望」(「新大阪」昭和二十三年三月十一日発行、「芸芸」欄)には、つぎのように記されている。

太宰治の「斜陽」(新潮社)は毀譽褒貶まち／＼の作品であるが「ヴィヨンの妻」で完成に近づいていた彼の作風から一歩出ようとしたところが、すくなくともその前半で見られたのは面白かった。没落する貴族を描く初めの一、二章の美しさは近ごろまれなものといえよう。後半で腰がくだけ、いつもの太宰調に落ちてしまったのは惜しかったが、何かここから彼の新しい発展を期待させるようなものがあつた。石川(淳)がその教養にたよるのに比べて太宰は資質にたよるだけに、強味があるといえよう。

菊池章一「戦後の文学的断面(一九四七年一〇月)」(『戦後の論理』雄山閣、昭和二十三年九月十日発行)には、つぎのように記されている。

こうした観念のスタイル化の傾向はこんにちの文学作品の一般的な観念性、抽象性に結びついている。作品におけるむきだしの論議と独白とはそれ／＼のスタイルによつて屈折されているとはいへ、やはり戦後における作品の一般的特色をなしている。そしてこれらのものはこのスタイルによる屈折によつてほとんど逆説的反語的なものとしてあらわれている。／たとえばこんど完結した太宰治の『斜陽』(新潮)の女主人公の弟は「なぜ生きていなければならないのか」分らなくなつたと書きおき、「僕は、貴族です」と結んで自殺するが、やはり最後の貴族である母に死なれこの弟にも死なれ、また恋人とも別れ

た女主人公はすべてを「ゆめ」だとして、その恋人への手紙に「この世の中に、戦争だの平和だの貿易だの組合だの政治だの」であるのは「女がよい子を生むため」であり、彼女は自分の「革命の完成」のためにやがて生れる恋人の子供と共に「古い道徳とどこまでも争い、太陽のように生きるつもり」だと記すのである。

杉浦明平「デカダンス文学と家の問題」織田、坂口および太宰を通じて―(『文学』第十六巻第五号、昭和二十三年五月一日発行)には、つぎのように記されている。

恐らく太宰が「斜陽」で彼の愛する古い家、その最も洗練された姿を名門華族、を反対の角度から取り上げた一因は、前の失敗に鑑みてであつたろう。それはともかく、彼がその家をさきのごとく希望の色ではなく、頹廃と没落の必然性の中にとらえたことは、彼の古典的な均整のとれたスタイルとともに、この作品に一の文学的勝利を保証したと言つていいだろう。永年住みなれ、古い家系の黴のにおいのしみこんだ家から離れたとき生来の貴族たる母は死なねばならぬ、一旦捨てた貴族の世界に帰ることもできず民衆からは悪意しか報いられぬ弟は自殺せねばならぬ、ただ徴用のおかげで労働の「貴重なる体験」をえて、いまではヨイトマケ商売にもひそかに自信を持つている女主人公だけがこの時代を生き伸びる、という正確なテーマを設定したとき、彼は決して天皇への憧憬によつて文学を殺したのではなかった、逆に彼の文学精神がそういう古い亡霊のような諸関係の滅亡の不可避性を把握していたのである。おそらく彼の女生徒やその他多くの主人公たちと同じように、彼はねがいの中では常に「自分の行くべき最善の場

所、行きたく思ふ美しい場所、自身を伸ばして行くべき場所がおぼろげながら判つてゐる」のであらう。それゆゑに文学するときには彼はやはり万古不易の家族制度の崩れ去るのを認めねばならなかったのであらう。／というものの、そのために太宰が保守派でなくなるというわけではない。直治をして「今の若い者の関心は恋と革命だけだ」と言わしめても、決して彼が岩上順一などと同じく人民解放運動の戦列に加わることができるわけではない。彼が亡びゆくものの美しさと光栄を「平家物語」の歌い手たちのように歌つているかぎりやはりデカダンス文学たらざるをえないからだ。この歌を歌い終つたとき、彼がこの作品をばねにして腐爛せる家の残骸を乗り越えることができたなら、そのときこそ人民解放戦士となるだろう、が果してその生命がけの飛躍がおこなわれるかどうか保証するのをわたしはためらうものだ。何故かなら「斜陽」をはじめ彼の作品が今までと同じように彼が古い家から離れられないことを語っているからである。なるほど肉体労働をおそれぬ「斜陽」の女主人公は進んで私生児の母となり、／「けれども私たちは、古い道徳とどこまでも争ひ、太陽のやうに生きるつもりです。／どうか、あなたも、あなたの闘ひをたたかひ続けて下さいまし。／革命は、まだ、ちつとも、何も、行はれてゐないです。もつと、もつと、いくつもの惜しい貴い犠牲が必要のやうでございます。／いまの世の中で、一ばん美しいのは犠牲者です。」／と、アンネ・ト・リヴィエールのように正しい美しい決意をもつてこの一篇を結んでいる。つまり、古い道徳とどこまでも争つて太陽のやうに生きる人間、魂の自由と独立を欲する近代的女性への魅力を正面に引き出した

ことは作者の転換、デカダン文学の淵から浮び上ろうとする願望を仄かに指示するものかもしれない。がしかし、その女性が果して雄々しく痛ましかったかいつづけまこと貴い犠牲者たりうるかどうかは未だに属するからしばらく別としても、やはり彼女が愛人に「その後もやはり、ギロチンギロチンと言つて、紳士やお嬢さんたちとお酒を飲んで、デカダン生活をお続けになつていらつしやる」ことを「あなたの最後の闘争の形式」として妥協の余地を残した点が、再び作者を飛躍から妨げる魔法の輪になれば幸いだと思わざるをえない。／何となればこの愛人たる小説家上原は、酒と女とに耽溺することによつて古い道徳とたたかう点、太宰の他の小説で再三お目にかかる男で、太宰の嫌悪と愛の間をさまよい、又太宰の自己弁護をもつとめている男だからだ。「父」の「私」は「ことし既に三十九歳になるのであるが、私のこれまでの文筆に依つて得た収入の全部は、私ひとりの遊びのために浪費して来たと言つても、敢へて過言ではないのである。しかも、その遊びといふのは、自分にとつて、地獄の痛苦のヤケ酒と、いやなおそろしい鬼女とのつかみ合ひの形に似たる浮気であつて、私自身、何のたのしいところも無いのである」し、「ヴィヨンの妻」の大谷も「死にたくて、仕様が無い人です。生れた時から、死ぬ事ばかり考へてゐたんだ。」と言ひながら酒と女のことばかりを生活の中心において動いている。この上原も「死ぬ気で飲み」死ぬ気で女と遊ぶばかりだ。／おそらくそういう遊蕩そのものは組織的闘争が強力的に抑圧されていた社会では、古いものとの闘争の一形式たりえたかもしれない、しかし今日では必ずしもそうではありえず、むしろ闘

ブローカーの仲間ではないことを坂口に関連して指摘した。そののみではなくこの闘争者たちはどんなに深刻な悩みを訴えるにしろ、少しも自己犠牲たろうとするとところがなく、ただ闘争を名目にして自分の放蕩のために別に多くの無辜の犠牲を要求する。たとえば「父」の「私」は「女房が七輪一つ買つても、これはいくらだ、ぜいたくだ、とごとを言」い、その「いのちを賭けて遊んでゐる」とき、「母は観念して、下の子を背負ひ、上の子の手を引き、古本屋に本を売りに出掛ける。父は母にお金を置いて行かないから。」「ヴィヨンの妻」も坊やをお医者に連れて行きたくても、お金も何もないとき、良人の大谷は三晩も四晩もひとつきも女と飲み歩いている。「斜陽」の上原も、電球も買えない無一文の中に妻子をほうり出したまま酒色に沈みつけている。というよりそういう犠牲なくしてはその遊蕩は成立ちえないのである。／そしてこれこそ最も悪しく最も墮落した家族形式だとわたしは織田に関連して言つたが、日本のデカダン文学の根底にこういう墮落した家族関係が常に何らかの形で横たわつてゐる。しかもこのいまわしい夫婦の関係は都会において墮落し腐敗した家庭から発生したというより、実は農村における半封建的な家族主義、その頂点に天皇制をいただく地主的收取関係がそのまま都市にもちこまれたものにすぎない。それは突然変異のように見えるが、そうではなくてわが諸地方における最も上品な家系の都会版にすぎない。つまり農村で白堀の内、三十も四十もある薄暗い部屋奥にあるものが町では表へ出てひらいたということを知つておく必要がある。太宰は常に悔恨にむしばまれているけれど、その根源的な地主制とのつながり、それへの

愛着を断絶しないかぎり、いつまでも今までと同一の嘆をくりかえすにすぎないと思うのだ。／今やそういう暗闇の諸条件のいくつかは太宰の好悪にかかわりなく客観的に取りのぞかれた。われわれを、またわれわれの文学をしめ木にかけていた家の力は解けはじめている。がしかしそれはまだ夢魔のようにわれわれを壓す余力を失つてはいない。その夢魔のろいから自らを解放するか否かが太宰の文学の明日を決定するだろう。その自己解放は酒や女の力をかりてなしとげるこのできぬのほうをまつまい。太宰自身「斜陽」において愛着をもちながらも上原を今までのそれよりはるかに後に退け、美しく生きようとする女にもはや必要のないものとして別離を宣言しているが、その宣言の実践には、繰りかえして言うが生命がけの飛躍が必要だ。もちろんそれは至難のわざではあるが不可能ではない。／（一九四八、三、二三）

丹羽文雄「作家の姿勢―往復書翰―」（『風雪』第二巻第五号、昭和二十三年五月一日発行）には、つぎのように記されている。

ところで、編輯者に言ひつかつて今度は兄と往復書翰をとり交すことになりましたが、何をいまさら問題にとりあげてよいやら、迷ふ次第です。先夜は兄の「斜陽」と「処女懐胎」の批評をよみました。いつもながらの繊細な、鋭い、正確な、そして裏に思ひやりのある文章には、心の温まる思ひがしました。第三者の私でさへさう感ずるのですから、批評された方ではもつて瞑すべきだと思ひます。

青山光二「創作月評―改造・文学界・新文学―」（『文芸時代』第一巻第五号、昭和二十三年五月一日発行）には、つぎのように記されて

いる。

三島由紀夫『嘉例』（『新文学』三月号）／太宰治の才筆にしてなほかつ貴族を描かうとすれば失敗する。どだい日本には貴族なんて階級はありはしないのだし、あり得るわけもないのだから、思へば太宰の失敗は当然である。が一方、新人のこの作においては、おモウさんおタアさんの「日本貴族」の世界にあぐらをかいてゐるのだから、失敗なんていふ歯切れのいい図はあり得ない。思ひ切りわるく、泥くさい。

尾崎一雄「文学時感―作家・作品の印象―その他」（『丹頂』第二巻第二号、昭和二十三年五月一日発行）には、つぎのように記されている。

太宰治の「斜陽」はよかつた。伊藤整君だつたか、「ヴィヨンの妻」の方をほめてゐるが、僕は逆に考へてゐる。「ヴィヨンの妻」の方は、読む前から判つてしまつた感じで、読むと果してその通りで、つまり、太宰としての紋切形以上に一つも出たところがないのだ。「斜陽」の方が僕にはずつと面白かつた。どうして面白いか、を書かねばならぬわけだが、面倒だから止す。僕は「斜陽」を見る一寸前、太宰治も相変らずの仕事ばかりしてゐるな、と思つてゐたのだが、「斜陽」を見て、ふん、歩いてゐるなと思つて安心した。「新潮」の三月号を見ると、文芸感想を書いてゐるが、あの調子は賛成出来ない。大体太宰が書く感想文の類には、（数は多くないが）変な、持つて廻つた調子があつていけない。僕は以前は、若いからだろうと思つてゐたが、さうばかりでも無さうなことがこの頃判つた。小説に於てはプラスにな

癖（か方法か知らないが）——が、感想文といふやうな生（なま）なものになると、それが生（なま）で出て来て、効果はマイナスになる。こんなことを云つたつてどうにもなるまいとは思ふものの、氣にはなる。

白田甚五郎「暁のおとなび——太宰イズムの転機——」（国学院大学新聞）第一六三号、昭和二十三年五月二十五日発行）には、つぎのように記されている。

四つになつても二つくらゐにしか成長しない次子の哀れさは「ヴィヨンの妻」（昨年の展望三月号）に既に登場してゐる。この篇中の主人公公たる作家エビキュリアンの偽貴族がゆきつけの小料理屋から無断で紙幣の束をわしづかみにして逃げたのも妻、さうしてこの子供の為であるといふ。この悪徳作家は自らを、エビキュリアンのにせ貴族だといふよりは、神におびえるエビキュリアンとでも言つたらよいと言うてゐる。神におびえるのは、たそがれのわざ。太宰治の世界から没り日は離れようとしてゐるのではないか。それは神の恵み給へる不幸なる子のせゐであらう。虚構の作家太宰治の最傑作と称せられる「斜陽」（題名の刻こそは、いとも不可思議なる魔術の行はれる好機）にも、神に代つて赤子が出現するのである。落ちぶれたりとはいへ貴族の娘が不徳卑俗の作家によつて「マリヤが、たとひ夫の子でない子を生んでも、マリヤに輝く誇りがあつたら、それは聖母子になるのをございます」と云ひきることが出来たのである。父の子に對す愛情、母の子に對す愛情、子に對する愛情こそは性慾よりもつと本能的な人間の深淵をのぞかせてくれるのではあるまいか。ここに太宰イズムの転機を見出すのである。／太宰が聖書の詩篇から問題をひくのも伊

達や酔興ではあるまい。虚実の山の彼方に、真実が輝いている。虚構のたそがれから現実の暗夜をくぐりぬけて、真実のみづみづしい時をすがすがしい朝を迎へることを私は祈りたい。

志賀直哉、佐々木基一、中村真一郎「座談会・作家の態度（——志賀直哉氏をかこんで——）」（文芸）第五卷第六号、昭和二十三年六月一日発行）には、つぎのように記されている。

志賀 若い人のを最近になつて少し読んでるんだけど、中村君のはなかつたから読んでない。梅崎春生といふ人のを三つ読んだかな。それから太宰君の「斜陽」なんていふのも読んだけど、閉口したな。／佐々木 はあ、さうですか。／志賀 閉口したつていふのは、貴族の娘が山だしの女中のやうな言葉を使ふんだ。田舎から来た女中が自分の方に御の字をつけるやうな言葉を使ふが、所々にそれがある。それから貴婦人が庭で小便するのなんぞも厭だつた。作者がその事に興味を持つ事が厭なのかも知れない。／佐々木 あれば最後になつてガタ落ちになりましたね。／志賀 あの作者のポーズが氣になるな。ちよつととぼけたやうな。あの人より若い人には、それほど氣にならないかも知れないけど、こつちは年上だからね、もう少し真面目にやつたらよからうといふ氣がするね。あのポーズは何か弱さといふか、弱氣から来る照れ隠しのポーズだからね。／佐々木 若い連中には、ああいふポーズが喜ばれるらしいです。／志賀 横光君なんかでも、僕はあのポーズで読めないんだ。あのポーズそのものがいけないのか、ポーズで胡麻化してるのがいけないのか、どつちだか知らないけど……。とにかくああいふことはやつばりやらないほうがいいと思ふん

だけだね。芥川君だつて、あれほどぢやないけど、やつぱりさういふことが禍ひしてゐるだらうね。ポーズといふものも、僕の「矢島柳堂」、あれはあれで材料から来るポーズで、ああいふのは仕方がない。／佐々木 「斜陽」なんていふのは、決して貴族の婦人を書いたからああいふふうになつたといふのぢやなしに、何か自分の抱いたイメーヂを貴族の婦人に托して書いたといふものですね。／志賀 それがうまくゆけばいいけど、山出しの女中の敬語みたいなものが随所に出てくるから、たまらないよ。／佐々木 今の二十代の青年なんか、戦争中から太宰の影響下に育つた人といふのが、ずいぶん多いやうですが……。／志賀 どうも評判のいい人の悪口をいふ事になつて困るんだけど、僕にはどうもいい点が見付からないね。

亀井勝一郎「太宰治の思ひ出」(「新潮」第四十五巻第六号、昭和二十三年六月一日発行)には、つぎのように記されている。

彼がほんたうに食べたいのは、「津軽」に出てくる北方の、あの荒々しい大味の料理なのである。「斜陽」の中で、ほんたうに貴族は、骨のついた肉など手づかみで食ふとあるが、彼はどこからか聞きこんできて、大喜びで幾たびも話してきかせた。東北流に乱暴に食ひたいのである。それを非常にはにかみ、たうとう「貴族」をでつちあげてしまふ。彼の「貴族」の裡には、野性の復讐がある。ダンディズムは、彼の自嘲である。

亀井勝一郎「太宰治論―作家論ノート―」(「文学界」第二巻第六号、昭和二十三年六月一日発行)には、つぎのように記されている。

「斜陽」を読んだ。悲しく、癡つた挽歌だ。戯曲性を巧みにとりいれ

た叙事詩である。一種の小説にはちがひないが、小説として読めば不便である、さういつた感じを受けた。神西清氏は音楽として読んだらしい。私にとつては叙事詩である。夕暮の光線にも似た「最後の貴婦人」の生命の終るあたりから、すべての人物の行為と言葉は唐突的となる。その生も、その死も、それを導き出した委細は、むしろ過去の作品に求むべきで、こゝではそのエッセンスだけが強調音で終末へ急いでゐるやうに思はれる。この悲しい戯画を、柔くつゝんでゐる貴婦人の残影だけがふしぎに強い印象を残す。／太宰の作品にとつて、最も大切な部分は、その細部である。思想や性格や心理といったものではない。大事なものは細部だ。これが一番むづかしく、また一番力をそゝいでゐる点だ。庭を這ふ蛇、スプーンの扱ひ、乳房の高さにみえる海原、無言の受胎等々……。／たとへばドストエフスキイの中に、我々は「堂々たる思想」をみるのだが、それが必ずしも彼を作家たらしめてゐるのではない。個々の人物の、何げない日常的挙措、ふとした軽妙な描写、細部の手腕が彼を作家たらしめてゐるのだ。プーシキンをしてロシア文学の父たらしめた。この秘訣に、太宰治は最も多く学んだ作家である。／(略)／民衆の継子たる「貴族」の運命は、畢竟、孤独な無頼派たることに極まる。無頼派(太宰の知つてゐるおそらく唯一のフランス語だ)―これが敗戦後の、彼の最初の宣言であつたことを注目すべきである。民主派、共産派に対して。「ヴィヨンの妻」、「斜陽」。民衆の友―継子―貴族―無頼派―死。そして無頼派たることとが、今日における唯一の革命派だと、作品の背後で確信してゐるにちがひないのだ。最大の復讐、それは抵抗することの出来ない無頼派

の美を創造することである。「斜陽」は見かけによらぬ硬派の作品である。／「斜陽」の貴婦人は、素材的な意味でも貴族であり、これに作者は趣味（太宰の知つてゐるフランス語がもう一つあつた。）のヴェールをかけて死へ導く。しかし作者の衷心に創造せる貴族は泥まみれの直治である。何故彼は自殺するか？ 虚無や絶望のためではない。彼はプロテストのために死ぬ。かず子はプロテストのために生きる。いづれも自分自身の運命に対してプロテストするのだ。自分の身と心を滅ぼして。自殺と云へば、かず子の恋愛も自殺である。この姉弟は、作者の二つの分身と考へられる。そしてこの二つをつなぐ、第三の分身としてあらはれる「作家」上原は、制作に疲れきつた残骸である。四人四様の斜陽。死の四重奏。無頼派の悲しい祈禱。／無頼派の祈禱、或は「斜陽」を貫く根本の精神とは、マタイ伝第十章であらう。それは適当に選句されて作品の中にも掲げられてゐるが、太宰治の人生に処す指針であるとともに、制作の方法論ともなつた、とくに大切な聖句は次の二つと思はれる。／「身を殺して靈魂をころし得ぬ者どもを懼るな、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ。」／「視よ、我なんぢらを遣すは、羊を豺狼のなかに入るゝが如し。この故に蛇のごとく慧く、鴿のごとく素直なれ。」／太宰の最大の愛読書は聖書である。彼はこれを異教的に読み、背徳の指針とし、そして最大の敗北をイエスに見ようと欲したにちがひない。

矢野健太郎「巧みなる手際―あつという間に読み通した『斜陽』―」（『日本読書新聞』第四四四号、昭和二十三年六月二日発行）には、つぎのように記されている。

数学専攻の筆者をつかまえて、最近読んだ小説の評を書けという、読書新聞編集子の突飛というよりは意地の悪い企画である。柄にないと御辞退しても、そこがそれ門外書評の所以であるといわれる。先日ある新聞に、映画は十数年もみたことがないと公言される仏文学の方が、「山師ポートラン」を卒直に批評して居られたのを思い出して、筆者も、時間のないままにはなはだ乏しいことをかこつてゐる読了書のうちから、太宰治氏の「斜陽」について読後感を述べさせてもらうことにする。／科学的な業績を読むときにももちろんのことであるが、小説を読むときでも、その作者が、どんな経歴の持主であるか、どんな作品的経歴をもつ人であるか、問題の小説はそのなかでどんな位置を占めるものであるか、等々を知らなければ、その作品を觀賞し批判する資格は恐らく全然ないであらう。／しかし筆者は、著者太宰治氏について、東大は恐らく筆者より少しく先輩の仏文出の方であることと、最近、といつても終戦前から評判の小説家であるということしか承知していない。またこの小説「斜陽」については、昨年雑誌新潮に連載されて注目をひいたということを知つてゐるだけである。／さて卒直にいって小説「斜陽」は、非常に面白い小説であると思う。筆者のような門外漢は、小説や映画はまあ世間の評判を聞いて、そのうち評判の良いものだけを讀んだり見たりするものであるが、それでも間々最後まで読み通したり見通したりするのに相当努力を要する思いをすることがある。しかしこの「斜陽」はあつという間に全巻読み通してしまつた。こんなのを面白い小説というのであらう。／筋は、既に父を失い、弟を南方に送つたある華族のお嬢さんの手記の形で運

ばれている。従つて全編一種の敬語体で書かれているのであるが、それがなんとも言えぬふん囲気をただよわせている。／冒頭には、華族の人達の生活、というよりむしろ性格が、不縁でもどつて来たこの令嬢の筆を借りて淡々と語り出される。もしこんなことばかりを書いてある小説にぶつかると、筆者などは、それがどうしたんだ、とへそを曲げたくなるのが普通であるが、この小説のこのくだりは、面白かつた。この辺にも作者の力量と努力が現れているのであろう。しかもここで、へびの卵を焼く挿話にかこつけて旨く伏線が張られている。／ついでこの家族が、叔父のすすめと尽力で、住みなれた東京の邸宅を人手に渡して伊豆の山荘に引き移る話に引き続いてその伊豆の片田舎での生活の描写になる。ここで母の病氣、主人公の不注意からのボヤ、家計の窮乏、主人公の宮家女中奉公をすすめられての母とのいさかい等、事件も多く、話はすらすらとすすめられて行く。筆者は作者の筆にひきづられてただ面白く読み過してしまつた。／ついで主人公の弟の南方からの帰還、この弟のおよそ華族の坊ちゃんらしからぬふてくされた不良振り、そしてこの弟がノートブックに書きつけたいわゆる夕顔日記なるものが、いままでの文体と異様な対象をなして効果的である。しかもこの弟の心情に関してここにも旨く伏線が張られている。／更に主人公の、筆者などには想像もつかない恋？の冒険、母の死、弟の自殺とクライマックスへ進んで行く手際は、流石と思う。／終りにある弟の姉にあてた手記は、いままで不良を真似た言葉使いをしていた彼が、もとの華族口調でその心事をのべて行くところなかなか効果的であると思う。／最後にある主人公のその恋の相手に

あてた手紙は、鈍感な筆者にも全部を説明してくれて、小説の終りというものはこんな風にするものだと思つたことであつた。／これだけの登場人物と事件でこんな面白い小説が書けるのなら、筆者はやはり、私小説や大衆小説よりも、こんな小説が読みたいと思う。

石川淳「太宰治昇天」(「新潮」第四十五巻第七号、昭和二十三年七月一日発行)には、つぎのように記されている。

太宰君は、一般に作家は、適度といふことを知らない。したがつて、美的生活者ではありえない。またしたがつて、美的趣味の何たるかに係らない。さきごろ太宰君は「斜陽」の中で貴族の女の放尿の仕方について記した。あるひとがこれを読んで「貴婦人が庭で小便するのなんぞも厭だつた。」といった。そのひとはこれを好まないといふ美的趣味をもつてゐるのだらう。なるほど、たれでもおのれの好きなことを好まないと言明する権利はあるにちがいない。しかし、そのひとはさらに「作者がその事に興味を持つ事が厭なのかも知れない。」といつてゐる。「作者がその事に興味を持つ」と見たのは、おのれの好みをもつて逆に他を付度したのだらう。これはあきらかに見当ちがへである。太宰君はただそのことを書くことを選択したのだらう。必ずやそのことに「興味」はもたず、またそれ故によくこれを書いたのだらう。ここにこれだけの見方の食ひちがへがあると、さきに行つてなほ開きが大きくなる。はたせるかな、そのひとはさらに語をついで、「あの作者のポーズが気になるな。ちよつととぼけたやうな。あの人より若い人には、それほど気にならないかも知れないけど、こつちは年上だからね。もう少し真面目にやつたらよからうといふ気がする

ね。」といつてゐる。年齢の差を援用したのは御愛嬌である。「ポーズが気になる」といふのは、もしそれが気になると思へば、やはり気になると言明する権利はあるだらう。しかし、「もう少し真面目にやつたらよからう。」といふにおよんで、そのひとは太宰君の「必死」の「道化」の何たるかにつき、ついに一片の「興味」ももたず、また一片の理解ももたないことをみづから暴露してゐる。わたしは必ずしもそのひとの眼が何ものをも見ないといふのではない。おもふに、そのひとの眼は実際の生活に於て、また芸術の世界に於て、我流で調和の一点をさがしてゐるのだらう。そして、そのひとはそのひとなりの「真面目」のつもりで、みづから見つけたと信ずる調和の上に立つて、生活につきまた芸術につき発言し主張してゐるのだらう。ところで、太宰君にとつては、すべての調和は妥協であつた。生理上に於ける善生活と悪生活との対決には、調和の一点は無いはずだからである。このとき、太宰君はどこに立つて、いかなる仕方、発言し主張するか。われわれは太宰君みづからのことばに聴かなくてはならない。

福田恒存「道化の文学（承前）——太宰治について——」（『群像』第三卷第七号、昭和二十三年七月一日発行）には、つぎのように記されている。

「一生、自分と同じくらの弱いやさしい温かい人たちの中でだけ生活して行ける身分の人は、うらやましい。（『女生徒』）この世のなかでもしさういふひとたちの集りになつたならば——太宰治のユートピア、まづたく新しい思潮の抬頭を待望する。それを言ひ出すには、何よりもまづ、『勇氣』を要する。私のいま夢想する境涯は、フランス

のモラリストたちの感覚を基調とし、その倫理の儀表を天皇に置き、我等の生活は自給自足のアナキズム風の桃源である（『苦悩の年鑑』）「斜陽」における「道徳革命」といふのもそれだ。へんに読みちがへてはいけない。他人の苦悩の真実を信じうる「正しい愛情の人」たれ。「斜陽」にも「実朝」にもまづたくなじことばが出てくるが、「人間は、みな、同じものだ」といふ思想——いや、太宰によれば、これは思想などといふものではなく、人間を卑俗な裏がはからしか見てゐない牛太郎の発明したことばなのだ。（略）強権にたいする脱帽に、かれは民衆へのあいさつを託したのであつた。そして戦争はをへつた。太宰治は、いまは左翼思想にも、軍国主義にも、いさゝかも「心弱くうるたへる」ことはないはずだ。かれは二つの試練にたへた。もはやいかなる迂路もとらず、直接に市民への奉仕をこゝろがければいゝのだ。「民衆へのあこがれ」（『作家の手帖』）におのがひけめを託するなどといふ手づきはもういらぬ。そして太宰治は「斜陽」のうちで、直治を過去の自己として葬つたのである。弱きものとしての民衆を愛するには、これを鞭うつにしくはない。いまは、ふたゝび「炉辺の幸福」をたゞきこはしてかゝらねばならぬ。

村松定季「太宰治の地点——太宰治の死——」（『日本文庫』第八号、昭和二十三年七月二十日発行）には、つぎのように記されている。

また「斜陽」の読者が「晩年」や「虚構の彷徨」時代の太宰を知らずに、道徳革命の勇者として、祭り上げてゐることも頗しゆくせざるをえない。／＼まして戦後の流行作家として坂口安吾や田村泰次郎等とともに全一の傾向と素質の持主であるかの如き皮相な解釈をする人の

あることは彼の文学の神髄をきわめざるも甚だしいものである。／たとへば余りに純情な魂の持主であつたがゆゑに死を選ばねばならなかつた貴族の御曹子の手記とその姉の告白（斜陽）や敗戦のために自己の生き方を見失ひながらもなほあくまで世俗への怒りと反抗から世に嘲罵を叫びつゞける一女性のエレジーを代弁した作品（冬の火花）の如き、終戦後乱立した他の作家のすべての作品と取かへてもよい程にわたくしは考へてゐる。／そしてわたくしの特に強調したいのは「斜陽」の中の母親が玉音の放送があつてから、「お氣の毒な……」とふともらず床しい一言。それは皇族に血縁持つ人たちにあつて当然にじみ出る悲愁であり、でなくとも日本民族の誰しもある日経験したいつはりなき心理であつたらうに太宰の「斜陽」をのぞいては誰一人としてその哀感を小説を通して叙述した作家のなかつたことを思ひ合せるとき、わたくしは心の美しさを太宰の上に見、あらためて彼の高貴と純情に驚ろくのであるが、さうした心美しき彼が「ヴィヨンの妻」や「桜桃」で彼の自己懺悔をこゝろみてゐることもよくうなづけるのである。

平田次三郎「中堅作家論（上）——太宰・丹羽・石川淳・井伏——」（『新大阪』昭和二十三年七月二十二日発行）には、つぎのように記されている。

太宰治が今日浴びている注目のみなものは何処にあるのか？「春の枯葉」「冬の火花」から「ヴィヨンの妻」「斜陽」に至る作品系列をたずねてみて、いわばその人氣の出所を明らかにすることが必要である。／私見によれば、それは太宰治の文学が、今日の人々の魂の奥底

の声に火をつけているところに成立しているのだ。「ヴィヨンの妻」「斜陽」において描出された現代人の苦悩が、読者の魂の何ものかと照応しているのだ。太宰治が自己の人間の責務において探究せざるをえない、そしてそこで見出さざるをえなかつた人間の根源的な罪過ともいふべきものに、読者は自己の精神のそれへの照応を見出すのである。そして、そこで苦悶する人間の中に、自己の姿を見るときに、それによつて自分が人生について真実な省察をすべく誘われるのである。

長与善郎「文壇近況の一展望——デカダンスのことなど——」（『改造文芸』第二号、昭和二十三年七月二十五日発行）には、つぎのように記されている。

戦後に活躍してゐるさういふ作家群の中にあつて、太宰治のデカダンスは「本物だと思ふ」と竹山道雄君がこの間僕に語つた。太宰は先輩も梅崎、野間等よりは大分上だと思ふが、評判の「斜陽」はなるほどいゝものであつた。この作家のものはずっと以前、その処女作時代、犬のことを書いた作を面白く読み、その頃から厚意を持つてゐた。しかしその頃の氏はユーモラス作家の如き面だけを見せてゐたが、「斜陽」になると、ユーモラスなことが、却つてこの作家のより以上に本質的と思はれるものの反面であるらしいことを立證してゐる。「斜陽」よりも何とかいふ西洋人の名の出てくる題の短篇の方がいゝと竹山君は云つてゐたが、この「斜陽」に僕が日本の大抵の大家の作にも感じることはない程度の——といふことは穴勝ち非常に高いことを意味しないが、——感心し方をしたことには、いろいろの点が

挙げられる。第一に作の構成、デッサン、文章の洗練に破綻のない手際で、そのみでもこの作は成功した佳作と云へる。勿論慾を云へば云へる所はあるが、読後の感想はさうした技巧上のことだけでは済まない。そこにはこの作が一種の思想小説と見られるだけに、思想上の問題が残るからである。即ちこの作には一つの思想傾向だけが述べられ、それに対立するアンチテーゼになるものが現はれて来ない。或る対立はあつても、それは畢竟同類項中の対立を出ない。そしてその主調をなすデカダンの厭世観が何らの否定に遭はずにすらすと、人々を死へ駆り立てる。そこに何か不満な後味が残る。／僕などならば、かういふ思想気分を書きたくて書くならば、必ずそれを批判し、否定するもう一つのより、人間的、ノーマルな自然性を——そしてその方が勿論正しさを主張しうるもの——を對抗させることによつて、一層その虚無に喰ひこむか、或は計画に反してその虚無が破れるにしても、より以上の全体的真実に肉薄することかを企図せずにあられない所である。又その方がどういふ結果になるにしても効果も強くなるわけであるが、太宰はそんな大それた野心を持つほど馬鹿でないといふつもりか、どうか、兎に角唯一つの厭世気分を以て、能事足れりとするらしく見える。そして又そこにこの人の文学の腰の坐つた所もあるのである。／一つの貴族階級が観念的に想像せられ、その没落過程を描写することはこの作の場合、やむを得ない抽象性であり、あれはあれで差支へないと思ふが、この作の急所である終りの直治の手紙はもう一と息ぐいといつて貰ひたかつた。あれだけでも巧く書けてはあらず、論理も通つてはゐるのであるが、何かまだ十分に納得するには

少し物足りない憾みを感じる。しかし問題は矢張りあゝいふ人生觀の扱ひ方にある。といふのは日本作家はどこか子供らしい所があるのか、何でもノーマルなもの、常識的健康さを平凡として忌み、それだけでもデカダンの走つたりする傾向がないとも云へない。太宰は只趣味だけでやつてゐると思へないが、しかし人間といふものをたゞあゝいふ否定的気分だけを有ち、その反面に同時に生命への盲目的執着と愛とを持たない者として単に性格破産、自己破産者を書くことに止めること。それは勿論純文芸の立場としてそれでも差支へのあるわけはなく、作家の自由には相違ないし、又この作家の純粹性と、いふ処とは、自己に不適當な領域にまで決して野望を持たうとしない一種の寡慾淡泊さにあるのであらうとも思はれるが、結局さういふことは芸術批評とは離れた作家個々の性向の問題といふことに帰すべきか。／太宰に比して遙かに常識的にノーマルで、健康で、底抜けに呑気で、その上、人間にも人生にも一方不遜であつて差支へないと考へてゐる僕などの健康な好みからいへば、かういふ否定的気分だけを全部として畢らせる人間の扱ひ方は結局、余りにもこの過渡期的今どきの気分淫溺した作者の精神のひ弱さ、或は自恣的甘やかしのやうに思はれ、文学とは離れた不満を先づ禁じ難い。太宰一人はいいにしてもかういふ傾向がいくつことになつて流行することは太宰とても別に望むわけもあるまい。／しかし一つの歴史的な大きな過渡期——勿論人類のなものの——の「犠牲者」を描くことが本来この作の狙ひであり、又「犠牲」にある美しさを書くだけでも文芸作品としてはよくはないか、といはればそれ迄だともいへる。何も永遠的な相を書くことだけが文芸の

本領ではない。そしてこの作が読後に快くはなくとも、些かも嘘や、誇張や、牽強は感じさせず、又他の人が書けばキザになりさうなことを書きながら些かもキザになつてゐないのは、この作者がこの作を書くことが余程必然だつた一種の「本物」の故であり、さればこそ思想も肉体的にコナされ、感覚的に描けてゐるのである。又その「感覚」も、近頃よく見かける作りものの「感覚的」らしさでなく、本物であることも、この作を垢抜けさしてゐる。意識はこの作の狭い限界内で十分抜け目なく働いてをり、人から揚げ足を取られるやうな頭の悪い作家ではない。それに、デカダンの自己否定といつても、最下等な照れ隠しの自嘲を以て行き詰りを糊塗し、読者をおヒヤラ化さうとする如き種の作家の賤劣さなどを思へば、全くちがつたまじめな上等品であることも云ふまでもない。／勿論この作に現はれてゐる如き面だけをこのユーモア作家は今後追窮して行くものとも思はないが、一般に若い作家達は売れつ児になればなる程、生活が乱れ、さなきだに体力の貧弱な日本作家は生理的にどんどん廃頽して自殺的早死を急ぐ結果になるのは馬鹿げた話である。戦争で死を軽んぜしめられたことが、戦後の文学の上でまで自殺、他殺を無造作にする癖がついたのか、或はそれにあの「無償の行動」とかいふ、人の単なる思ひつきを真似ることとが結びつけられてゐるのか、何だか分らないが、兎も角、割合手輕な片づけ方をしていゝとしてゐるらしくも見える。

扇畑忠雄「人間への脱出―太宰治『斜陽』について―」(「ペン」第一冊、昭和二十三年七月二十五日発行)には、つぎのように記されている。

「新潮」昭和二十二年七月号から十月号にわたつて四回連載され、のち単行本に収められた太宰治の中篇小説「斜陽」は、最近多産の彼の作品の中でもすぐれたものであり、又敗戦後にぎやかに活躍している数人の中に、彼の特異性を一そうはつきりと位置づけるものでもあつた。たしかに彼の数多い作品の中ですぐれたものであるにちがいないが、むしろ問題作だと言つた方がふさわしいかも知れない。彼独特の着想なり、構成なり、技法なりが敗戦後の貴族階級の没落という好舞台を借りてほしきままに駆使されており、彼の長所をも欠陥をもふくめて従来の作品にみられたものが一まず集成された感がある。つまり、今までの太宰文学のエキスがこの一篇にみられるのであつて、これからの太宰がこの程度のものをくりかえして行くか、或いはここから何らかの飛躍と進展とを示してくれるかの、前者にとつては一つの頂点であり、後者にとつては一つの跳躍点たりうる作品であらう。もちろん、太宰にとつても、私たちにとつても後者であることがのぞましいのであるが、作品批評の態度としては、与えられた作品の在るがままの相に焦点をあて、その間おのずから彼の文学の發展の可能性如何がさぐられなければならない。／「ほんものの貴族婦人の最後のひとり」である母と、戦争から還えつて来た弟直治と、直治の文学の先生である小説家上原二郎の三人に対する主人公かず子の心理のもつれが、それぞれの人物の言動の上にくつきりと投影されていることにこの作品のおもしろさが在る。この四人の人物は一枚の感光板の上に平面的に置かれた存在ではない。前三人の姿態、思考のかげには必ずのように、かず子の影が添つていて、母対かず子、弟対かず子、上原対

かず子それぞれの場合のかず子がそれぞれの場合に応じながら変化しつつ、しかも三つの場合は微妙にかさなり合いながら一人のかず子を発展の形で結びつけているのである。こういう複雑な人物のあつかい方において、彼は同世代の作家の誰よりも、又彼の今までの作のどれよりもすぐれた効果をあげていると言えるのではあるまいか。小説の登場人物としては、むしろ少い方と思われるが、その少い人物を少いなりに制限いっばいに働かせているということ、そしてそれらの人物を平叙するやり方ではなくて、絶えず一つの抵抗としてからみ合わせながら結局一人を描いて行っているということにこの作品のおもしろさがある。太宰が「斜陽」において主人公かず子を第一人称とする告白的発想の型態をとつた所以はここに在るだろう。／母対かず子の場合。この母は、貴族の封建的な桎梏から脱出しようとして血みどろなたたかいをたたかうかず子と直治との姉弟の母として、美しく穏かな表情の下にすでに魂の苦悩を胎んである。この母から、「斜陽」ははじまつている。／朝、食堂でスープを一さじ、すつと吸つてお母さまが、／「あ。」／と幽かな叫び声をお喜びになつた。／「髪の毛？」／スープに何か、イヤなものでも入つてゐたのかしら、と思つた。／「いいえ。」／お母さまは、何事も無かつたやうに、またひらりと一さじ、スープをお口に流し込み、すましてお顔を横に向け、お勝手の窓の、満開の山桜に視線を送り、さうしてお顔を横に向けたまま、またひらりと一さじ、スープを小さなお唇のあひだに滑り込ませた。／太宰がその手法として頻用する奇手、逆手は往々にして作品を投げつけてしまつたり、又或る場合は見えすいた効果にとどまつたりしがちであるが、

この「あ」はなかなか至妙であつて、一篇に大きな伏線的效果をあたえて成功している。それから少し後のところで、／「あ。」／と私が言つた。／「なに？」／とこんどは、お母さまのはうでたづねる。／顔を見合せ、何か、すつかりわかり合つたものを感じて、うふふと私が笑ふとお母さまも、につこりお笑ひになつた。／何か、たまらない恥づかしい思ひに襲はれた時に、あの奇妙な、あ、といふ幽かな叫び声が出るものなのだ。私の胸に、いま出し抜けにふうつと、六年前の私の離婚の時の事が色あざやかに思ひ浮んで来て、たまらなくなり、思はず、あ、と言つてしまつたのだが、お母さんの場合は、どうなのだらう。まさかお母さんに、私のやうな恥づかしい過去があるわけは無し、いや、それとも、何か。／「お母さまも、さつき、何かお思ひ出しになつたのでせう？　どんな事？」／「忘れたわ。」／「私の事？」／「いいえ。」／「直治の事？」／「さう。」／と言ひかけて、首をかしげ、／「かも知れないわ。」／とおつしやつた。／大学中途で召集され、南方の島に行つたまま行方不明になつてゐる直治への思いが、その母をして「あ」という嘆声をもらしめたのであつたが、一方かず子の「あ」が六年前の離婚に対する恥かしい思ひ出にさそわれたものであつて、同じ「あ」でもその異質的対照はみごとに、あざやかでもある。しかも、それらの「あ」は直接に、間接に、直治を引き出す働きを持つており、直治帰還のあたりまで余響しているのを見のがすことはできない。／その間を点綴する、正式礼法に叶わない母の食事のたべ方、萩のしげみのおしっこ、蛇の話、西片町の旧宅から伊豆の山荘に引越して来た時の思ひ出、火事、戦争中徴用の思ひ出などま

ことに多彩な万華鏡をのぞき見るおもむきがあるが、その中でも蛇の話は母とかず子との関係を深刻にむすびつけているのみか、かず子の胸の中に宿る「蛇」のたくましい成長過程がこの一篇のモチーフを象徴しているとも言えよう。／貴族階級の解体そのものはここに描かれてはいない。だが、その解体の中で最後の美しい炎を燃やしている母と、そういう世界から脱出しようと「蛇」のいざないに身もだえするかず子との相剋が、ついにかず子に、「私さへ、ゐなかつたらいいのでせう？　出て行きます。私には、行くところがあるの。」と言い捨てさせ、さらに、「お母さま、私ね、こなひだ考へた事だけれども、人間が他の動物と、まるつきり違つてゐる点は、何だらう、言葉も智慧も、思考も、社会の秩序も、それぞれ程度の差はあつても、他の動物だつて皆持つてゐるでせう？　信仰も持つてゐるかも知れないわ。人間は、万物の霊長だなんて威張つてゐるけど、ちつとも他の動物と本質的なちがひが無いみたいでせう？　ところがね、お母さま、たつた一つあつたの。おわかりにならないでせう。他の生き物には絶対に無くて、人間にだけあるもの。それはね、ひめぐと、といふものよ。いかが？」という悲しい言葉を吐き出させている。／短篇「雀」の中に、伊東温泉で療養していた傷痍軍人の加藤慶四郎が射的場で雀の標的を撃とうとする個所がある。／さらに四発目。当らない。／「ほんとうに、どうしたの？」と言つて、ツネちゃん（註、射的場の娘）はしやがんだ。／僕は答へず五発目の弾をこめる。しやがんでゐるツネちゃんのモンペの丸い膝がこんもりしてゐる。この野郎。もう処女ではないんだ。／いきなりブスとその膝を撃つた。／「あ」と言つて、

前に伏した。それからすぐに顔を挙げて、／「雀ちゃんいわよ。」と言つた。「雀」／それから「ヴィヨンの妻」の結末、／私（註、妻）は格別うれしくもなく、／「人非人でもいいぢやないの。私たちは、生きてゐさへすればいいのよ。」／と言ひました。「ヴィヨンの妻」／と共に、悲しい人間の真実を歌つた叫びとして印象にのこる言葉だと思ふ。これらは人の意表に出た、むしろ自虐の言葉だとさへ思われるのに、人間に対するぎりぎりの愛情がうら返しに表現されていると言つていい。現代の文学には多かれ少かれ自虐の要素を持たないものはないが、太宰の場合、つねに人間への素朴な愛情によつて支えられている点が彼の文学の「頽廢」に墜ちる一歩手前でいつも救われているところであろう。自虐や頽廢に徹することによつて救われるという深刻さに乏しくどうかすると落語的な「落ち」に終つたり、通俗的なあまさを残したりするのは往々飽き足りないが、素朴ながら愛情のうら打ちのあるところに彼の文学の価値があるともみられよう。／直治が「南方の島から蒼黒い顔になつて還つて来た。」この前後から母とかず子と直治とかず子の場がかさなり合つて、しかもその母の死まで遠く溶暗されている。それはまことにみごとな、起承転結とも言おうか、序破急とも言おうか、構成のリズウの進行に、読者は三嘆の声を惜しまないであろう。／直治とかず子の場合。直治のノートブック「夕顔日誌」は彼が麻薬中毒で苦しんでいたころの手記であつた。それを彼女が何気なく手にとり上げて読んだのである。こういう日記とか、後に出て来る手紙などの挿入は、日記や手紙などの持つ自照的眞実性を逆に利して、虚構の眞実性を強調する手法でもあるが、「斜陽」

においては相当の効果をあげていると考えられる。この「夕顔日誌」はまさしく太宰治の日誌に他ならない以上、この小説を、のみならず彼の文学を解く鍵がこの中に秘められていないと誰が言えよう。／＼エテにだつて誓つて言へる。僕はどんなにでも巧く書けます。一篇の構成あやまず、適度の滑稽、読者の眼のうらを焼く悲哀、若しくは、肅然、所謂襟を正さしめ、完璧のお小説、朗々音読すれば、これすなはち、スクリンの説明か、はづかしくつて、書けるかつていふんだ。どだいそんな傑作意識が、ケチくさいといふんだ。小説を読んで襟を正すなんて、犯人の所作である。そんなら、いつそ、羽織袴でせにやなるまい。よい作品ほど、取り澄ましてゐないやうに見えるのだから。僕は友人の心からたのしさうな笑顔が見たいばかりに一篇の小説、わざとしくじつて、下手くそに書いて、尻餅ついて頭かきかき逃げて行く。ああ、その時の、友人のうれしさうな顔つたら！／＼僕が早熟を装つて見せたら、人々は僕を、早熟だと噂した。僕が、なまけものの振りをして見せたら、人々は僕を、なまけものだと言った。僕が小説を書けない振りをしたら、人々は僕を、書けないのだと言った。僕が嘘つきの振りをしたら、人々は僕を、嘘つきだと噂した。僕が金持ちの振りをしたら、人々は僕を金持ちだと噂した。僕が冷淡を装つて見せたら、人々は僕を、冷淡なやつだと噂した。けれども僕が本当に苦しくて、思はず呻いた時、人々は僕を、苦しい振りを装つてゐると噂した。どうも、くひちがふ。／＼多分に逆説的な表現ながら、ここに彼の小説創作論がかいま見られる。そしてこの「くいちがい」に身をもがいているのが、彼のすべての小説に出て来る人物、人生の

道化者どもである。この手記を書いた直治はもちろん太宰の分身であらうし、そういう意味でなら、母もかず子も上原二郎もすべて彼の分身ならざるはない。殊に小説家だけに上原はもつとも彼に近いと思われても仕方あるまい。その母も直治も死んで行き、後にのこる二人の間にいよいよ「戦闘」が「開始」されて終末に運ばれるのであるが、この上原対かず子の場合、今の直治対かず子の場合に全くかさなり合い、交錯して出発しているのである。／＼六年前、夫山木の疑惑を受けて離婚となり、直治の小説の先生上原二郎との一度の行き逢いから、彼女の苦しい「ひめぐと」がはじまるのであるが、思い余つた彼女はついに上原につづけざまに三通の手紙を書いて、「中年の女の押しかけ愛人」たらんことを期している。そして第一通には、上原二郎様（私のチェホフ。マイ、チェホフ。M・C）とあり、第三通には、それがM・C（マイ、チェホフのインシヤルではないんです。私は、作家にこひしてゐるのではございません。マイ、チャイルド）とあつて、封建的な道徳の枠からぬけ出し、いわゆる「札つきの不良」にさえなるうとしているのは、彼女の苦悩を通しての人間の成長であつた。尚言え、最後に、上原から捨てられた彼女の最後の手紙の宛名が同じM・Cながら、M・Cマイ・コメデアンとあるところに、M・Cの三段階の変化を通して彼女の逞しい成長が跡づけられている。／＼「人間は恋と革命のために生れて来たのだ。」彼女はこう確信した。それから間もなく「秋のしづかな黄昏、看護婦さんに脈をとられて、直治と私と、たつた二人の肉親に見守られて、日本で最後の貴婦人だつた美しいお母さまが」亡くなつたのである。／＼上原対かず子の場合。

母が世を去つてからは、新しい倫理（「いいえ、そう言つても偽善めく。恋。それだけだ。」）をかちとらんが為にいよいよ「戦闘開始」となるのであるが、その気持は母の最後に近いころから決定的なものになつてゐる。「あさましくてもよい、私は生き残つて、思ふ事をしとげるために世間と争つて行かう。」それは三通の手紙にまでさかのぼることのできる、貴族ではなく、人間としての自覚であつた。あの手紙から六年目の今日、小料理チドリでようやく探しあてた上原は一族郎党にとりかこまれながら「ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ」（「トカトントン」）の効果を思わせる）のばかさわざを演じてゐる。それは、もう六年間彼女の胸にあたたためて来た人のおもかげではなかつたが、「かなしい、かなしい恋の成就」にせめてもの幸福が微光のように訪れたのもつかの間、「弟の直治は、その朝に自殺してゐた。」そして、直治の遺書がつづいてゐる。上原の手下になつた、復讐上りの無頼の徒直治も短い一生を、貴族からの脱出にもだえ苦しんで死んで行つたのであつたが、「もういちど、さようなら。姉さん。僕は、貴族です。」の言葉のように、彼もついに敗れ去つたのである。貴族の殘党である母と直治の死、それは貴族没落の斜陽であつたと言えよう。後にのこつたかず子が上原との交渉に於いて、古い道徳との闘いに一人の私生児をえて、第二の精神革命に生きようとする終末は、今までの太宰にない素直な明るさを感じしめ、これからの先の世界に、たしかに足を踏み込ませうる可能性が予見される。評者あるいはこの「斜陽」一篇の特長を、没落してゆくもの、弱いものの美しさにあると言ふかも知れない。全篇の印象から言えば、結果的にはそうな

るかも知れないが、そして上原も滅び行くものの一人であるにちがいないが、かず子の果敢な道徳革命を通しての人間の成長に照明をあたえれば、そこにこそ「斜陽」の主題が浮び上つて来るのではあるまいか。うしろ向きの人生ではなく、前向きの人生を、精神の解放をさらに社会的な「或るもの」ときびしく対決させることによつて、描いて行くこと、これが成しとげられない以上、太宰の文学は気のきいた小文学にとどまつてしまふであらう。この一篇を書いたからには、そこまでの歩みが、太宰に期待されなければならない。

曰井吉見「太宰治論」（「展望」第三十二号、昭和二十三年八月一日発行）には、つぎのように記されている。

『斜陽』は没落貴族の家庭を背景にして、老母と姉と弟と小説家と四人を登場させ、だいたい姉の日記と手紙を通して語られる、にぎやかなロマンであり、追憶にうかぶ老母のすがたに作者の憧憬的な人間像を夢みたことは、『右大臣実朝』に対応するものであるが、これは亡び去つてふたたびこの世に出現することのないものとして描かれてゐることはいふまでもない。人間と争ひ、人間と戦はなくては生きてゆくことのできない人間社会に絶望して弟は自殺するが、姉は既成の日常道徳をこえて強く生きて行かうとする。小説家上原は、『ヴィヨンの妻』の詩人にほかならない。太宰はここでおのれの分身を小説家上原に与へてゐることはいふまでもないこととして、更に彼は、弟に、部分的には姉にも、自分の魂を分ち与へてゐる。太宰の魂を一ばん多く与へられてゐるのが、自殺する弟であることいふまでもない。作者の身邊に近い、切実な題材をとりあげながら、登場する四人の人物のう

ち、一人におのれの憧憬を、二人におのれの魂を、残りの一人におのれのすがたを頒ち与へて、一個のロマンを構成したところに、太宰文学の独自の性格を語つてゐるのであるが、あまりにおのれの魂を頒ちすぎて、それぞれの人物の独立性が稀薄になつたきらひがあり、弟の手記や姉の手紙に託して多量の太宰的随想をも点綴し、いはば太宰のおもちゃ箱をひつくりかへしてみせたといつたふうのものである。

吉邸堯「惜別」のころ」(『東北文学』第三卷第八号「追想の太宰治・特集」昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

作品年譜からいうと、「惜別」を軸心に、この二年半の半径円は「津軽」を起点として、そこから百八十度のところで「斜陽」にむすばれてゆく。偶然の気まぐれであるかも知れないが「惜別」のはじめの方で、周さんと愛称されるのちの魯迅先生が、松島の海岸に立つて、折柄あかね色にかがやきたる異国の斜陽に呆然見入るところが書いてある。「斜陽」という何か必然的な運命について、彼はすでにそれへの愛着を感じていたのではなからうか。若い医学生生の魯迅先生は、松島の斜陽にひたりながら、そのとき故国の西湖を郷愁のうちに去来させているのだが、西湖も松島も、とつおいつの現実からは遊離してしまつて、ただ「斜陽」の現実だけがびしく美しく残されていた。あの雄大な落陽ではなくて、ふわりと掬すべき斜陽のしんみりした情景である、味わいである。

なかの・しげはる「死なぬ方よし」(『芸術』第七卷第二号「太宰治追悼」昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

人としていゝ人で、しじゆう共産主義、共産党、革命運動のことに頭を占領されていたが、そのことを全面的に、自分自身にたいして明らかにすることなしに引ずられて行つたかたむきがある。下らぬ取りまき連中をけとばすことが出来なかつたらしい。それが作品にもあらわれて、「斜陽」なんかではああゆうこさえものを登場させて、自分のこさえものに作者が引ずられるところへ行つた。あの「貴族的」な人物の動作、ことにあの言葉づかい、あれは作者がわざとやつていかと思つていたが、段々読むと逆で、真面目に書いていたらしい。そのへんは日本のわれ／＼全体にあることで、これは同時代の世界文学との比較でよく分つて来るのだからと思う。

檜崎勲「太宰治氏への手紙」(『文芸時代』第一卷第八号「太宰治追悼特集号」昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

ところで、あなたは自分をいろいろなかたちや方法で虐待してゐるやうですが、ほんたうは、さういふ自分をいぢめぬくといふはたらきの究極は、自分自身をこのうへもなくいとしんでゐるからだともおもはれるのです。あなたほど、自分にむかつてベツベツと唾を吐きかけてゐながら、猫が眠りからさめたり、何かものをたべたりしたあと、絶えず自分のからだのあちこちを丹念執拗に舐めまはすやうに、あなたほど、自分でかきむしつた心の傷痕にできたかさぶたのやうなものをやはらかく舐めまはしてゐるひともゐないとおもひます。といふことは、あなたもまた日本の小説で一つの位置を占めてゐる「私小説」の作者であるといふやうな見方も出来るのではないかとおもひながら

れるからです。私はここで「私小説」についての論議を、屋上屋を架さうとはおもひませんが、例へば、あなたのいままでの作品のうち、もつともコクのある、もつとも滋味ふかい、「斜陽」にしても、復員してきて自殺する直治のうちに、「私小説」の「私」を、あまりにもむきつけにみせつけられ、やはり、太宰さんも本格的作品のどこかで「私」といふものの尻尾を出してゐるとおもつたことでした。といつて、本格的作品に、「私」が出て、いいとか、わるいとかいつてゐるのではありません。このやうなことは、さきほどもいひましたやうに、「私小説」論で、幾度か論じられたことですから。／＼ところで「斜陽」は、終りちかい直治の手記の章にいたつて、あの作品のもつ構成と調和が、惜しくも破られてゐることを、あなた自身十分に承知されてゐることとおもひますが、何ういふものでせうか。いづれにしても、構成と調和のズレは惜しみてもあまりありといつていいのではないでせうか。私は、耳をかたむけて聴きほれてゐた美しい音楽（神西清氏は、あの作をモーツァルトのト長調のフルニート協奏曲になぞらへて絶讃の辞をおくつてゐますが）で壇上の指揮者が急に気が狂ひ、指揮棒をクラリオネット吹きに、一オクターヴも高い音を出させたりやうな気がしてなりません。音階の狂ひが氣になつて仕方がありません。私は、神西さんのやうに、「斜陽」は一本にまとまつてから読んでゐませんが、分載されてゐるときの「斜陽」の第一回、第二回、をよみつづけて、ごくりごくりと唾のみこみ、息をつめて読みふけた自分自身を、はつきりおぼえてゐます。恍惚感をおぼえてゐたのです。私は奏西の小説は翻訳されたもので読むので、原文のもつ、ニ

ュアンス、醍醐味といふものを味ふことはとうてい出来ませんが、「斜陽」をよみながら、フランスの小説のえもいへぬ味覚をかんじたことでした。日本にも、このやうに神経のこまかい、このやうにも心にくいばかりに人間心理のあやの織物をつくり出す作家があらはれたのかと、讃歎したのでした。といふことの一面は、あなたのいままでの幾篇かの作品は、人間心理の筋肉だけが、眼につき、噛みきらうとしても、なかなか噛みきれないといふ粗さがあつたのですが、「斜陽」の一作には、さういつた人間心理の筋肉といつたものは微塵もかんじられず、月並みなたとへですが、天鵞絨のやうな触感のなかに、ほのあたたかくつつみかくされてゐる人間の溜息と心理があるのです。この天鵞絨のやうな触感のある作品を過去の日本の作家のなかに、しひてもとめやうとすれば、鈴木三重吉の作品をあげることが出来さうですが、しかし、時代の距離のもつ感覚、感情といふものは、またおのづからちがつてゐることはいなめないのです。やはり、あなたは自意識過剰の近代人だといふことです。／＼私は、あなたを目して、ロマンチストであり、またリアリストであると思いましたことは、また、別のいひかたをするならば、あなたの主観を、ぼきり、ぼきりととべてゐる作品と、客観的にかいてゐる作品のうちに見出すことが出来るといふ意味でもあるのです。その実例を、個々の作品をもつてしたいのですが、あひにく、手許には、さきにも申しましたやうに三冊の本しかありません。／＼ただ、このことだけは、はつきりいへるのです。「斜陽」は、直治の遺書の章になる前までは、あなたはリアリストの眼で、ときに、非情に、ときに抒情的に、ときに、厳肅に、ときに冷

酷にかいてゐるのですが、直治の遺書の章になつて、あなたはあなたのむかしの詩をうたひ出してゐるのです。しかし、かんがへてみますと、あなたが、洛陽の紙価をたかめるていの「斜陽」を書いたからといつて、別におどろくには当たらないのです。そしてあなたの作品を愛読してゐるものならば、「斜陽」のやうな本格的リアリズムの作品が生れ出ることは不思議でもなんでもないので。「貴婦人であるお母さま」も「出もどりのかず子」も、「直治」もあなたのこれまでの作品のなかのどこかで、その変身を見出せるからです。あなたは、それをただ、あなたの主観の詩をころして書いたまでなのです。また、あの「斜陽」のスタイルにしても、「思ひ出」などを読んでゐるひとには、おのづから一筋のつながりのあることを、何らの脈絡なしにしぜんなかたちのうちにおもひ出せる筈なのです。ほんの一例ですが、「思ひ出」のなかで、ひそかにおもひをよせてゐたみよとよぶ女中をさそひ、よしずで四方をきちんと囲つた葡萄棚の下で、葡萄をとるところの情景のあざやかさは、そのまま、「斜陽」の随所にみられるあざやかな情景にかよつてゐます。

水口伸二「逆流の詩——太宰治の文学——」（『時論』第三卷第八号、昭和二十三年八月一日発行）には、つぎのように記されている。

彼の、ゆたかな才能は、まだまだけつして尽きてなどいなかった。多くは、才能と戯れるような習作風のもので、ほんとに打ち込んで仕上げた動かない作品などというものは、ほとんど一篇もなかつたといつてよい。傑作といわれる「斜陽」でさえ、前半の緻密で、なめらかな格調は後半にいたつて、すくなくならぬ破綻を示している。作品とし

て引き締つてゐる点では、むしろ「親友交歓」あたりを採るべきであらう。／（略）太宰は、その人間も、文学も、ほとんど異常なまでに、純粹に抒情的であつた。體質的に抒情的であつた。その抒情の天分から、閃めくように、ほとぼしるように流れ出る美しい、独自の散文詩的スタイルが、真に彼のものであり、彼の文学のユニークな本質を成していた。それは、「斜陽」のあの「お母さま」の人間像、「雌蛇」の不思議な生彩、「ヴィヨンの妻」のあの霧か、軽い液体の中のような雰囲気……かもし出すものである。／それは、小さな生きものや、かすかな物音や声、身振りにひそむ人の心の影の動き……などを、奇妙に正確にとらえて、それに、不思議なまでの生彩をあたえることのできる独自の才能であつた。「あゝ」という一字などを、無類に巧みに使いこなす修辭であつた。／かような才能は、もちろんその長い修練に負うところのものであらうが、より直接的に、宿命的に、その異常な抒情的體質に孕む——美しいものへのあぐがれ、純粹なものへの詩——に由来するものであつた。いつも、その反対のもので仰しいまでに武装していなければとてもいられなかつたほど、夢と純粹のもの、け、のような男であつた。

丹羽文雄「狂い咲きの花」（『月刊東奥』第十卷第五号「追悼太宰治」昭和二十三年八月一日発行）には、つぎのように記されている。

『斜陽』に私はこの四十代作家の年輪的な成長のあとを読みとれなかつた。文学は健康なものであるべきだと主張する私から見、太宰の作品が狂い咲きの花であることにも近付けないものが感じられる。もつとも私は彼とは精神的、肉体的、思想的に正反対なのだから、一

緒に考えてもはじまらぬといえはそれまでである。

下山俊三「不惑ならず」(『月刊東奥』第十巻第五号「追悼太宰治」昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

彼の死——の原因は、いろいろ臆測されているが、その一因といわれる最近某総合雑誌の座談会の志賀直哉の太宰評に、『斜陽』で貴族の娘のことを書いているが、あれはチツとも貴族の娘ではない、山出しの田舎娘ではないか、といった意味のことが速記録に出ているが、あの座談会なども太宰の最近、衰えた肉体と精神に与えた打撃は、外部の者が考えるより遙かに強いものがあつたろう。／日本人によりわからない……それも限られた或る一部の『教養ある』読書人にしかわからない、茶室向き小説より書けない志賀直哉が、三人束にして死ぬより太宰一人の死の方が、僕たちには堪え難い痛さであり、損失である。

三樹青生「六月と太宰治」(『月刊東奥』第十巻第五号「追悼太宰治」昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

『こいしくば、たずねきてみよ、みずの底』——初期の作品のなかでこんなパロディを書いた太宰治は、それをそのままに水死した。彼は初夏の水と花を愛した。死ぬ季節はやはり選ばれたものだつたに違いない。『夏の花が好き』とは夏に死ぬ(斜陽)、そして桜上水は彼の大好きな散歩路の一つだつた。／この『道德の過渡期の犠牲者』(斜陽)はこの明治四十二年の六月十九日に生れた。彼はこの日だけは好きでなかつた。自己の生とその初日に対する宿命的な恐れと不安、『生れた時からの日蔭者』(人間失格)、『晩年』から始めた作家。(略)

／彼もまた自分の運命の月、運命の星へ反逆をこころみた。その抵抗が作品を生んだ。どのような彼でもよい、立派に生き切ろうとしたのだ。『死ぬ人は、わがままだ。わしは、死なぬ。生きて、わしの宿命を全うするのだ。』(新ハムレット)『私はいま生れた。生きている。生き、切る。』『僕は生きて行かなくちやいけないのです。』(ダス・ゲマイネ)。これらの言葉はたえずリフレインとなつて現われる。死のかげの濃い『斜陽』においてすら、かず子(斜陽)に『あさましくともよい、私は生き残つて、思う事をしとげるために世間と争つて行こう。』と決意させている。かず子は作者の最後の抵抗であつたのだ。それにもかかわらず、作者は自殺した直治と行を共にした。『僕という草は、この世の空気と陽の中に生きにくいんです。生きて行くのに、どこか一つ欠けているんです。足りないんです。いままで、生きて来たのも、これでも精一ぱいだったのです。』と。悲しい『人間失格』。／一しよに死んだ女性が、かず子と同じ年であつたことは単なる偶然だつたろうか。太宰は『斜陽』が書かれた年の六月一日廿九歳のその女性の家に足を踏み入れた。まる一年たつた六月ふたりは死んだ。やはり『かず子』は実現できなかったものであろう。ふたりの写真の前に飾つてあつた夏の花は『世紀の悲しみ』に一瞬燃えた『フオスフロレスセンス』であつたかも知れない。

久野真吉「一貫した創作態度」(『月刊東奥』第十巻第五号「追悼太宰治」昭和二十三年八月一日発行)には、つぎのように記されている。

其後津島、上田両君は文壇にデビューして認められたが、上田君

の創作——例えば『絵姿』『緑地帯』——を嘗て読んで高校時代のものとは可成異つた印象を受けたのに反し、津島君の創作態度は一貫して変らぬ。今度津島君の『此の夫婦』それから最後の作品『斜陽』を読んで感じたのだが、津島君の人生に対する捉われない見方、それを表現する素直な技巧は一貫しているように思う。／（略）／『此の夫婦』から『斜陽』に一足飛びに跳んで見ると作品としての木理の細さの差、登場人物の人間味の深さの違いに驚かされるが、思想やイデオロギズムを超越した作者の態度は一貫している。『此の夫婦』の光一郎と『斜陽』の上原と比較して見ると、人間的価値、作家的気質の点では雲泥の差があるが、物に捉われない生き方に共通点がある。『此の夫婦』は純粹の文芸作品と呼ばれる程洗練されたものではないが、青年の作品らしく逞しい生への肯定がある。『斜陽』ではなるほどかず子は最後に上原の赤ちゃんを生み、生を肯定した形になっているが、直治が遺書の中で『人間には生きる権利があると同時に死ぬ権利もある筈です』と云っているように、『斜陽』は白鳥の歌にふさわしく死への肯定らしく思われる。自然界に於いて弱者が淘汰される如く、人間界に於いても精神薄弱者は淘汰されて行く。少なくとも貴族趣味の人々は荒つぱい民主的世界には住めなくなつた。即ち貴族の没落は必然、その没落が『斜陽』では具象的に麗しく描かれている。『斜陽』は美しい作品だ。秋の夕映のように美しい。これ程美しい作品は将来も余り生れないだろう。

無署名「苦業のあと——太宰治氏の原稿——」（『文学の世界』第二号「名作紹介号」昭和二十三年八月十日発行）には、「斜陽の一部」の原稿

が掲げられ、つぎのように記されている。

亡くなられる五日ほど前、太宰氏は原稿を書くことの如何に苦しい業であるかを、誇張のない言葉で記者に語つた。この数年来、どんな調子のよい時でも、一日に二枚半とのことだつた。確かに氏は多作家ではなかつた。この原稿でもわかるように、一字一字に生命を打込んでいるような、謙虚で綿密な筆跡である。時代の憂悶を背負い、自らの血肉を刻みつゝ、太宰氏はついに文学に死んだのである。

奥村五十嵐「斜陽 太宰治作」（『文学の世界』第二号「名作紹介号」昭和二十三年八月一日発行）には、つぎのように記されている。

私の中には批評家と読者がべつべつに住んでいる。これは私だけのことで奇妙な現象であらうか。で、私の中の批評家は、現在の日本の作家の中では、宮本百合子と徳永直を認めている。しかし、私の中の読者は、室生犀星と太宰治を愛しているのである。誰が好きかという話題が出る度に、私はいつも躊躇なく室生犀星と太宰治の名をあげる。／しかるに、この「斜陽」に於いて、太宰治は読者としての私に満足を与えてくれたばかりでなく、私の中の批評家にもはたらかせたのだ。貴族の没落の悲劇がここには描かれている。一切を運命に托して静かに滅び行く日本最後の貴夫人。「民衆の室に入る入場券」を得たいと悪戦苦闘のあげく、民衆への嫌悪と貴族の誇りをもつて死の自由を選ぶ弟。平民の子をはらんで、その子と共に革命戦に乗り出して行く姉。その画きわけのみごときはまことに驚嘆にあたいする。／しかし、私ならば「斜陽」という題はつけないであらう。反対に「黎明」という意味の題材を考えるであらう。私は「斜陽」という題名の

中に感じられる一種の感傷性がいやなのである。だが、これは所詮、某県の知事を兄に持つ太宰治と、水呑百姓の家に生れて小学校までの学歴しか持たない私との、階級的な血液の相違から来ているのにちがいないと思はれる。

十返肇「太宰治論―罪と革命の意識」(「肉体」第二巻第四号、昭和二十三年八月二十五日発行)には、つぎのように記されている。

1/「斜陽」完結(「新潮」二十二年十月号)を機会として、ここに太宰治の作家的態度が、あたらしい一つの転機に立つてゐるのを僕は覚えざるにはいられなかった。作者が、この作品の終末で弟の直治を殺したという事、それは、いわば作者が在来の自己を揚棄したのを意味するのではなからうか。そして姉を自分流の「革命」の意志の中に生かしてゆこうとする事、それは作者の今後における方向を明示してゐると観ては余りにも機械的な作者と作品の結び方であるとの譏りをまぬかれまいであらうか。／そして作者は、この何れにも組みせず、冷然と傍観してゐるとして、これまでの氏の作品を一貫する立場から動こうとしてはいないと観るべきか。或はその何れに自己を置いたものかと思案中であると観るべきか――しかし、いま僕は目下の太宰氏を、そういう傍観や彷徨の態度にあるとは考えないものである。／弟を殺し姉を生かしたという点に、太宰治の動きだした姿勢を見ずには、氏について現在なにも僕は語ろうとは思わない。何故ならば、もはや太宰氏は余りにも長い年月にわたつて彷徨しつゞけてきた。その彷徨の果として傍観の位置に停着するには余りにも長い期間であつた。この動きだそうとする態勢を僕は信じたい。「斜陽」の最終回で

それを目撃して、僕は思わず、はッと何者かに祈りたいほどの感動を覚えたのであつた。僕がそのような動こうとする氏の態度を信じ得ずには、氏について何事も書きたくないと思つたのはその時である。／勿論、僕の体験した感動は、恐らく『斜陽』を書き終えた作者そのひとの感慨する精神的自覚とは異つた内容を持つてゐるであらう。しかし、それにしても全く隔絶してゐるものとも思われぬ。氏の十年間にわたつて棄身の苦闘を振り返り、僕は他人事ならない感動に陥つたのである。／(中略)／6/「ヴィヨンの妻」「おさん」「斜陽」におけるそれぞれの夫婦は共に同じ男女のヴァリエーションであるといつていいであらう。これらの良人たちは何れも奔放不羈、或は放縱無頼に見える態度にもかかわらず、内実は唯そうでもしなければ生活の日日がやり切れず現実の中で自己を生かして行けない弱い敗北者として描かれてゐる。彼等は自己に忠実であらうとすればするほど人間としての健康な生き方を踏み外すのである。そして彼らをしてその様にデカダンスに流さしめる精神が何故ヒウマニズムに到達し得ないかという限界を作者は女の眼を通して鋭く追究してゐる。こういう太宰氏の態度はもはやデカダンスとはいえず僕はそこにデカダンスを突き抜けた自己批判の厳しさを見るのである。／かかる自己批判が時代の混乱がもたらせた夥しい自己主張の渦巻のなかで行われたという点に太宰氏の今日における真摯な知的態度が認められる。少くとも氏は自己の知性を血肉化して、反省の対象たる自己の弱さを無残に突き刺したのであつた。そしてかかる男ども妻の上に新たな人間像を創生しようとしたのであつた。／……奥さんの端正なプロフィールが、水色の遠い夕空

をバックにして、あのルネッサンスの頃のプロフィールの画のようにあざやかに輪郭が区切られて浮かんで、僕にそつと毛布をかけて下さつた親切は、それは何の色気でも無く、慾でもなく、ああヒュマニテイという言葉は、こんな時にこそ使用されて蘇生する言葉なのではなからうか……(斜陽)／デカダンスの中に苦しく身もだえしている若い直治の眼に映じた上原の妻のこのような美しさは、貴族の母には見られぬ太陽に向つて生きるものの健康さであつた。苦悶を知らぬのではなく、苦悶をつつんで傷つかない生命の静かな姿である。これが戦後はじめて太宰氏の作品に登場した新しい女性のタイプであるが、氏はかかる妻の眼を通じて氏の在来の混乱と彷徨を批判しているのである。／(中略)／「斜陽」において氏は上原とは別に若き日の自己の姿を、戦後の混乱する一青年たる直治に再現させ、彼をして自殺せしめた。再びいう、僕はここに氏の反省の究極の姿を捉えようとするものである。苦悶するのは高貴な精神であるが、その苦悶が頹廢の底に陥つたときは滅亡せざるを得ぬ。直治の遺書は語っている、「僕は貴族です」、そして貴族であらざるを得ない限りは死なねばならぬ。ここに精神の貴族であつた太宰治の自己否定が行われる。そして氏の自己再生は姉の道徳的革命のうちに意慾されようとする。かくて斜陽は没して旭日が昇るのであるうか。然し、今日の戦後の時代的現実は、なおそこに通過しなければならぬ命題を多く孕んでいるのである。／7／「人非人でもいいぢやないの、私たちは生きていさえすればいいのよ(ヴィヨンの妻)／おのれの罪の意識に苦悶する良人に対して、妻はそのように答えた。妻は「生きていさえすればいい」というが、更

にいかに生きるべきかが当然つぎの問題となるであらう。／「こひしいひとの子を生み、育ての事が私の道徳革命の完成なのでございませう」「斜陽」／かくて、「古い道徳を平気で無視して、よい子を得た」という満足感に支えられて彼女は出発する。人間革命えと……／まことに現在日本が必至とする平和的民主革命にあつては、社会革命と人間革命が相まつて成されなければならない。「犠牲者、道徳の過渡期の犠牲者」は、そのような現代日本のすべての人々についていわれ得る言葉であつた。十年にわたる彷徨と混乱の果から、作者は人間革命という生きる目標を把握した。／私の胸に革命の虹をかけて下さつたのはあなたです。生きる目標を与えて下さつたのはあなたです」／作者は十年の過去にたいして、そういつているのである。／思えば苦しい戦いの季節であつた。／然し、氏はそこにデカダンスの毒を身をもつて生きてきたからこそ、今日かかる道徳の意識に到達し得たのである。罪惡の意識から革命の意識へ——太宰治の文学的人生経過は、かくて現在に到達した。／しかし、生きて行く道の終らない限り、氏の苦悶も亦終りはしない。「第二回戦、第三回戦をたたかうつもりです」という「斜陽」の女主人公の言葉は、また同時に作者自身の決意であらねばならない。／「革命は、いつたい、どこで行われているのでせうか。すくなくとも、私たちの身のまわりに於て、古い道徳はやつぱり、そのまま、みじんも変わらず、私たちの行く手をさえぎつていきます」／「革命は、まだ、ちつとも行われていないんです。もつと、もつと、いくつもの惜しい、貴い犠牲が必要のようでございます」／「最後の貴族」の娘であつた彼女のこのような叫びは、革命前夜にある僕

らにとつて、確かに共感をよぶものである。然し、彼女の道徳革命の内容について、果して作者はどれだけ明確な生き方を具体的に示し得るであらうか。これらが僕らが今後の太宰氏から聴こうと欲するところのものである。ただ愛する人の子を育てるというだけではなく、如何にして育てるかという問題である。新しき人間は如何に生きるべきかという現代最大の命題が「斜陽」を書き終えた氏の前に在る。／罪の意識による人間性の破壊から革命の意識による人間性の再建デカダニズムからヒウマニズム、否定から肯定へ——戦後の現実には次第にその速度を加えつつ、そこに生きる我々に新しい道徳を欲求している。

「斜陽」の終つたところから、僕らは生きてゆかなければならないのである。道徳的革命の具体的 明を僕らは自己の生活で生活する過程にあらわしていきたいと思うが、太宰氏もまた次の作品においてはそれを示してほしいものである。「ヴィヨンの妻」や「おさん」では母としての生き方は、決して明瞭に示されているとはいえなかつた。真に革命が行われるのは、そのような母と子の上に新しい倫理による生活が展開される時である。そして、これは現代日本人すべてが探究し模写し、またおのおのの生活において建設して行かなければならない問題である。氏が「第二回戦第三回戦」に如何にして戦うかが切に期待される所以である。／一九四七年の文壇において、「斜陽」と「ヴィヨンの妻」は共に恐らく最も記憶されるべき作品であつた。然し、それは新しき人間の生き方を描いた作品ではなく、新しき人間を産むための倫理を示し得た作品であつた。

河上徹太郎「死の文学」(「新潮」第四十五巻第九号、昭和二十三年

九月一日発行)には、つぎのように記されている。

現に死の最も真近に書いた長篇「斜陽」と「人間失格」を見給へ。彼の疲れと錯乱は歴然としてをり、彼が、もうどうにもならぬ、ありたけなものを書いたから後はいゝやうに読んでくれ、といつて投げ出したものが明瞭である。彼は決して枯渇したり、行詰つたりして死んだのではない。だから文学者として自殺したのではないし、これらの遺作、殊に「斜陽」が一般読者に殆んど例外なく好評である所以だ。

／然し「斜陽」は初めから私には受つけられなかつた。没落貴族と称する母娘が下品で厭味つたらしく、かといつてこの肩書にこだはらねば筋に意味がないし、何か作者の衰弱よりも、これに喝采を送る読者層の衰弱を思はせるやうなものであつた。私は苦々しいよりも痛ましい気持で、この印象は座談以外には口にしないであつた。作者の生前この作品について同意見を活字で述べてゐたのは、私の眼についた限り、志賀直哉氏一人であつた。今になつてこんなことを書くのは、当人が居なくなつて安心してゐるのではなく、その反対で供養になるつもりであるのだが、私のこの気持を故人は分つてくれるか如何か?／太宰君の作品をペシミズムとかニヒリズムとかいつて評するのはよからう。彼が作品の上で死を弄んでゐたのも確かだ。或は「冬の火花」や「斜陽」の女性に代表されるデカダンスが、生の価値や技巧や観念のすべてに執着がなくなつて、赤裸々な、一ト筋の現存に頼つてゐるのも認めよう。然しこれらのものが私に与へる印象は、決して「美」ではない。崩壊してゆく生が最後に放つ頹廢的な美の斜陽ではない。ボードレールがいつてゐる次のやうなものではない。／「ダンディズムは落

日である。傾く太陽の如くに壮大であり、熱がなく、憂愁に満ちてゐる。……それは、輝けば輝けるのだが輝くことを欲しない潜める火ともいひ得よう。」「(浪漫的芸術)」／就中この最後の条件故にダンディズムは美しいのであつて、それは単なる追つめられたものや、取り遣されたものゝ能はぬ所のものである。／勿論太宰君がボードレールの頹廢の具現者でなくとも一向構はない。殊に今のやうに死の印象の生々しい時に納り返つて文学論をやる氣は全くない。たゞ私は頹廢とか虚無とかで彼を形容して、これらの觀念を死の觀念に並置し、そこへ彼の現実の死を結びつけるやうな、架空安易な論理の横行に反撥したいのである。

伊藤信吉「武郎・龍之介・太宰治―作家と死―」(「暖流」第三号、昭和二十三年九月一日発行)には、つぎのように記されている。

時代の渦巻をとお背景にして、貴族の没落してゆく生活とそのしめやかな心理をえがいた「斜陽」は、戦後文壇におけるもつともすぐれた収獲であつたといわれる。いまここに貴族の没落といつたが、この作品で太宰治が語ろうとしたものはたして何であつたか。／貴族の没落という一篇の主題は、歴史の変転につらなる事実であり、それゆえに時代の現実をうつした作品ということもできるか知れないけれど、この作品のあたえる感銘は、時代の変転というやうな激動的な、また社会的なところにあるのではない。作品のひらけてゆく順序はまさしく生活力をうしなつた貴族のすがたにちがいないが、作者はそれによつて、変転する時代の移りゆきを暗示したのではなく、そうした没落をことさらにとんでいるのではない。主題はそのような生活の

實際を展開する点にあるのではなく、この作品における作者は、ひとえに「純粹」なものの運命をみつめている。「純粹」なものの運命が「頹廢」の美に化してほろびるありさまをみつめているのである。／太宰治の作品系列にとつて、「斜陽」はどういう位置を占めるものなのか。昭和十八年はじめに出版された「富獄百景」をひらくと、そこには「駆込み訴へ」「走れメロス」などがあり、別には「満願」「ロマネスク」などがある。これらの作品で作者が人間性の純粹さを追究していることはたやすく知られるが、しかしこれを「斜陽」に比較してみると、ひとしく「純粹」なものを追究しながらもその基底にはいちぢるしい違いがある。／(中略)／このような作品系列にくらべるならば、晩年の「斜陽」はずつと質がちがつている。ここでは既にいつさいの生命力が消耗され、その消耗において「純粹」なものがあやうく支えられている。そしてほろびゆくもののかもしだす美がいかにはなく切実であるか、頹廢の情緒がどのような美を織りなすか、そのことの證しのために、のこされた生命の灯をかがけているかのようにある。おそらく「美の形」というべきものを、この作家がもつともあざやかに結晶してしめたのは「斜陽」においてであつて、単に作家としての「美意識」ではなく、それを「美の形」ととのえてしめたのは「斜陽」一篇だけである。それはほろびゆく階級の頹廢の情緒と、作者の美の意識とがひとつに化した際の美である。作者その人のなかに、ほろびゆく心情の美がかもされている。／新古今集の多くの作品は、そのどこかしらに、かならず崩折れるやうな頹廢の情緒をただよわしている。それは平安貴族のほろびてゆく心情を反映したもの

であつて、この歌集における詩人たちの美意識はどの作品にもつよくはたらし、「美の形」をきわめて鮮明にしたのであつた。生活の基盤をうしない、同時に生命力の消耗におちいつた人々の、血にしみるような挽歌がここに聴かれる。「斜陽」は太宰治という作家の、生命力の消耗によつてえがかれた最後の美の表現であつた。肉体的にも作家的生涯にとつても、たそがれに似た色がぜんたいをつつんでいる。／（中略）／作家における異常な死が、それぞれの切実感に充ちていることは言うまでもない。仮りに「斜陽」を晩年のつきつめた思想的表白としてみるならば、太宰治の死は極度に逼迫した心情とそういうものとしての切実感に充ちている。このことは「歯車」における芥川龍之介についても言えるのであつて、なんらかの切実感を生きぬいたという点では、どの作家の死も実感をもつて受けとることができる。だが小林多喜二の死の異常さは、むしろそうした作家的な切実感を断ちきり、それを断ちきつたところに歴史的な位置をとらえた。もしこの作家における切実感を語るとすれば、それはむしろ歴史の流れのなかに脈うつている。作家のいとなみが、すべて自身の切実感によつて光彩を放つものであることはいうまでもないが、その切実感をどこに刻みつけるかによつて、死の意味はまったく違う。「斜陽」その他の作品にこもる作家の切実感を、もとより私は疑うものではない。「歯車」その他の作品に充ちている苦渋は、私の胸にもつよい共感を呼びさます。しかしひるがえつてみるならば、死の素因を内包しているときまで言われる作品が、切実感に充ちているのは当然なので、そうした共感をあたえることなしには、もともと作家としての位置はあたえられぬ

筈である。切実感とそれへの共感の呼びさましは、真摯な作家にあつては当然であり、それが近代の作家であることのひとつの前提ではないのか。近代の作家として、異常な死に追いつめられることがなくても、身を灼くにひとしい切実感を経験した作家は稀ではないのである。／（中略）／太宰治の死をめぐる私がこで言いたいのは、作家における人間的省察の問題である。初期の「晩年」から「斜陽」「人間失格」にいたるまで、この作家はかわることなく人間性の追究をこころみ、そこに人間と人生との意味を見いだそうとしたのであるが、しかしその人間性肯定のときにおいてさえ、この作家は自分のかぎられた世界から眼を転じることはできなかった。極端にいえば、この作家はシニスムによそおわれた善意の人である。しかもその善意の意思は、ほろびゆく音楽の哀切な情緒しか綴ることはできなかった。いかに人間性の純粋さとそのような美を追求しても、壁に遮断された主観の世界にあつては、とうてい問題の解決はもとめられぬのである。／（中略）／ひとつの観念のうちに限定され、固着された人間性はどれほどの切実感をこめているにせよ、ついに観念以上の実践力をそでてるものではない。「斜陽」にほろびてゆく階級をえがいたことのうちには、戦後の社会的変革と社会的動揺の影響があり、そうした歴史の現実がとおい背景に置かれたのであるが、このような現実えのおのずからなる触手に際しても、なお作家の態度は「純粋」なるものに向けられ、美の肖をまとめようとするところに止どまつたのである。その現実えの触手を、ひとつの生活実践として切りひらくことは不可能であつた。個人的な意味での「人間性」はいつも一定の限界性を持

ち、それが現実の社会機構のなかにおいてのみあたらしい生命力と化すること、この才能ある作家は理解することができなかったのである。

木室浩「白井吉見氏の太宰治論を駁す」(「時代」第三卷第九号「特輯太宰治論批判」昭和二十三年九月一日発行)には、つぎのように記されている。

志賀と対比しての芥川の文学的位置や、その他太宰の固有の問題についてふれるつもりであつたが、これだけ書いても、太宰治の爪のあかにもふれてゐないといふのも、太宰の大きい證據で、すでに紙数も超過してゐるので、ただ一言、戦後の作品が、芸術的にみてもいかにすぐれてゐるか、たとへば「渡り鳥」のあたらしさ、「父」の意味、「斜陽」のすばらしさ、長篇作家としての力倆等々々にふれて、大いに駁論に輪をかけるつもりであつたが、またの機会にして、最後に一言、白井氏にたいして妄言多謝、読者諸士にたいしては、おそまつさま、太宰治は、たいした作家であることを強調するにとどめ、機をあらためて、おほいに蘊蓄をかたむけるつもりである。

原二郎「不良少年とキリスト」お読んで坂口安吾に駁す(「時代」第三卷第九号「特輯太宰治論批判」昭和二十三年九月一日発行)には、つぎのように記されている。

太宰の文学の上に現われた、失望、落たんしなくてもすむユートピア。つまり太宰がいきおしていられる社会わ、悪人がはびこり、善人が餓死する、うつせみでわないのです。酒も、恋も、ただ失望、落たんの麻すい葉にすぎないのである。M・C・であろうがなからうが、

ミイラトリがミイラになる手わなからう。つまり、あなたのいう、酒おのむと別人になる、その別人が太宰の本物だつたのです。／太宰わ文学に命おかけていましたよ。命おかけて文学の中でわ嘘おつきませんでしたよ。／「斜陽」の語り手になつてゐる女の人わ、作家上原二郎(小生の名前に似てゐるのでいやだが)に種お下さいとせがんで種お貰うくだりがある。／これが総てお解決してわいませんか。／太宰の文学でわ、惚れたら種お貰えбайゝのである。惚れたら種おやればいゝのである。／惚れたために、失望、落たんのうつせみに生き長らへる等とわとんでもないことだ。生き長らへなければならぬ恋ならしないであらう。／「斜陽」お推せうされる安吾先生。こんなことわ先刻御存知の筈なのに、太宰が死んだと知らされて、逆上、混めい、ついに正当なる批判おあやまつた。としか、どうしてもうけ取れない。／生前、作者と親しかつた人わ、ともすれば作者と作品お切り離して別々に考えがちだが、これわ間違いでせう。作者のプライベイトのことなど、ゴシップ以外の何ものでもありません。しかも、そのゴシップも高々文筆業者の間で通用する位のものです。嘘と思われたらカツギ屋や、パンパンにきいてみなさい。／「太宰つて、玉川上水で情死した男か」／位なもので、「斜陽」も、「グッド・バイ」もあつたものでわない。カツギ屋や、パンパンが太宰のファンになるようなうつせみであれば、太宰も、今少しわ生きていたかも知れません。／日本という国おなめてわいけません。どえらい人種の棲んでゐる島ですよ。／——斜陽にわ、変な敬語が多すぎる。お弁当お座敷にひろげて御持参のウィスキーお飲みになり、といったグアイに、そうかと思う

と、和田叔父が汽車にのると上キゲンに謡おうなる、というように、いかにも貴族の月並な紋切型で、作者というもののわ、こんなところに文学のまことの問題わないのだから平気な筈なのに、実に、フツカヨイ的に最も赤面する——。(略)——志賀直哉という人物が、これお採りあげて、やつつける。／と、書いておき乍らそのすぐつぎに、／——志賀直哉なる人物が、いかに文学者でないか、単なる文章家にすぎん、ということが、これによつて明かなのであるが——／と、太宰お肯定し、志賀お否定しておき乍ら、又すぐ／——フツカヨイ的にわ最も急所おついたので、太宰お赤面混乱させ、逆上させたに相違ない——。／に至つてわ、ひいきのひき倒しであろう。／織田作お始め、太宰、石川、坂口、という先生の文学わ、志賀文学おてんから問題にしていなひ筈だ。／大正のかびの生えた文学としてわ(坂口流にいえば文章家として)織田も、太宰も、志賀文学お一応權威として認めていであらうが、現在でわ古典以外の何物でもないであらう。／その人物にかれこれいわれて、むきになつて老人に喰つてかゝる太宰も太宰なら、それお肯定しながら引用するなどとわ、恥の上塗りである。／オシヤカさんが何おほざこうが、闇米おくらつて、カストリおのんで、夜な夜な人間性お忘却して、いきぬきおし、あえぎ、喘ぎ生かして貰つているテアイにわ、関係のないことでわないか。／それこそ、そつとしておくのが、老いたる人えのうき世の義理であらうぞ。／貴族的敬語なるものお太宰が使つてみたところで、一田舎地方の地主のせがれに使えるものでわない。使えば、斜陽のようにどろくさいものになつて、本物の貴族から見たら噴飯物になるのだが、その位の

ことお知らない太宰でもなからう。たゞ文学として使つただけである。太宰自身が、あなたの口お借りれば貴族にあこがれていたとすればそれ程に、こと程さように太宰わ貴族でもなければ、良家の子弟でもなかつたのだ。／斜陽の中で、変な敬語、変なですよ。変な敬語おわざと使つたのわ、あこがれでわなく、文学の表現意欲からである。／読み始めにわ、妙に変な敬語が気になつて、小生も投げ捨てたものだが、友人からすゝめられて読み通して行くと、それにわ一種の表現的価値さえ加わつて、あの作取お一層高く、深いものになっているのお、よもあなたわ見逃しわしますまい。／その判らない人にかれこれいわれたからといつて、取り上げて、ほえたてる手もないし、又それおあなたがこと新しく書き立てることもあるまい。／恥の上ぬりです。／(中略)／太宰が「不良少年」でなくて、立派な「良少年」であることわ、その作品お見ればすぐ判ります。／嘘のつけない、人おだませない、おだてられない、従順な主人公が、涙なくしてわ読めない程テッカクに描写され尽されているでわないですか。／「斜陽」の自殺する青年にしてからがそうです。／あなたが逆説的に芥川や、太宰お「不良少年」と呼ばれることもよく判ります。けれども思想のカト期であるだけに立派な文学者お、一般に「不良少年」という目で見させるようなことわきらいです。心ある者わさけなければなりません。／これが一般向きの雑誌でなく、小説好きや、小説家志望の者のみ読む、片よつた雑誌だからいゝようなものの、一般の赤表紙だつたらエイキョウわ大きいですぞ。日本に於けるあなたの存在わそれ程大きくなつているのだ。／総ての小説家わ、他のいかなる職業に従事し

ている者よりも人間のことお憂い、社会のことお気にして生きている立派な人間である。あなたもその一人でわないですか！／一般の読者から誤解されるような、専門家特有の表現わ、敵につつまなければいけない。日本の小説のまともな発展おそ害こそすれ、決つて育てる役にわ立たないであらう。

浅見淵「太宰治論」(「若草」第三卷第九号、昭和二十三年九月一日発行)には、つぎのように記されている。

茲で、筆者は飛躍する。太宰治の作品に、なんとなく目立つて一種の挽歌めいた哀調が流れて来たのは、去年、つまり昭和廿二年の「新潮」七月号から連載しだした「斜陽」の辺りからではなかつたらうか。矢張り同じ頃に執筆したと思はれる「トカトントン」といふ作品が今年の「群像」一月号に載つてゐる。僕はこれを読んだ時太宰治が死への誘ひを受けてゐるやうな予感がされ、なんとなく惘然としたのを覚えてゐる。一言で尽せば、太宰文学は一種の遺書文学ではなかつたかと思ふ。かれの人生に倦怠なり空虚さを覚えると、直ぐ死を考へてゐるからである。この遺書文学の特色が、「斜陽」の辺りから急に濃厚になつてゐるやうな気がする。遺作となつた「人間失格」(「展望」六、七月号)に至つては、芥川龍之介の「或阿呆の一生」に匹敵する完全な遺書文学である。つまり、太宰治の今度の心中を決行せずにはゐられなかつた心理経緯なり、死を覚悟しての一種の捨身の弁解が、逆説的な表現の中に流露してゐる。／まづ、この「斜陽」から、太宰治の文章をすこし抜いてみる。／——思想？ ウソだ。主義？ ウソだ。理想？ ウソだ。秩序？ ウソだ。誠実？ 真理？ 純粋？ みなウソ

だ。牛島の藤は、樹齡千年、熊野の藤は数百年と称へられ、その花穂の如きも、前者で最長九尺、後者で五尺余と聞いて、ただその花穂にのみ、心がをどる。／アレモ人ノ子、生キテキル。／論理は、所詮、論理への愛である。生きてゐる人間への愛では無い。／金と女。論理は、はにかみ、そそくさと歩み去る。／歴史、哲学、教育、宗教、法律、政治、経済、社会、そんな学問なんかより、ひとりの処女の微笑が尊いといふフ、アウスト博士の勇敢なる実證。／学問とは、虚栄の別名である。人間が人間でなくならうとする努力である。／——デカダン？ しかし、かうでもしなけりや、生きてをれないんだよ。そんな事を言つて、僕を非難する人よりは、死ねと言つてくれる人のほうがありがたい。さつぱりする。けれども人は、めつたに、死ね！ とは言はないものだ。ケチくさく、用心深い偽善者どもよ。／正義？ 所謂階級闘争の本質は、そんなところにありはせぬ。人道？ 冗談ぢやない。僕は知つてゐるよ。自分たちの幸福のために、相手を倒す事だ、殺す事だ。死ね！ といふ宣告でなかつたら、何だ。ごまかしぢやいけねえ。／「斜陽」は、無功利の美しきといつたものを、敗戦後の敵しい現実と照応させて、没落貴族の最後の残映といったものの中に浮び上らせ、心情的な敗残の勝利といつたものを描き出したものである。この主題は太宰文学において終始一貫して取上げられて来てゐるもので、主題としてはさう珍らしいものではない。しかしながら、白鳥の歌といふか、最初に触れたやうに、挽歌的な哀調が作品全体に流れてゐると共に、中程の場面にギロチンの歌を口吟みながら登場する上原といふ酔つぱらひ作家が、作者自身の晩年の姿を彷彿させてゐる

ところに一種の切実感を生んでゐる。のみならず、この上原といふ作家に、没落貴族の二人の姉弟のうち、弟は師事し、姉は上原の子を胎むに至るが、明らかに上原の分身として描かれてゐる、この弟の直治といふ青年は原因不明の自殺を遂げるに至る。ところで、この直治の遺書、並びに学生時代の手記が今にして思へば、同時に、太宰治の遺書にもなつてゐるのだ。次の言葉は、この遺書の最後のはうに書かれてゐるものである。／――姉さん。／僕には、希望の地盤が無いんです。さようなら。／結局、僕の死は、自然死です。人は、思想だけでは、死ぬるものではないんですから。もういちど、さようなら。／姉さん。／僕は、貴族です。／（中略）／太宰治に三人の子供と貞淑な夫人があつたこと。しかも、その夫人に対しては、「斜陽」の直治をして「正しい愛情のひと」と呼ばしめてゐるやうに、太宰治は決して愛情を失つてはゐなかつたこと。それにも拘らず、二人の情人があつたこと。当の心中の相手は、あの世に行つても太宰治を離さぬとばかりに、しごきで二人の牀を堅く縛りつけたらしいこと。のみならず、もう一人の情人はしきりに太宰治に結婚を迫つてゐたこと。のみならず、小田原在には、太宰治の子を生んでゐる「斜陽」のモデルになつた女性がゐたこと。感興が失せてゐるのに註文原稿が殺到してゐたこと。再び麻薬パピナルのとりこになり、その勢ひで原稿を書き飛ばしてゐたらしいこと。深酒。太宰治の心中行の前後には毎日陰気な雨が降りつづき、これとあひ俟つて、「池水は濁りににぎり藤波の影もうつらず雨降りしきる」（伊藤左千夫の歌、太宰治が書き残してゐた色紙の文句）さういつた憂鬱さを、かれが気持の上でも味はつて

ゐたらしいこと。太宰治の自殺の原因として伝えられてゐる外部的な諸因を挙げると、大体以上のやうなものである。／このうち、直接原因として深い関係があるのは、パピナルであらう。入水前に嚙んだのもこのパピナルらしい。この麻薬の陶酔を借りて骨がらみになつてゐる自意識を無理遣り抑へ、冒頭に引用した「いま飛びこめば、もうなにかも問題でない」かういふ気持になつて、永遠の忘却に向つて飛込んだのだと思ふ。又、「女はただ、みちづれさ」さういつてゐるやうに、今度の太宰治の心中行に取つても、その相手はAでもBでもよかつたのではないか。「何か女に夢を見させる雰囲気、自分のどこかにつきまとつてゐる」（「人間失格」）と、太宰治は告白してゐるが、かれに取つてAもBもCもつまりは受け身の恋愛関係だつたと思ふ。偶々以上の複雑な情人関係が原因して、当の心中の相手が太宰治を独占したいといふ女性らしい浅はかな虚栄心から、かれが死の誘ひを受けてゐたのを利用して心中を迫り、これがかれの自殺行のスプリング・ボードの役目を果たしたのではなかつたらうか。しかし、「斜陽」や「トカントン」辺りから俄かに哀調を帯びて来てゐることを先に指摘したが、かれが自殺を決意したのは決して、その場の思ひつきではなく確かに前以て計画してゐたものである。それは朝日新聞に連載する筈になつてゐて、結局十回分しかでき上つてゐなかつたといふ「グッド・バイ」といふ作品が、作中主人公が懇意な十七人の女性に次々と別れを告げて行くテーマであつたことを、太宰治自身が知人に洩らしてゐたといふ事実を顧みても頷けるのだ。／（中略）／ところで、太宰治のこのダンディズムへの憧れは、かれが東北の封建的な

豪家に育つたことが、影響してゐる。「斜陽」の中で、牛島や熊野の古い樹齡の藤を持ち出し、「ただその花穂にのみ、心がをどる」といつてゐるのを見ても、これは明らかである。同時に、前述の現実的生活力に対するかれの無力感や羞恥感並びに現実嫌悪感といったものも、これにいつそう拍車を加へてゐる。だが、茲に注目すべきは、さういふ高貴なダンディズムの精神を、太宰治はひとりで抱へ込もうとはせず、一般市民の間にも持込もうと努めてゐたことだ。即ち、それを支柱としたヒュウマニステイックな社会を、かれは夢想さへしてゐたのである。かれが屢々「市民への奉仕の美」といふことを口にしてゐたのも、一半はじつに茲に由来してゐる。この意味において、かれは決して単なる貴族主義者ではない。いまいつたやうに、一応既成のその精神を土足で踏みにじり、しかもなほ踏みにじり切れぬ不朽性、乃至は核心的なものを、改めて掘み出さうと試みたのである。かれの道化振りデカダン振りも、一面、茲に胚胎してゐる。いまさつき、かれはヒュウマニストでもあるといつたが、これを見てもさういへると思ふ。このヒュウマニストが、どうして作品に行詰まり、挙句の果てに自殺を余儀なくされたか。それは、今まで述べて来たところでわかると思ふ。太宰治のアイディアが振出し以上にいつまで経つても進展せず、結局、足踏みに終つたからだ。「斜陽」の直治が、「僕には希望の地盤が無いんです」といつてゐる。太宰治の自殺も、要約すればこの言葉に尽きる。従つて、直治のいふ意味において、太宰治の死も亦「自然死」である。

神西清「ロマネスクへの脱出―太宰治の場合」(「個性」第一卷第十

号、昭和二十三年十月一日発行)には、つぎのように記されている。

終戦後の彼がいちじるしくプーシキンに心を惹かれてゐたといふことを、ぼくは彼の側近の人から聞いたことがある。彼自身の作品にあらはれた所を見ても、この脱出の企図はあの『魚服記』などを始めとして、間歇的に一再ならずくり返され、つひに戦後の『ヴィヨンの妻』および『斜陽』において、一種凄愴な身もだえとなつて極まつてゐる。だからと言つてぼくは何も、この最後の二作をもつて太宰文学の代表作などと言ふつもりはない。代表作は依然として『虚構の彷徨』であり『新ハムレット』であり、更には亀井勝一郎氏のいはゆる「処女作へ向つての成熟」の極点を示すところの『人間失格』であることは疑ひはない。だが、ぼくは『斜陽』が現はれたとき、うつそ身の悲しさ、そこに脱出への一縷の光明を錯覚したのだつた。ぼくはこの機会をとらへて、彼をロマネスクの世界へ Seduce したいといふ止みがたい誘惑を感じた。それがつまりあの「斜陽の問題」という未熟きはまる駄文をなしたのであつたが、もちろん相手がファウストではなしにファントムなのであつてみれば、この自称メフィストフェレスの誘惑が、喜劇にもならぬみじめな失敗に終つたことは理の当然であつた。手おくれも手おくれ、まさに半世紀ほどの手おくれだつたわけである。彼は啞然たるメフィストを尻眼に、まんまと玉川上水へ「脱出」してしまつたのだ。

横田俊一「ゲヘナの罪人―太宰文学論」(「大和文学」第三輯「特集宗教と文学」昭和二十三年十月二十五日発行)には、つぎのように記されている。

戦闘開始。太宰が俗権に反抗するときに、イエスのことばから口火が切られることが多い。例へば「如是我聞」(二)を見るがいい。禍害なるかな、偽善なる学者、なんぢらは人の前に天国を閉して、自ら入らず、入らんとする人の入るを許さぬなり。盲目なる手引よ。……禍害なるかな、偽善なる学者。……蛇よ、蝮の裔よ、なんぢら争でゲヘナの刑罰を避け得んや。——マタイ伝第二十三章／「斜陽」の姉かず子の古きモラルとの戦闘もまた、イエスが十二使徒を諸方に派遣するに当つて教へ聞かせたことばから開始される。／——視よ、我なんぢらを遣すは、羊を豺狼のなかに入るが如し。この故に蛇のごとく慧く鳩のごとく素直なれ。……／——身を殺して靈魂をころし得ぬ者どもを懼るな、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ。——マタイ伝十章／イエスは十二使徒に対して、「身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者」をおそれよ、近づくなと教へてゐるのである。悪人中の悪人であるから、救ひがたき徒・危険な人間だからである。が、ある意味では、十二使徒、そして、イエスを凌がんなばかりの大背徳漢であるかも知れない。イエスさへも手を焼くやつである。そいつに成れたら大したものである。あの、ニイチエのいふ「超人」とやらに似てるぢやないか。といふやうな、微妙なロジックがこの一行にまつはりつく。「斜陽」のかず子が、こひと革命の成就に立出する場に当つて、かの女の情熱が、この一行に燃えてゐるとしたら、そして、この激しさが、われとわが身をゲヘナにて亡ぼさうとしてゐる太宰の決意を示してゐるとしたら、私たちはここにも亦、太宰の、あの破滅への激情を権威化する一行を見いだすわけである。信者としての

読解法ではなく、無頼漢のそれである。(が、無頼漢こそ、信者よりも、いい人間なのだ。)

無署名「雑録」(『東北文学』第三卷第十二号、昭和二十三年十二月一日発行)には、つぎのように記されている。

読書調査が方々で行はれている。／「この一年間に読んだ書籍のうちで、どの本が良いと思つたか」と読者にベストブックをたずねた結果が、毎日新聞社で行つた分では左のように出ている。／1 太宰治「斜陽」／2 尾崎秀実「愛情は降る星の如く」／3 レマクル「凱旋門」／4 吉川英治「太閤記」／5 ドストエフスキー「罪と罰」／6 モーパッサン「女の一生」／7 吉川英治「親鸞」／8 ゲーテ「若きヴェルテルの悩み」／9 漱石全集／10 トルストイ「復活」(以上十一点迄)／となつており、読売新聞で行つた分は「一般」「専門」「児童」と分類してあるが一般の部を見ると／1 永井隆「この子を残して」／2 太宰治「斜陽」／3 尾崎秀実「愛情は降る星の如く」／4 永井隆「ロザリオの鎖」／5 レマクル「凱旋門」／6 宮本百合子「播州平野」／7 天野貞祐「生きてゆく道」／8 東大戦歿学生の手記「遙かなる山河に」／9 我妻栄「家の制度」／10 谷口雅春「幸福の生活」(以上十一点迄)といふことになつてゐる。／毎日の場合の書店が売れた本を報告してゐるのに、／1 太宰治「斜陽」／2 吉川英治「親鸞」／3 尾崎秀実「愛情は降る星の如く」／4 太宰治「人間失格」／5 吉川英治「太閤記」／6 ヴァン・デ・ヴェルデ「完全なる結婚」／7 レマクル「凱旋門」／8 天野貞祐「生きてゆく道」／9 三木清「哲学ノート」／10 東大戦歿学生の手記「遙かなる山河に」(以上がベストセラーズ)／とあり

大体ベストブックスと似ている。

島本恵也「虚構論―斜陽について―」（『国文学解釈と鑑賞』第十三巻第十二号、昭和二十三年十二月一日発行）には、つぎのように記されている。

現実の世界は錯綜してゐて不確定な状態にあるし、人によつてその見方が異なるといふ有様ですから、作家がそれに対して自己による整理を加へるのは当前のことで、芸術的構想がこれです。この意味での虚構ならば、古今東西の芸術一として虚構ならざるなしです。しかし今日特に虚構が問題にされるうらには、対象となるべき現実そのものが虚構なのだといふことが潜んでゐるやうです。今太宰治氏の名作といはれる「斜陽」について考へてみませう。この小説は、貴族的なものが所謂階級としては亡んでも、それは精神の貴族として不死鳥のやうに火中からよみがへるといふテーマを扱つてゐます。母親といふ女性には日本における最後の貴婦人として、ながくその身をつゝんでゐた空気がら出されるとはかなく死んでしまひます。典雅な無邪気さをもつた女性で、その描写はどこか漠然としたところがあります。二人の子供のうち弟の方は、貴族的な鋭さと弱さをもつてゐて、それによつて社会を批判することが出来ます。それだけに環境にたへられずに自殺します。姉娘はこのテーマを物語つてゐますが、彼女のうちには、ある理想的なものと、新しい時代の生んだ恐るべき実行力があつて、その身を人生の底面にまで下してゆき、そこで精神の貴族であるところの絶望した作家のたねを宿し、その私生児を生み育てることに、つまり生れ変つた新たな貴族を育て上げることに自己の道徳革命の完成を

夢見る女性です。そして一人の作家、絶望して、深い愛情を心中深く感じながらもそれに表現を与へようとはせず、取巻きの馬鹿騒ぎの中に自己をさらしものにながら、そして自己を深く愛してゐる女性に、肉体的仮面を以てふなければ接近出来ない、逆説的な作家が登場します。／全篇を通じて作者は生れかるといふこと、精神の革命といふこと、又そのためには一切の現状を破壊しなくてはいけないこと、を強調してゐます。この一族が住みなれた西片町の古い邸を出て、新しく買ひ求めた伊豆長岡の家にうつると、母親は心に衝撃をうけて寝こんでしまひます。しかしすぐに全快します。それは新に生れかへつたのだと書かれてゐます。その娘も、自分ではなくてもその子供を生れかはらせたいと念願してゐます。種族保存の本能が理念化されてゐて、彼女は恋人である作家に、貴方の子供がほしいと云つて迫ります。作品の中に漂ふ一見世紀末的とも見える病んだ空気は、実は革命の過程なので、その頹廢の底に夢があります。人は死んで生れかはらねばならない、明日の革命は現在の絶望のうちに生れるのだといふ思想なのです。／しかし問題はこれからです。精神革命、文中の言葉を借りるならば道徳革命とうふものは、一体何を否定し、何を成就しようとするのでせう。人間は誰れでも同じだと云ふ思想が現代を毒してゐるとか、社会主義的思想は人間が金銭にとらはれてゐて、ケチである間だけ通用するので、金のことにとらはれない人間にとつては何でもない、全く無関心のことだと云ふやうなことが書いてあります。そこで作者は「高貴」な人格、精神の貴族に至高の価値を認め、それを夢として抱いてゐます。その夢は「こひしいひとの子を生み、

育てる事」によつて実現されます。恋愛は高貴なことなのです。しかしその恋愛は、絶望すべき現世においては惨めな実現を見ます。夜が明けて、部屋が薄明るくなつて、その時彼女は「かなしい、かなしい恋の成就」を感じるのであります。けれども彼女の胸に「革命の虹」をかけ、「生きる目標」を与へたのはその男なのです。彼女は「生れる子供にもあなたを誇りにさせよう」と思つてゐます。この作品の外見と評判にも拘らず、こゝには何か真実の、しかも健全なものがあります。そしてデカダンな生活に日を送る男は実は一つの必死の闘争を行つてゐるのです。／芸術的構想といふ意味での虚構は、この作品ではかくの如きものです。それは読者にとつても虚構であり、夢です。誰でも現実を夢にかへたいと思ひます。自己について語るとき、誰でも必ず現実を少し離れた夢を語ります。それは突拍子もない夢ではいけないので、現実のすぐ傍に今にも手が届きさうになつてゐなくてはいけないのです。この作品は、それを喜び迎へる人々にとつてはこのやうな夢です。そして自分を登場人物になぞらへて見ます。恐らく本物の貴族にもそのやうな人がゐることでしょう。「日本の最後の貴婦人」の中にも。ところがこのやうな夢の中には現代の日本の特別な色合が潜んでゐるので、それをお話したいと思ひます。こゝまでは序の口でこれから本論に入らうと思ひます。／私が編輯者の方から与へられたのは虚構論です。はじめに述べたやうに、芸術であるからにはそれが虚構なのが当前です。ことごとしく論じる必要はありません。ところが虚構といふ文字を見詰めてゐると、そこに作家の自嘲のやうなものが浮んで来ます。むなしくかまへる。一体芸術は真実です。虚構があつて

も、虚構する精神は真実なものです。むなしくかまへるものではありません。作者がこの作品を書き上げたのは真実な気持によるのです。それから次のやうなことも考へられます。虚構を唱へた作家は、でたらめをどこまで展開させられるかといふやうなことを述べてゐます。ところが虚構を唱へた作家の作品が最も現実的なものとして評判をうけました。この逆説的事実は何によるのでせう。そこにはこの作家達の対象とした現実の世界自体がすでに虚構なので、如何に真実の精神で表現してみても、その作品はやつぱり虚構なのだといふ作家の絶望的気分がありはしないのでせうか。虚構といふ文字からはこのやうな感じをうけます。／考へてもごらん下さい。二十世紀も四十年代といふ今日、何処の国にか貴族の没落といふテーマをとりあげたり、それが社会の大きな関心になつたりする国があるでせうか。この古くさいセンチメンタルな空氣が、世界の歴史のあゆみの中におけるわが社会の虚構を示してゐます。それを真実に表現したこの作品は実に中世紀風のおとぎ噺にすぎません。更にこの作品の中の貴族なるものを考へてみませう。それは一体貴族でせうか。大分小市民的に空想された貴族とすりかへられてゐるやうです。もしこのやうな貴族があるとしたら、日本の貴族自身が虚構的存在なのです。このやうな無邪氣な、高雅な貴婦人、その空氣のやうな愛らしさ、又人間は平等でないとか考へ、精神的貴族の存在に信念を持ち、自由恋愛といふことに革命を感じる娘。一体日本人が恋愛に解放を感じ、そのやうな社会的気分がうごいて来たことは過去に何度もありました。その先頭に立つた婦人は常に勇悍に明るく進みました。しかも一体日本人は何度同じことをく

りかへすのでせう。少しも進歩がないではありませんか。しかもそのことがこの作品では革命だとされてゐます。このやうなことが公衆に感動を与える日本の社会は実に虚構です。古めかしいセンチメンタリズム、さう思つて読むとこの作品は実に滑稽です。太宰治氏が入水してしまつたのも、もつともなことゝ考へられます。彼は鋭い眼と正直な心をもつてゐたやうですから、このやうな虚構の現実の中にゐて、それを真面目に表現する道化役にはたへられなかつたのでせう。この一族が伊豆へ移り、母親が病氣になると、村の老人の医者が袴をつけ白足袋をはいて、うやうやしく拝診にまかり出ます。娘はその様子に笑ひたいのをじつとこらへます。だがこの医者 of やうな気持が存在しないと実はこの作品自体も存在しないのではないでせうか。／＼に出てくる貴族自身が虚構だと申しました。日本の貴族は皆虚構です。今日の彼等の基礎となつた江戸時代の貴族をごらん下さい。封建時代といはれますが、実は封建時代ではないのです。大名は幕府の一言の命令によつて簡単に転封させられたり、取潰されたりします。何十万石といふ大諸侯でも將軍の前へ出るとことは苦痛だつたと、彼等自身が語つてゐます。これでは貴族の自主性はありません。自分の領地ではなく、幕府から与へられた知行所のやうなものです。公家貴族とはいへば、これは見るかげもありません。日本において、本当に貴族らしい貴族の作られるべき時代に既に貴族はなかつたのです。そこで現代日本人の頭に貴族といへば、ルイ王朝のフランス貴族や、農奴を駆使したロシア貴族や、豪毅なイギリス貴族の姿がうかびます。彼等は日本の貴族のやうな稀薄な存在ではありません。自己の權威をもち、

意志をもち、実行力をもつてゐます。そこから真に悲壯な高貴さが生れるのです。瘦せさらばへた「名馬」にまたがり、悠々と槍をしごくドンキホーテや、庶民の上に底知れぬ偉大な惡徳をふるふ、ドストイエフスキイの作中の貴族や、フランス大革命の暴民の襲撃の中を壁中の密室に潜伏し通したフランス貴族だの、大英帝国の柱石であつた威厳あるイギリス貴族だのに眞の權威を以て意志を以て行動する貴族らしい貴族を見ます。ロンドンで名を成したある著名な日本の詩人が、自分の詩をロンドンの評判たらしむべく、一本をたづさへてある侯爵夫人を訪問しました。彼女はその豐滿な身体を長椅子の上に横たへながら詩人を引見しましたが、彼の抱負を聞くや否やその美事な身体をゆすつて笑つたさうです。そして大ロンドンは一人の詩人の力などではどうなるものでもないと言ひ放つたさうです。詩人はその折の印象を永く忘れ得ぬものとして記しとどめてゐます。このやうな貴族にくらべると日本の貴族は何といぢらしいことでせう。そして日本の社会の中堅をなす小市民的感情のいさぐさ夢とあまりへだたらない生活感情をもつてゐます。本當の貴族ではありません。虚構された貴族です。／＼世界の歴史のうごきからは程遠い、古めかしい夢の中で、十九世紀的な恋愛解放を夢み、おとぎ噺の貴族が亡んでゆきます。その作品が問題にされ、それにはリ、シズムがあると云はれました。まことにリ、シズムはあるかも知れません。その作品を成立せしめた社会、その作品をうけ容れた社会、みんな虚構です。二十世紀の四十年代の空氣の中で、みんな本物ではありません。もしその中で、それを表現した作家だけが本氣だつたら、こんな慘めなことはありません。作家と社会

が、はなればなれになつてゐるとお感じにはなりませんか。終戦後の文学の主流にはかゝる不協和音が流れてゐます。／＼この作品がロマンティックなものであることは先程の解説でお分りのことゝ思ひますが、日本の文学には、古典と近代、現代の文学を通じてロマンティックな性格が実に少いのです。ですからロマンティックなものが現れれば、それはとても目立ちます。ところがそのロマンティックなものは、どうも少し浮上つたやうな感じを与へます。藤村詩集の序文にせよ、晶子の初期の短歌にせよ、潤一郎の思ひきつた小説にせよ、それが日本人の生活の中にあつたとは思はれません。そして、私小説の系統が実に根強い力をもつてゐます。織田作之助氏はその意味で志賀直哉氏をやつつけました。そして虚構を主張しました。しかしこの種の議論は今にはじまつたことではありません。まだ日本が中国と戦つてゐたころ、偶然論といふのが文壇の大問題となり、一部の哲学者や理論物理学者までまきこまれてしまひました。その頃やつと中学生だった筆者さへ覚えてゐます。当時は、日常の出来事をたゞ書き記してゆくだけの私小説と云ふものが大きな勢力を占め、そして行きづまりに來てゐました。彼等は出来るかぎり現実の通りであらうとして、つまり虚構を排するのあまり、こんなことになつてしまつたのです。そこで人生と云ふものは、思ひの外に偶然の思ひもかけぬ出来事に富んでゐるのだ、そんなに無味乾燥なものではないのだと云ふことが云はれました。当時の私小説がどんなに極端だつたかと云ふことは、ある外国の批評家が呆れて、日本人は、自分はどうしても小説を書くことが出来なくなつたと云ふことを小説に書いたと云ふほどになつてゐまし

た。それでは当時そんなに書くことがなかつたでせうか。実は大有りです。戦ひと、国内の統制と、思想の戦ひと、そして文化人の地位は急速に下降してゆきました。作家はどうしてそれが書けなかつたでせう。そして今日同じやうな問題が再燃して、偶然論は虚構論と名を変へて現れました。もつとも今日では面白い出来事は目のまはるほどあります。試みに新聞小説をごらん下さい。作家は、どうして面白い出来事の中から、更に興味ありげなものを引き出さうかと焦りぬいてゐます。ところが社会面や政治面にはその作家の頭を超えるやうな興味ある事件が毎日のやうに現れます。それなのに何故虚構論でせう。一体何が足りないものでせう。私は作家の対象とした現実世界が虚構なのだと申しました。しかし作家の眼はひろく現実の全体に及ばず、それ故に何か大切なものを取逃してしまつたやうです。彼の周囲の世界はいかにも虚構でせう。しかし真実はその他にあります。この作品の中で、貴族の娘が作家に恋ふる余り、その後を追ひかけるところがあります。彼女は荻窪駅から一時間近くも暗い郊外の路地をうろついて、二軒長屋のうちの二軒にたどりつき、電球もきれてしまつた暗闇の中で作家の奥さんと話を交します。不在なので駅前のおでんやにゆき、そこから阿佐ヶ谷駅へゆき、一丁半歩いて金物屋のところから右へ半丁の小料理屋へゆきます。そこにも居ません。最後に西荻窪のチドリといふ家でやつと男を見つけます。土間があつて、すぐ六畳の部屋があつて、十人ばかりの人間が煙草の煙でもう／＼した中で大騒ぎの酒盛をしてゐました。それは紳士とお嬢さん達だと書いてあります。その中で目指す男の作家は、蓬髪で、それが赤茶けて薄くな

り、顔は黄色くむくんで、眼のふちが赤くたぐれて、前歯が抜け落ち、絶えず口をもぐもぐさせて、「一匹の老猿が背中を丸くして部屋
の片隅に坐つてゐる感じ」だったと書いてあります。人たちはギロチン、ギロチン、シユルシユルシユと云ふ変な強迫観念じみた呪文を唱へながら絶えず乾杯してゐます。「貴い犠牲者の顔」。彼女はさう感じて、その明朝、彼の寝顔を「この世にまたと無いくらゐにとても美しい顔のやうに」思ひ、胸をときめかせながら、そのひとの髪を撫でながらキスします。太宰治氏は自分の環境を痛々しいばかりによく知つてゐたやうです。作家達はどうしてその環境をぬけ出ないのですか。世界はひろく、そこにあるものを認識したならば、虚構よりもつと偉大なものがあるかも知れないのに、さうでない限り、この作品は遂に一群の作家の心の悲劇に終るのです。

〔付記〕 初出誌には、「斜陽」の標題の下に、「一」2～18頁、「二」18～24頁、と掲載。ただし、目次には「斜陽(連載第一回)」とある。初出誌「編集後記」には、つぎのように記されている。

本号より太宰治氏の長篇「斜陽」を連載することにした。原稿は全部で三百枚一回約八十枚づつ、遅れても本年中には完結する。氏の久しぶりの長篇小説として御期待ありたい。

なお、初出誌は、「昭和二十二年六月三十日印刷納本」「編集兼発行者斎藤十一」「発行所／東京都新宿区矢来町七二／株式会社新潮社」で、「夏季小説号」欄には、太宰治「斜陽(連載第一回)」、井伏鱒二「高田館」、大鹿卓「南京の一人」、里見弴「いろをとこ」の諸作が掲載されている。

序(仮題)・ろまん灯籠・用力社・昭和二十二年七月十日発行・扉裏
『太宰治全集第十巻』(筑摩書房、昭和五十二年二月二十五日発行)に、全文収載された。

〔付記〕 末尾に「――作者――」とある。無題。

朝・新思潮・第十四次創刊号、第一巻第一号・昭和二十二年七月十日発行・72～75頁・「小説」欄

『太宰治随想集』(若草書房、昭和二十三年三月二十一日発行)に、全文収載された。

『太宰治全集第十三巻ヴィヨンの妻』(八雲書店、昭和二十四年四月三十日発行)に、全文収載された。

〔同時代評〕 菊池章一「その後の戯作派」(『戦後の論理』雄山閣、昭和二十三年九月十日発行)には、つぎのように記されている。

夢と現実との幻想的な混同をとらえる「フォスフォレスセンス」(日本小説第二号)も、主人公が性的過失の一手手前で偶然的に解放される「朝」の安堵感も同じ独白の技巧である。それらの情趣は作者の基本的な観念性にたいするりよう解なしにその真の意味や効果を保ちがたい。しかもこのりよう解なしにそれらの情趣はなお通俗的な興味に耐えるものである。

〔付記〕 末尾に「(終)」とある。初出誌表紙には「第14次／創刊号」「(第一巻・第一号)」、目次には「第一四次新思潮創刊号」裏表紙には「第一巻第一号」と印刷されている。なお、初出誌は「昭和二十二年七月一日印刷納本」(奥付には「昭和二十二年七月十日印刷」)「編輯人中井英夫」「発行人宗万誠」発行所「東京都板橋区練馬南町一ノ三四

○五東京支社／札幌市南二条西四丁目／玄文社」で、「小説」欄には、太宰治「朝」、宮内寒弥「谷間の灯」、緑川弓雄「屋漏」、吉波康「風と火の塔」の諸作が掲載されている。

斜陽(長篇連載 第二回)・新潮・八月号、第四十四卷第八号・昭和二十二年八月一日発行・44～63頁

以下、「斜陽(連載長篇 完結)」まで、翻印状況については「斜陽(連載 第一回)」の項を参照のこと。

〔同時代評〕以下、「斜陽(連載長篇 完結)」まで、「斜陽(連載 第一回)」の項を参照のこと。

〔付記〕初出誌には、「三」44～55頁、「四」55～63頁、と掲載。初出誌「編集後記」には、つぎのように記されている。

創作は、太宰氏の長篇第二回をのせた。これは既に書いたやうにと二回、十月号をもつて完結する予定である。

なお、初出誌は、「昭和二十二年八月一日印刷納本」「編集兼発行者 斎藤十一」「発行所／東京都新宿区矢来町七一／株式会社新潮社」で、同誌に掲載されている小説は、「斜陽(長篇連載 第二回)」だけである。

『井伏鱒二選集』草案(仮題)

『太宰治全集第十卷』(筑摩書房、昭和五十二年二月二十五日発行)に、全文収載された。

〔付記〕昭和二十二年八月頃の執筆か。

斜陽(長篇連載 第三回)・新潮・九月号、第四十四卷第九号・昭和二十二年九月一日発行・41～63頁・「小説」欄

〔付記〕初出誌には、「斜陽(長篇連載 第三回)」の標題の下に、「五」41～54頁、

「六」54～63頁、と掲載。末尾に「―次号完結―」とある。ただし、目次には、「斜陽(連載 第三回)」とある。なお、初出誌は、「昭和二十二年八月三十日印刷納本」「編集兼発行者 斎藤十一」「発行所／東京都新宿区矢来町七一／株式会社新潮社」で、「小説」欄には、中山義秀「仇し野」、太宰治「斜陽(連載 第三回)」が掲載されている。

斜陽(連載長篇 完結)・新潮・十月号、第四十四卷第十号、「秋季小説号」・昭和二十二年十月一日発行・55～68頁・「秋季小説特輯」欄

〔付記〕初出誌には、「斜陽(連載長篇 完結)」の標題の下に、「七」55～62頁、「八」62～63頁、と掲載。ただし、目次には「斜陽(長篇連載 完結)」とある。初出誌「編集後記」には、つぎのように記されている。

太宰治氏の長篇連載「斜陽」は、本号をもつて完結した。七月号に第一回が発表されるや、各方面から激賞讃辭が殺到したが、現在までの連載ものでは往々龍頭蛇尾に了る例が数多かつたので、一抹の不安があつたが、二回、三回と続くに従つて、それらの讃辭が決して空虚でないことが事実として證明された。鋭い近代感覚と、高い文学精神とが、心にくいまでに巧妙な筆致で、この一篇を見事に完結させたのである。恐らく、この「斜陽」は、本年度日本文学における最高の収穫ではあるまいか。完結を機会に、太宰氏に読者諸君と共に厚くお礼を述べたい。／なお「斜陽」は、近日小社より刊行される予定である。

なお、初出誌は、「昭和二十二年九月三十日印刷納本」「編集兼発行者 斎藤十一」「発行所／東京都新宿区矢来町七一／株式会社新潮社」で、「秋季小説特輯」欄には、細川宗吉「戦艦大和」、船山馨「現在」、

井上友一郎「あしのまろや」、北條誠「曲芸」、田村泰次郎「檻」、太宰治「斜陽」(長篇連載)の諸作が掲載されている。

おさん・改造・十月号、第二十八巻第十号・昭和二十二年十月一日発行

・55頁・小説欄

『桜桃』(実業之日本社、昭和二十三年七月二十五日発行)には、全文収載された。

『太宰治全集第十三巻ヴィヨンの妻』(八雲書店、昭和二十四年四月三十日発行)に、全文収載された。

〔同時代評〕 菊池章一「戦後の文学的断面(一九四七年一〇月)」(『戦後の論理』雄山閣、昭和二十三年九月十日発行)には、つぎのように記されている。

また同じ太宰の短篇『おさん』(改造一一)は『紙屋治兵衛』の現代的解釈のごときものであり「革命」はどうしても「起きなければいけない」もので、その「本質」は「かなしくて、美しいものなんだ」と泣きながら妻に語る弱気なジャーナリストの夫が型どおりに心中したあとで、残った妻は「夫をつくづく、だめな人だ」と思い、「夫はどうしてその女のひとをもつと公然とたのしく愛して、妻の私までたのしくなるやうに愛してやることが出来なかつたのでせう」といふ、「気の持ち方を、軽くなるりと変へるのが真の革命で、それさえ出来たら、何のむづかしい問題もない筈です」と批判するのである。こゝでは前者の論議の顛倒を指摘することも、後者の批判の観念的な正しさを認めることも共に適当ではない。前者ではむしろそうした女主人公が生れた子供をたつた一度恋人の妻に抱かせて、これは死んだ弟が

「ある女の人に内證に生ませた子」だといつてみたいという願いを抱いているところに顛倒した論議のイマージュがかゝわり、後者では妻の批判の正しさこそ治兵衛の妻「おさん」の悲しい賢明さであるといふところに作者の意図がこめられている。／＼むきだしの論議と抽象的な観念そのものによつてかえつてそれらのものゝ否定が行われているわけであるが、しかもこの否定が依然として観念的抽象的なものにとゞまつていふことにはかわりはない。

十返肇「太宰治論―罪と革命の意識」(『肉体』第二巻第四号、昭和二十三年八月二十五日発行)には、つぎのように記されている。

それは「おさん」で良人に対して妻が「ひと」を愛するなら、妻を全く忘れて、あつさり無心に愛してやつて下さい」という言葉のもつ意味に通うものであろう。ここに氏の自己反省があり、この良人から妻への推移こそ、作者が今日のデカダンス横風の風潮にたいするささやかながら謙遜な抗議である。／＼しかし「妻を全く忘れて、あつさり無心に愛せよ」と希われてもその様に成り得るものではない。もし、そう出来るならば苦悶は無い筈だ。何故そう出来ないものであろうか。それは唯たんに「男のひとは妻をいつも思っている事が道德的だと思ひ感違ひしている」為でもなければ「おのれの妻の忘れないのはいい事だ、良心的だ」と信じている為のみではない。そういう道德的観念も確かに在るであらう。然し、その観念ももはや観念ではなく感覚と化しているとすれば、それは即ち愛情といつていいであらう。このような良人たちもつまりは妻を愛しているのである。唯その愛情が自己批判のもたらせた自己の醜悪無力に対する劣等感と結びつくので卑屈

にしか表現されないのである。／良人は妻が自分よりも優れた人間とは思わぬまでも人間として正しさを持つているもののように感じて、妻をその様な自分が愛している事にすら気怯れを覚えるのである。その様な自己に対する抜き難い劣敗感が益々彼をデカダンスにして行くのである。したがって良人が「大事にしているつもりなんだ。君は本当にいいひとなんだ。つまらないことを気にかけず、ちゃんとプライドを持つて、落ちついていなさいよ」というのは皮肉でもお世辞でもない良人の偽らぬ願ひである。「妻よ、君は誇り高く立派であれ。俺が駄目であればあるほど君は立派でなければならぬ。君が立派でいて呉れれば呉れるほど俺は苦しいけれど、また君が立派でいて呉れなければ俺の苦しみは余りにも無役であり過ぎる」と良人はいうのである。即ち、これを逆にいえば妻の立派さは、かかる良人の苦悩のおかげなのである。良人の放蕩が苦悶の反映ではなく単なる快楽児の乱行に過ぎなかつたならば、妻にこのような美しさは生れない。いわば妻に見られるヒウマニティは、良人のデカダンスによつて産み出されたものである。激毒が劇薬として役立つように、妻の立派さは良人の駄目さを母胎として創生したのである。駄目な良人の、自分は駄目だという苦悶が、妻を無意識に立派にするという作用を果しているのである。／この良人たちは、いわば「いい事も出来る心で悪い事をしていく」人達なので、その「いい事の出来る心」が妻に反映して妻をこの様に立派にするのである。したがって妻のヒウマニティは、良人の自己批判のもつヒウマニティの無意識的再生である。そして、かかる良人の苦悶とは、即ち初期以来この作者が迫及して止まなかつた罪の意識、

自らに対する悪の観念に他ならないのである。ひとが生きて行く為に心ならずも感じざるを得ぬ己れの罪悪感という倫理的意識である。この良人どもは他ならぬ戦前の作者自身の肖像であり、これを批判する妻たちが戦後の作者の思想的肖像であるというべきであろう。

竹内俊吉「断片」(『月刊読物』第一巻第六号「特集太宰治をおもう」昭和二十三年九月一日発行)には、つぎのように記されている。

小説「おさん」を読む。太宰治はもう自殺などする人ではなくなつたと思つた。昨年の十二月。

〔付記〕 初出誌は「昭和廿二年九月廿一日印刷納本」「編集発行人山本俊太」「発行者／東京都中央区京橋一丁目三番地／改造社」で、「小説」欄には、田村泰次郎「鳩の街草話」、太宰治「おさん」が掲載されている。

あとがき・女神・白文社・昭和二十二年十月五日発行・221頁

『太宰治全集第十巻』(筑摩書房、昭和三十一年七月二十日発行)に、全文収載された。

〔付記〕 末尾に「昭和二十二年夏」とある。

文學の曠野に・小説新潮・十一月号、第一巻第三号・昭和二十二年十一月一日発行・58頁・「吾が半生を語る」欄

『如是我聞』(新潮社、昭和二十三年十一月十日発行)に、「わが半生を語る」の題で、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ草』(近代文庫23)(創芸社、昭和二十七年七月一日発行)に、「わが半生を語る」の題で、全文収載された。

〔付記〕 初出誌の文章末尾には、「(在文責記者)」とある。なお、初出

誌は、「昭和二十二年十月二十七日印刷納本」「編集兼発行者佐藤俊夫」「発行所／東京都新宿区矢来町七一／株式会社新潮社」で、「吾が半生を語る」欄（目次には「我が半生を語る」とある）には、林芙美子「到る処青山あり」、太宰治「文学の曠野に」が掲載されている。

序・村上芳雄著『洋燈』・第一書店・昭和二十二年十一月十日発行・1・4頁

『如是我聞』（新潮社、昭和二十三年十一月十日発行）に、「『洋燈』序——村上芳雄のこと」の題で、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日発行）に、「村上芳雄著『洋燈』序」の題で、全文収載された。

〔同時代評〕 柿添茂「太宰治に聞いた話——その印象と言葉」（『時代』第三巻第八号、昭和二十三年八月一日発行）には、つぎのように記されている。

トルストイ／太宰氏のトルストイを嫌ふこと、実に尋常一様ではない。氏が槍玉に挙げたのは「戦争と平和」であつたが、長いことが既に我慢ならぬことの様であつた。問題は「戦争と平和」にあるのではなく、西洋の大文学、大小説にある様であつた。この気持は、村上芳雄氏の「洋燈」の序文によく表れてゐる。恰度その本を送つて来てゐた時で、氏はその序文を僕に示し、愉快さうに大笑された。そこにはトルストイのみならず、ドストエーフスキイもドスト先生といふ名を賜つて、揶揄されてゐた。氏には、欧露の大文学も、よく／＼肌には合はない様であつた。氏は芥川の短篇の無駄のなさに比べると、チエホフ

の短篇も冗漫だと断言された。勿論それはチエホフのみではない。／「外国の作家は、冗漫だ。」／何の躊躇もなく、さう断言されたのである。

〔付記〕 末尾に「昭和二十一年早春」とある。なお、『洋燈』は、「昭和二十二年十一月五日印刷」「著作者村上芳雄^{むらかよし}」「装幀者土屋義郎」「企画者大倉信昌」「校正者原将雄」「発行者石井計記」「印刷者鞍智雄章」「印刷所浜松市上池川町株式会社開明堂」「版元豊橋市松葉町株式会社第一書店」で、太宰治「序」のほか、「洋燈（前篇）」（3～62頁）、「洋燈（後篇）」（63～144頁）、「南瓜の花」（145～173頁）、「青蛙」（175～215頁）、「あとがき」（217～218頁）の諸篇が掲載されている。

小志・朝日新聞・第二二一六三号・昭和二十二年十一月十七日発行・1面・「学芸」欄

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日発行）に、全文収載された。

〔付記〕 新仮名遣。

〔追記〕 この稿を草するに際し、つぎの諸氏、諸図書館、諸社の助力を得た。記して深く謝意を表する。伊藤誠之氏、小野正文氏、瀬尾政記氏、肥田睦三氏、村上芳雄氏、森永国男氏、渡部芳紀氏、神戸女学院大学図書館、国学院大学図書館、国立国会図書館、日本近代文学館、阪急学園池田文庫、彦根市立図書館、筑摩書房。

原稿受理 一九八四年十二月七日